

末日聖徒イエス・キリスト教会

# 聖徒の道

1985

4/5月号



# 聖徒の道

## 1985年4/5月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：スペンサー・W・キンボール、マリオーン・G・ロムニー、ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒定員会：エズラ・タフト・ベンソン、ハワード・W・ハンター、トーマス・S・モンソン、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、ブルース・R・マッコンキー、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・バラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン  
編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット

聖徒の道 1985年4/5月号第29巻第3号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
〒106東京都港区南麻布5-10-30  
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)  
半年予約1,100円(送料共)  
普通号250円,大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0540JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1985 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急に資材管理部配送センターにご連絡ください。●「聖徒の道」についてのお問い合わせ……〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820



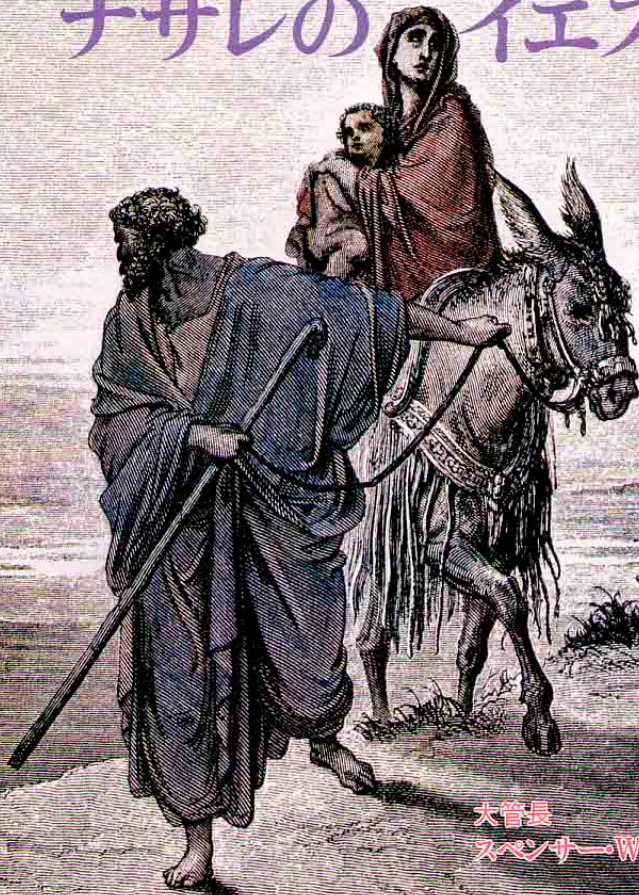
悪霊につかれた人を  
をいやすイエス  
(ルカ4:31-37)

### ●——もくじ

表紙●「主イエス・キリスト」(デル・パーソン画)

ナザレのイエス	スペンサー・W・キンボール	1
モルモン経探求：第2部	ジョン・L・ソレンソン	6
会員宣教師になる	リンゼイ・R・カーティス	14
「自身の家を整うべし」	マリオーン・G・ロムニー	16
みたまによって教える	ローレン・C・ダン	21
誕生日のプレゼント	フロイド・ダウン・マッケイ	24
質疑応答：悔い改め/サタンの限界	ジェリー・テイラー/ローレンス・R・ピーターソン・ジュニア	27
家庭の夕べで学ぶ信仰箇条	エリザベス・マーティンセン	29
「その好むところに従って」	ディーン・R・ラーセン	30
ふさわしい時に、ふさわしい所で	カースン・クリステンセン	33
あの場所は今(カメラによる教会史跡巡り)		35
日曜日は休業!	クウィンティン・ウォー, ラレイ・ウォー	41
各地のたより		
子供のページ(別冊付録)		
えいえんのかぞく		1
小さなお友だちへ(ジェームズ・E・ファウスト長老)		2
ぬりえ		4
アブラハムとサラ	「聖典からの物語」より	5
パレーシューズ	ポーラ・デボラ	10
おはなになまえをつけましょう		15

# ナザレのイエス



大管長  
スポンサー W・キンボール

このメッセージは、1981年12月号の「聖徒の道」に掲載されたものの一部である。今回は、キンボール大管長の指示により、家族の話し合いにも利用できるよう短縮して掲載する。

**私**たちは、主イエス・キリストにどれほど深い感謝の気持ちを抱いていることでしょうか。主の誕生、生涯、そして死は、あらゆるものの中で最も偉大なものでした。主は私たちの罪の贖いのために亡くられました。それは私たちの復活のために道を備え、完成に至るための道を教え、昇栄への道を示すための死だったのです。主の死には明らかな意図があり、またそれは主ご自身の意志によるものでした。主の誕生はつましいものでしたが、その生涯は完全なものであり、その模範は人の心を動かさずにはおかないものでした。主の死により諸々の扉が開かれ、人にはあらゆる良き賜と祝福が与えられるようになったの

です。

人には皆自由意志が与えられています。私たちは、キリストが生死を賭けて私たちに与えようとした祝福をことごとく受けることができるのです。しかし私たちがそれを受けようとしなければ、キリストの死もその計画もむだになってしまいます。「見よ、われは神なるに、人もし悔い改むるならばこの苦しみを受けざらんがために、すべての者に代りてこの苦しみをわが身に受けたり。」(教義と聖約19:16)

救い主が来られたのは、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」ためでした。(モ一セ1:39) 主の誕生、死、そして復活は確かに不死不滅をもたらしました。しかし、永遠の生命に到達するためには私たち自身も努力しなければならないのです。

主はニーファイの民に向かい、昇栄に至る永遠の計画とは何かということについて次のように短くまとめて言われました。「汝らはいかなる人物にてあるべきか。まこと

に汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(IIIニーファイ27:27)

ユダヤ人の群衆を山の上まで導かれたイエスは、昇栄に至るために何が必要であるかきわめて詳細に語られました。あの名高い山上の垂訓の中には、あらゆる戒めとあらゆる条件とが含まれていたように思われます。「それだから……あなたがたも完全な者となりなさい。」(マタイ5:48)

おそらく、イエスはもっと若いときに亡くなって、ご自分に求められている第一のこと、すなわち復活と不死不滅とに到達することもできたでしょう。しかし完成への道を確認たるものとするために、もっと長く、そして危険に満ちた生涯を送らなければならなかったのです。

イエスは、30年以上もの間、危険と背中合わせの生活を送られました。ベツレヘムの幼な子たちを皆殺しにせよという恐ろしい命令が出されたヘロデの時代から、血に飢えた群衆に引き渡されたピラトの時代に至るまで、イエスは絶えず危険にさらされていたのです。ご自分の首に報奨金がかけられるという危険に満ちた生活の中で、イエスは最後には銀30枚という値で売られました。イエスの生活を脅かしたのは、敵意を持っていた者たちだけではありません。その友でさえ、イエスを見捨てようとしたのです。そしてサタンとその仲間たちも、絶えずイエスをつけねらっていました。イエスは若くして亡くなられた後も、まるで地上を去り難く思っておられるかのように、さらに弟子たちに訓練を施されました。40日の間地上にとどまり、使徒たちを指導者として訓練し、また彼らに従う人々が聖徒と呼ばれるにふさわしい者となるように、導きを与えられたのです。

イエスの生涯を見てみると、予言が様々な形で成就しているのがわかります。予言の通り、イエスは「悲しみの人で、悲しみを知って」おられました。(欽定訳イザヤ53:3) ご自身が喜びも悲しみともに経験していなければ、どのようにして、主に従う人々を間違いなく導くことができたでしょうか。また、主の戒めに従う道を私たちに示すことができたでしょうか。だれかができるということを証明しなければ、人が完全になれるかどうか、どのようにして知ることができたでしょうか。また、だれが完成に向かって努力してみようという気持ちになったでしょうか。だからこそイエスは、生涯を通じて、数々の試練の中を歩ま

れたのです。

イエスは伝道を始めて間もない頃に、完全な者となりなさいという戒めを与えられました。おそらくイエスは、これから立ち向かわなければならない数々の試練の中で一体どんなものに出会うことになるのか、すでにある程度はご存じであったものと思われまます。主ご自身、完全な者となるという並みはずれた理想に従った生活ができるのだろうか、今後絶え間なく訪れてくる緊張に耐えて生きていくことができるのだろうか、と思案されたに違いありません。

しかしイエスの毎日の生活は、イエスの力と、能力と、強さとを立証するものでした。イエスの生涯は、その誕生のときから試練に満ちていました。普通のイスラエル人の家庭には当然あってしかるべき設備もないまま、飼葉おけの中に生まれたイエスは、いわば招かれざる客でした。客間には幼な子たちのいる余地がなかったのです。

まだ幼い頃、イエスをご自分の命を守るために、遠い国へ急いで連れていかれたこともありました。それは、急を要する恐ろしく危険な旅でした。生まれたばかりの幼な子、しかもおそらくは、まだ母の乳を飲んでいたと思われる幼な子にとって、まぎれもなくつらい旅だったに違いありません。そして、エジプトからナザレへの帰りの旅は、それ以上に長く苦しい旅でした。これもまた、冷酷な支配者から逃れるためのものでした。

イエスの試練は、とどまるどころを知りません。おそらくルシフェルは、イエスがまだ12歳の少年だった頃に語られた言葉を聞いていたに違いありません。イエスはこう言われました。「わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか。」(ルカ2:49) やがて、イエスをわなにかけようとするサタンを試みが始まりました。前の世でのふたりの出会いは、もっと対等な条件下にありましたが、今回はイエスの方はまだ若く、一方、サタンは十分な経験を積んでいるのです。サタンは巧妙な方法でけしかけて、救い主を滅ぼそうと考えました。イエスがすでに、ご自分は天父と親子の関係にあると語っておられたので、サタンはこの点から攻めてみることにしました。長い断食のあとで空腹になっておられたイエスには、何か食べるものが必要でした。こうしてイエスに、あの冷酷な問いかけが浴びせられたのです。「もしあなたが神の子であるなら、これらの石が

パンになるように命じてごらんください。」(マタイ4:3) このときのパンは、本当に良い味がしたに違いありません。

次に、宮の頂上に連れていかれたイエスの心に、醜い思いの種が示されました。「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんください。『御使たち……はあなたを手でささえるであろう。』」(マタイ4:6) おそらく主はこのとき、ご自分の中に無限の力があることを完全に感じ取っていたことでしょう。しかし、その力を自分自身のためや、サタンのよこしまな挑戦に応じたりするために利用することは、決してしてはならないことだったのです。

そして最後に、非常に高い山に連れていかれたイエスは、そこで国々の富や、王、皇帝たちの権勢、さらにそのあふれんばかりの栄光とを見せられました。それは、いかなる望みや欲求、情熱であっても、十分に満足させてくれるものだったのです。サタンは大胆な約束をしてくれました。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう。」(マタイ4:9)

しかし、サタンのこうした申し出をイエスは頑強にことごとく退けられて、こう言われました。「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。」(マタイ4:10)

イエスの生涯は、どれほど孤独で、寂しいものだったのでしょうか。イエスには、個人としての生活などは望むべくもなかったのです。いくたびイエスは、病を癒された人に向かって、「何にも人に話さないように、注意しなさい」と言われたことでしょうか。しかし、イエスのみ力を受け、その恵みを施された人々は、出て行って自分の身に起こったことをほめたたえ、ほかの人々に言い広め始めたのです。そのために、「イエスはもはや表立っては町に、はいることができなくなり、外の寂しい所にとどまっておられた」のでした。(マルコ1:45)

イエスの言われた言葉には、絶えず反駁がつかまといました。イエスは、ご自分が教えられる原則を一つ一つ弁護しなければならなかったのです。「なぜ、あなたは断食をしないのか。」「なぜ、あなたの弟子たちは清くないままの手で食事をするのか。」「なぜ、安息日に病人を癒したりして聖日を汚すのか」といった問いかけに、一々応じておられたのです。ところが指導者たちは、安息日に病人を癒したということで、イエ

スを殺そうとさえしていたのでした。

イエスに敵対する者たちは、なんとかしてイエスをわなにかけようと思死でした。それだけでも大変なことなのに、そのときにはイエスの友でさえ、心休まる存在ではありませんでした。こう書かれています。

「イエスを取押えに出てきた。気が狂ったと思ったからである。」(マルコ3:21)

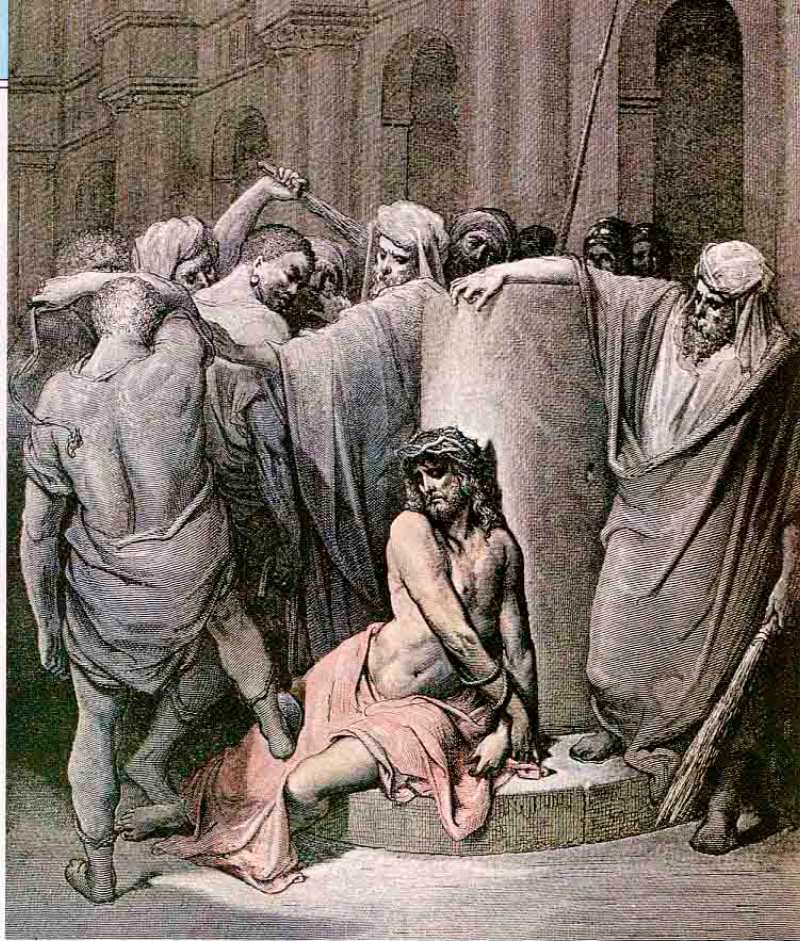
イエスは心のやすらぎを求めて、だれのところへ行くことができたでしょうか。御父から慰めを受けようと、御父とふたりきりになるために、たびたび山へ登っていかれたのは、そのためだったのでしょうか。真に信頼できる人もなく、行く場所もまったくないイエスの生活は、孤独で寂しいものだったに違いありません。イエスは、こう言っておられます。「きつねには穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子にはまくらす所がない。」(ルカ9:58)

そこでイエスは、丘に登られるのですが、そこにも人々はついてきます。海を渡れば、そこにも大群衆が待っています。休みをとるために、船の中で横になっていれば、今度は「わたしどもがおぼれ死んでも、おかまいにならないのですか」(マルコ4:38) という、いかにも批判的な言葉で、荒々しくたたき起こされる有り様です。イエスがゲラサの地方に上陸されたとき、人々はイエスの奇跡に恐れをなして、「自分たちの所から立ち去ってくださるようにとイエスに頼」む始末でした。(ルカ8:37) そのために、イエスは再び船に乗られ、ガリラヤの海を戻っていかれたのでした。

イエスが人々に食糧をお与えになったときも、人々はイエスに従っていきましたが、それとても正しい理由で従っていったわけではありませんでした。「あなたがたがわたしを尋ねてきているのは……パンを食べて満腹したからである」(ヨハネ6:26)とイエスは言われました。

イエスが人々に厳しい教えを説かれ、その持ち物の多くを犠牲に捧げるように求められたときも、「多くの弟子たちは去っていった。もはやイエスと行動を共にしなかった」のでした。(ヨハネ6:66)

また、死に向かって歩んでいるときでさえ、イエスはご自分が選んだ十二使徒たちにこのように言わなければなりません。「あなたがた十二人を選んだのは、わたしではなかったか。それなのに、あなたがたのうちのひとりには悪魔である。」(ヨハネ6:70) イエスはそれ以来、毎日、裏切り



「ムウクトは、イエスを捕え、おちで打たせた。」(ヨハネ19・1)

仕返しをし、立ち向かっていくのは人間の常です。しかし主がなさったように、不適な行為をじっと受けて立つことは、神のなせる業なのです。あの裏切り者の接吻を受けたときも、イエスは、抵抗しようとはされませんでした。そしてイエスは、ご自分がまさに捕らえられようとしたときでさえ、忠実な使徒のペテロにご自分を弁護させようともされませんでした。そのとき、あの忠実な使徒ペテロは、自分の命を賭けてでも、主を守るために戦う覚悟ができていたのです。

一言の命令のもとに、天の使いを12軍団も遣わすことのできるイエスは、黙ってご自分の身を敵の手にゆだね、みそばに仕えていた勇敢な使徒たちに、その武器を納めるようにと命じられました。イエスは、いささかの反論もせず、こうした手荒で不敬な扱いを甘んじて受けられたのです。そのときイエスは「あなたがたの敵を愛しなさい」(マタイ5:44参照)と言っておられたのではないのでしょうか。

人々がみ顔につばをはきかけたときも、イエスは静かに気持ちを抑え、神々しいまでの威厳を保っておられました。落ち着いた態度を決して崩すことなく、ひと言も怒りの言葉をもらすことはありませんでした。人々は、イエスのみ顔や体をむち打ちました。しかし、それでもイエスは、恐れることなく、決然として耐えておられたのです。

イエスは、ご自分の説かれた教えを、文字通りに実践されました。イエスは、もう一方の頬をも打たれようとして、敵にその頬を向けられたのです。(マタイ5:39参照) イエスは、へつらうことも、拒むことも、また反駁することもされませんでした。金に目がくらんだ証人たちが、イエスについて偽りの証言をしたときも、イエスは彼らを責めることはされませんでした。彼らはイエスの言葉をねじ曲げ、その意味を誤って解釈していたのです。それでもイエスは静かに耐え、心乱すこともありませんでした。「汝らをないがしろにして責め苦しむ者のために祈れ」(IIIニーフай12:44)と、教えておられたのではないのでしょうか。

この世界とその中にあるすべてのものを創造されたお方。ご自分の売買に使われた銀貨の材料となった銀を造られたお方。ひとたび命を下せば、とばりの両側からご自分を守護する者たちを呼び寄せることのできるお方。そのお方が静かに耐え、苦しみを受けられたのです。

者と共に歩まれたのです。

なんと寂しく、またなんと寒々とした光景でしょうか。死がすぐそばに迫っていることを知りながら、イエスは、ひたすらそれから逃れ、時期を待っておられたのです。イエスは「ユダヤ人たちが自分を殺そうとしていたので、ユダヤを巡回しようとはされなかった」のでした。(ヨハネ7:1)

イエスは、身分を隠して出かけようとしたのですが、「隠れていることができなかつた」(マルコ7:24)と書かれています。

イエスの心を最も痛めることが、郷里に帰られた折にも起こりました。イエスを迎える歓迎の宴があるわけでもなく、ただ待ち受けていたのは、人々の好奇心と冷たい視線だけでした。「この人は大工ではないか。マリヤのむすこで」(マルコ6:3)、その辺にいる普通の男ではないか、というのが郷里の人々の声だったのです。

「そして、そこでは力あるわざを一つもすることができず、……彼らの不信仰を驚き怪しまれた」(マルコ6:5-6)とあります。郷里の人々の嫉妬心のゆえに、また冷たい仕打ちのゆえに、力あるわざをなさらなかったのです。何という寂しい帰郷でしょうか。哀れなナザレの町、そして愚かしいナザレ人たちは、自分たちの贖い主が、

その生まれ故郷であるナザレに帰って来たというのにそれを拒んだのです。この人々は、イエスが素早く逃げなかつたならば、ナザレの山の頂から、イエスを突き落とすつもりでいたかも知れません。またエルサレムでは、イエスを石で打ち殺そうとさえしたのです。「しかし、イエスは身を隠して、宮から出て行かれました」(ヨハネ8:59)

さらにまた別の説教をしたあとも、「彼らはまたイエスを捕えようとしたが、イエスは彼らの手をはなれて、去って行かれた」とあります。(ヨハネ10:39)

イエスを捕らえた者には報奨金が出るようになっていたため、イエスの身は絶えず危険にさらされていました。人々はイエスを死刑に追い込むために、その居所をつきとめるよう命令されていたのです。死の影は、イエスの前にあり、わきにありという状態で、イエスの行かれる所へはどこにでもつきまといました。

たったひと言の命令でいちじくの木を枯らすことのできるイエスが、ご自分の敵に向かってのろいの言葉を言わずにおくというのは、想像するまでもなく、むずかしいことだったに違いありません。ところがイエスは、その敵のために祈られたのです。

何という威厳、何と完成された人格、何と優れた自制心でしょうか。この完全で、罪もなく、善良なお方。また、命の君とも正義とも呼ばれたこの救い主は、殺人者であり、煽動家であり、暴徒でもあったバラバと、ひとつはかりに乗せられ、罪の軽重を問われました。結局、キリストを十字架にかけ代償としてバラバの方が釈放されたのですが、そのときでさえ救い主の口からは、不正な決断を下した総督を責める言葉は、ひとつも出なかったのです。

「バラバをゆるしてくれ」(ルカ23:18)と叫ぶ人々に向かっても、救い主は何も言われませんでした。「十字架につけよ、彼を十字架につけよ」(ルカ23:21)と叫びながら、人々が主の死を求めたときも、救い主は、うらみつらみを言うでもなく、人々を非難するでもなく、ただただその心に平安を保っておられたのです。これこそ神ならではの威厳、力、克己心、そして自制心でしょう。「バラバの代わりにキリストを！」という叫び。不正な者の代わりに正しい者を差し出せというのです。結局、聖なるお方が十字架にかけられ、罪ある者が釈放されることになりました。しかしそれでも、人々から罪の宣告を受けたそのお方の口からは、復讐の言葉も、悪口も、そして非難の言葉すら聞かれませんでした。稲妻が人々を打つということもありませんでした。そうすることもできたというのに。地震が来て、イエスを救い出すということもありませんでした。激しい地震を起こすこともできたというのに。天の使いたちが、武器を携えてイエスのもとへ急ぐということもありませんでした。天の軍勢はその準備が整っていたというのに。そこから助け出してほしいという願いは、ついにイエスの口からは聞かれませんでした。その身を変えていただくこともできたというのに。イエスは、ただじっと耐え、その身にも心にも、苦しみを受け続けておられたのです。それは、「のろう者を祝福せよ」(欽定訳マタイ5:44)と、教えておられたからにはほかなりません。

しかしそれでもなお、試練は続きます。罪はないと宣告されながらも、まだむちで打たれるのです。何らその値打ちもない者たちが、イエスをむち打ちます。汚れを知らぬ聖なるお方を、神の御子を、むち打つのです。イエスの口からひと言でも出れば、敵対する人々はすべて力なく地に倒されるというのに。人は皆、滅ぼされ、ちりや灰

のような存在になってしまうというのに。イエスは、ただただ静かに苦しみに耐えておられたのでした。

十字架にかけられるために兵士たちに引き渡されたときでさえ、イエスはご自分をさげすむ者たちのために祈られたのです。イエスの衣服を脱がせ、代わりに赤い外套まで着せて、主に不敬を働く人々。このときイエスは、どんなにかつらい思いで、こうした屈辱に耐えられたことでしょうか。

そして、いばらの冠。いばらの間から流れ出る血こそ、人々の望んでいたものようです。それは、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」(マタイ27:25)と言っていたからです。もはや人々の働きを止めるものは何もありませんでした。血に飢えた心を満足させることしか、人々の頭の中にはなかったのです。その飢えを満たすことのできるのは、はりつけをおいてほかにありません。しかしその前に、人々は自分たちの加虐的な欲望を満足させるために、神聖なみ顔につばを吐きかけるのでした。

手には葦の棒を持たされ、肩に赤い外套を着せられ、頭にはいばらの冠をかぶせられた救い主は、不敬な行為にひたすら耐えられたのです。兵士たちはイエスを嘲弄し、なじり、あざけり、様々な難題を吹っかけてきます。イエスの手から葦の棒を取りあげると、イエスの頭をたたきます。しかしそれでも、イエスはじっと耐えておられました。長く耐え忍ぶという模範を示すかのように。

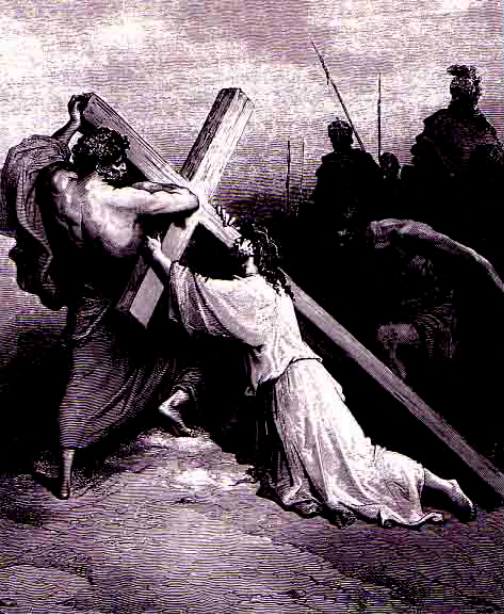
兵士たちは、なおもイエスのそばにたむろしています。卑しい心で礼拝のまねごとをし、あざけりながらイエスに祈りを捧げ、まやかしの敬意を払い、そして、おどけて笑いほうけるのでした。こうした醜い行為が、また、人間に対するこうした陰惨な行為が、そしてまた、知人や敵対する人に対するこうした悲痛を与える行為が、本当に、この汚れもなく清らかで、気高いお方に対して行なわれたと言うのでしょうか。一体いつになったら飽き足るのででしょうか。人は、どこまで卑しくなれるのでしょうか。ただ少しく神よりも低く造られた存在だというのに。神の姿かたちで形どって造られた存在だというのに。この犠牲者がもはや耐えることができなくなって、人々の墮落した精神を満足させることができなくなったら、一体どうしようというのでしょうか。

こうして人々は、傷つき、はれあがり、血のにじんだ体に、自分の死刑に使われる重い十字架を運ばせます。自分たちのたくましい肩には何も乗せずに、ただ無力な犠牲者が重い十字架を、汗を流してあえぎながら、ようやくのことで引きずり上げていく姿を、黙って眺めていただけだったので。しかし、本当にイエスは無力だったのでしょうか。12軍団もの天の使いたちが、イエスの命令を、今か今かと待ちわびていたのではないのでしょうか。すでに剣を抜いて待っていたのではないのでしょうか。主を助けに行きたいと思いつつもそれが許されないことに苦悩していたのではないのでしょうか。

わきを歩く群衆の数が増えるにつれ、あざけりもますますひどくなっていきます。群衆はイエスを見あげながら、いかにも意地が悪そうな目つきで不敬な言葉を浴びせ、悪態をつくのでした。「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。」(マルコ15:31)この人々は、イエスの行なわれた数々の奇跡を実際に見、またその話を聞いていたのです。風や波が、いかにイエスのみ言葉に従ったかを、らい病人たちがいかに清められたかを、また足なえがいかに歩くようになり、目の見えない人がいかに見えるようになり、そして、死者がいかによみがえったかを、皆知っていました。亡くなってからいく日もたち、すでにその体も腐りかけていたラザロが、いかにして墓の中からよみがえって歩き出したかを知っていたのです。

イエスは、ひとりで孤独の道を進んで行かれます。イエスの柔らかな震える手足に釘が打ち込まれ、苦痛はいよいよ増してきました。十字架が穴に差し込まれ、手足の肉が裂けます。何という苦痛でしょうか。そして新たに手首に釘が打ち込まれました。死体が地面に落ちて生き返ることがないようにするためです。

さらにまた、人々のあざけりが続きます。「他人を救ったが、自分自身を救うことができない。あれがイスラエルの王なのだ。いま十字架からおりてみよ。そうしたら信じよう。」(マタイ27:42)傷や傷あともなく、もとの完全な体で十字架から降りることもできた主にとって、それは何と大きな誘惑だったことでしょうか。何と大きなチャレンジだったことでしょうか。しかしイエスは決して心を乱すことなく、極度の苦しみの中で血の汗を滴らせて、ご自分に与



「そこへ、アレキサンデルとルボスとの父シモンというクレネ人が、効外からきて通りかかったので、人々はイエスの十字架を無理に負わせた。」(マルコ15: 21)

えられた使命に敢然と立ち向かっていかれたのです。その使命とは、ありとあらゆる不敬の中をひたすら前進して行って、最後に死を迎えること、そして心を開いて教えるに耳を傾ける老若男女すべてに生命をもたらすことでした。

こうして、間もなくこの世の生涯に別れを告げようとしているイエスは、ご自分の心を抑え、ご自分の力を「人々に見せる」という誘惑に打ち勝たれたのです。荒野において、石にパンになるように命じて飢えを満たしたらどうかと誘惑されたときのように、さらにまた、山の頂に立って、どんなことができるのかを実際に見せてくれたらどうかと、悪魔に誘惑されたときのように、このたびもまた悪魔はイエスに触手を伸ばしてきました。荒野で、山上で、宮の頂上でイエスを誘惑したあのルシフェルは、あの手この手で手下どもを煽動することに成功していたのです。今また同じ策略、同じ言葉を用いてイエスを誘惑します。「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい。」(ルカ23: 37) 十字架にかけられている泥棒もイエスをののしります。「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ。」(ルカ23: 39) 周囲は、イエスを迫害することなどいささかも罪とは思っていないような人々ばかりでした。きらびやかな法衣を身にまとって威張りちらす聖職者たち、そして民の

指導者たち。皆、卑屈で低俗で品位もなく、民と一緒にあってイエスをあざけり、ののしるだけでした。

いよいよ最後のときがやってきました。イエスは大量の群衆に囲まれながらも孤独でした。イエスを救い出すために今や遅しと待ち構える天使たちに囲まれながらも、孤独でした。御子は、苦しくてつらい道をひとりで歩まなければなりません。深い思いを寄せてくださる御父がみそばにおられても、イエスは孤独だったのです。孤独のまま、死を前にして熱っぽい体で力尽きようとしておられたイエスは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイ27: 46) と叫びました。あの園にひとりで行っておられたのはなぜでしょうか。苦きさかずきを飲む力を祈り求めておられたのです。

「あなたがたの敵を愛しなさい」とイエスは言われました。今やイエスは、人がどれほどその敵を愛することができるのかを立証されたのです。イエスが十字架の上で死を迎えられたのは、ご自分をそこに釘で打ちつけた人々のためだったのです。イエスは死に際して、人がいまだかつて経験したことのない苦痛を味わわれました。しかしそれでもイエスは、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23: 34) と叫ばれたのです。これが最後の言葉だとしたら何と崇高な行為でしょうか。ご自分を殺そうとしている人々、ご自分の血を求めて叫びをあげる人々を救すとは、何と気高い行為でしょうか。イエスは「汝らをないがしろにして責め苦しむ者のために祈れ」と言われました。イエスはここでそうした人々のために祈られたのです。イエスの生涯は、そのみ教えと完璧に一致していました。「それだから、あなたがたも完全な者となりなさい」と、イエスは私たちに命じられました。イエスはその生涯と死と復活とにより、私たちに確かにその道を示してくださったのです。

この時期にあつて、私たちは天父に向かい愛と感謝とを込めて、心からの祈りを捧げたいものと思います。父よ、私たちはあなたが確かに生きておられることをはっきりと知って感謝しています。またベツレヘムに生まれたみどり児がまことにあなたの御子であったことを知って感謝しています。さらにあなたの救いの計画が真実のものであり、私たちを昇栄に導くことのできるも

のであることに感謝しています。主よ、私たちはあなたをよく知っており、愛し、これからも従ってまいります。私たちはここに再び、私たちの生涯を、また私たちのすべてを、あなたの示された大義のために捧げます。

このうるわしい季節にあたり、世界中に住むあらゆる人々が、私たちの主であり、救い主であり、贖い主である神の御子イエス・キリストに喜びと愛と感謝とを捧げる私たちの祈りに、共に加わってくださいませよう心から願っております。

## ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

1. イエス・キリストは、私たちが復活するための扉を開き、私たちの生涯を完全なものとするための道を教え、そして昇栄へ至る道を示してくださいました。
2. イエスの誕生、死、そして復活は不死不滅をもたらしました。しかし私たちが永遠の生命に到達するためには、それに加えて私たちの努力が必要です。
3. イエスが悲しみも喜びも経験しておられなかったとしたら、どのようにして私たちに戒めを守る方法を示すことができたでしょうか。だからこそイエスは、生涯を通じてあらゆる試練の中を歩まれたのです。
4. 人が完全になることができるものかどうか、どのようにして知ることができるでしょうか。あるいは、それができるといふことをだれかが立証していなければ、完全になることを目標にして進歩しなさいという教えを受け入れることができるでしょうか。イエスは確かに、私たちにその方法を示してくださいました。

## 話し合いを進めるために

1. 救い主について個人的に抱いている気持ちを話す。家族にも話してもらうよう依頼する。
2. 家族で声を出して読んだり、話し合ったりするとよいと思われる聖句や引用文がこの記事の中にならうか。
3. 家長と話し合ってから訪問した方がよい話し合いができるのではないだろうか。救い主のみ業について、定員会の指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

# モルモン経探求：第2部

ジョン・L・ソレンソン

こ こ半世紀の間に、学問の面でも、科学の面でも著しく進歩したおかげで、モルモン経の正確さを裏づけられるような情報や、そこに書かれている内容を明らかにしていくうえで、実際に役に立つと思われる情報が生み出されてきている。本稿は、その歩みについて書いた3回連載物の第2部である。この半世紀で、末日聖徒によるモルモン経の研究もますます深められ、新しい光のもとで、モルモン経を古代アメリカの文献としてとらえるようになってきている。

この第2部では、こうした研究の成果のひとつとして、古代アメリカの生活に関する重要な分野をもうひとつ取りあげて考えてみたいと思う。

## 文字

新世界における文字の発達について、1935年頃、少数の専門家の間で支配的であった見解は、当時マヤ学の碩学であったシルベナス・G・モーリー博士の次の言葉に要約されよう。

「マヤの文字は、現存する文字体系の発達から見て、最も初期の段階にあるもののひとつである。……現存する記録で見る限り、整った文字体系としては、最も初期の段階にあると言ってもよい。

マヤの碑文では、おもに……年代記、天文学——おそらくは、占星術と言った方がよいだろう——そして宗教的な事柄といったことが扱われている。マヤの碑文は、エジプトやアッシリア、バビロニアの碑文とは異なり、いかなる意味でも、ある個人の賛美や自画自賛といったたぐいの記録ではない。王族の征服物語も含まれていなければ、王家の業績が詳述されているわけでもない。賞賛したり、ほめそやしたりしたものでもなく、また賛美したり、誇示したりしたものでもない。実際、個人に関係したものはまったく見いだせないため……ある特定の男女の名前を表わす絵文字は、マヤの碑文には何ら記録されなかったと考えた方がよいほどである。」(注1) もちろんこの見解は、現在あるモルモン経の内容とは、まった



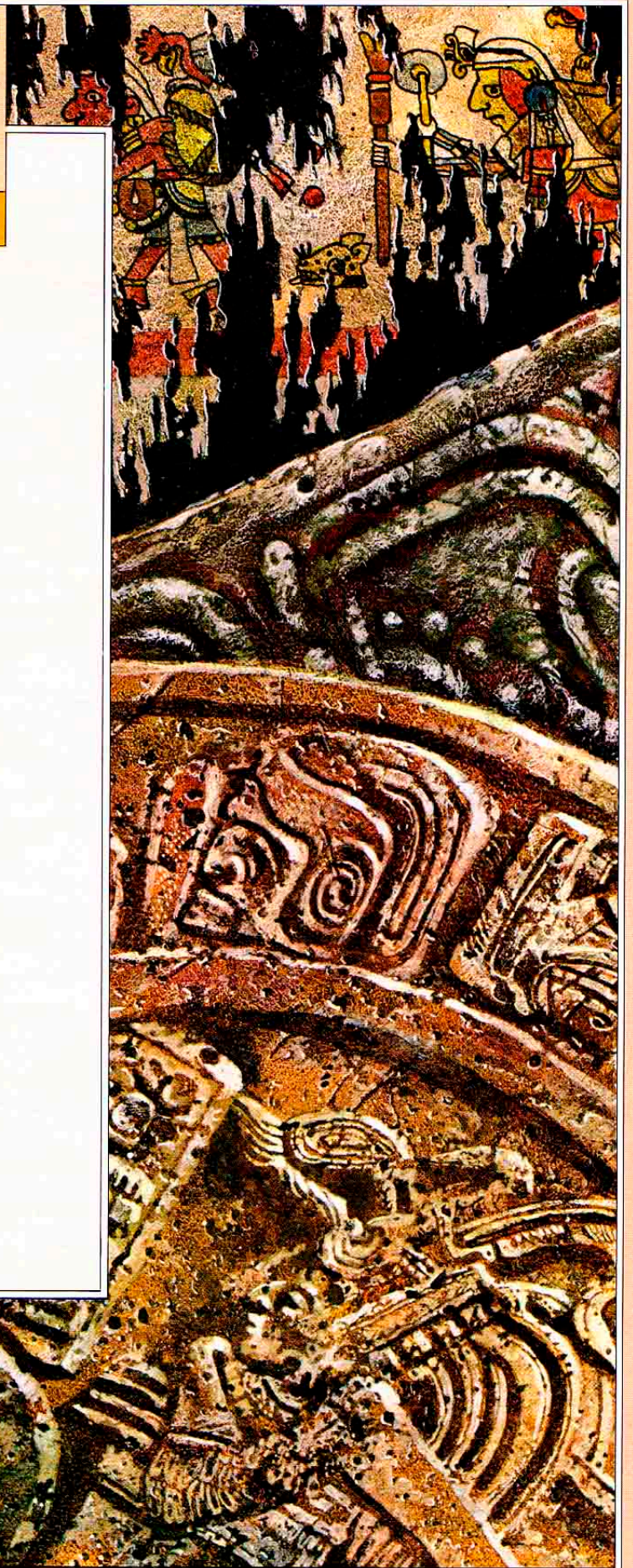


## 古代アメリカとその聖典に関する理解の変遷

く一致していなかった。

しかしながら1970年代までには、学問上の見解にも大きな変化が起きた。マイケル・コウは、モーリーの時代では標準的であった、マヤの碑文はほぼ「年代記的には無意味」であるとする考え方を、「きわめて変わった意見」であるとして痛烈に批判している。この変化は、1958年にハイน์リッヒ・ベルリンの研究をきっかけにして始まった。ベルリンの成果を、コウの文献から引用してみよう。「マヤのレリーフ(浮き彫り)とそこに刻まれた文は……魔術的な事柄や宗教的な事柄とは関係のない歴史記録であって、むしろ原始国家のごく普通の政治的不安定な状態を記した記録である。そこには、好戦的な支配者たちが、ほかのマヤ国家を自国の勢力下に置こうと画策したことなどが記録されている。」(注2) こうした新しい見方によれば、マヤの世界も、「征服や捕虜に対する辱しめ、また王族の結婚や王家の血統といった話の内容を考えれば、世界のほかの古代文明ときわめてよく類似している」(注3) ことがわかる。また、ニーファイ人やレーマン人の記録とも、さらによく符合することがわかる。

学者から見ると、モルモン経はほかの点でも、しばらくの間その信憑性が疑われていた。たとえばモロナイの記録によれば、「私たちのいわゆる変体エジプト文字」は、「代々私たちの間に伝わってきて、私たちの言語が変るにつれて変わった」(モルモン9:32参照)と書かれている。そうすると、この「文字」には、音声を表わす要素があったことになる。つまりある程度までは、表音記号だったということである。ところが、モーリー、トンプソン、そしてパーセルといった当時の一流の専門家たちは、マヤの絵文字には、音声的な特徴はほんのわずかしか組み込まれていないと主張していた。(注4) この誤りを正す道を切り開いたのが、ユーリー・クノソフというソビエトの学者である。(注5) 今日では、「マヤの文字体系は、かなりはっきりとした音声や音節を表わす要素で構成されていた」ことが一般的に認められている。これは、ニーファイ人の文字体系について記したモロナイの記述



パレンケの王であったパカルの墓から出土した、壮大な石の柩ひつぎのふた。メキシコの北部チアパスの丘陵地帯から出土したもので、ここでは、古代マヤ文化のあった地域の南西端にあたる。この固い石灰石の板の上に浅く彫られたレリーフは、長さが3.6メートル以上、幅が2メートル以上もある。これは、亡くなった支配者の霊が黄泉の国へ降くだって行く場面を描いている。その支配者は、そこから神として再び生まれるのである。



ともよく合致する。(注6)

それでも、もちろんメソアメリカの文字には数多くの表意記号(音に関係なく、概念全体や単語全体を表わすもの)が含まれているという説は間違っていない。ひとつの記号が様々な意味を持つことがあり、それは前後関係もしくは読む人の経験を通してしかはつきりわからないのである。「最も時間がかかり、最も忍耐を必要とするのが、これを理解する作業である。」(注7)もう一度モロナイの声を聞いてみよう。モロナイは、ニーファイ人の記録を書く者の「筆に大きな力」がないと嘆いている。「筆は拙いので多く書け」なかったのである。また、「言葉の用法を誤る」ことも承知していた。(イテル12:22-25参照)さらにまたモルモンは、自分たちの文字体系についても不満をもらし、「私たちの言葉では書きつくし難いことが多くある」(IIIニーファイ5:18参照)(注8)と嘆いている。J・E・S・トンプソンも、マヤの文字については、同様な主張をしている。「余白を出すまいとの配慮と、儀式にかかわる様々な関連語句とのために、精確に記述することが困難であった。……読み手の側で、本文を理解するために、神話や民間伝承に関する背景知識を十分に持っている必要があったのである。」(注9)しかしそうした背景知識がたとえあったとしても、読解にはあいまいさがいつつきまとった。

ここでは、例としてマヤの象形文字を取りあげてみよう。その理由はふたつある。ひとつは、それが一番よく知られているものであること。もうひとつは、それがモルモン経時代の後期にまでさかのぼることである。ユカタン半島にいたマヤ語系の住民は、紀元300年頃から900年頃にかけて、身近な石灰岩から数百という記念碑を作り、碑文を刻んできた。そして、その子孫たちは、マヤの思想体系や文字体系について、スペイン人に有効な情報を伝えることができる程度の古い

文化は、継承していたのである。アステカの文字体系だけが、比較的細部にまでわたって生き残ったが、それとて文字としてはもっと単純で、しかもずっと後期に属するものであった。(注10)全部合わせると、メソアメリカでは少なくとも14種の異なった絵文字の体系があったことが確認されている。(注11)しかしその中で、たった3種類の文字体系——低地マヤ語、アステカ語、ミステカ語——が、解読に向かってそれなりの進展をしているにすぎない。中には、わずか1文書しか存在を確認するものがない文字体系さえある。(注12)ちょうど、ジョセフ・スミスが残した「アントン写本」と同様に、こうした文書の解読にあたっては、今後さらに多くの文書が発見されない限り、おそらく進展は望めないであろう。

しかしながら確実に言えることは、これまでの発見の成果から考えて、かなりの数のメソアメリカの文化が、少なくとも紀元前1000年頃から、読み書きの力を持っていた(持っていない文化もあった)という点である。(注13)西半球のどこを捜しても、この地域を除いては、ヨーロッパ人の侵入以前に文字が存在したことを信ずるに足る証拠は何もない。(注14)もちろん、南北両アメリカ大陸の各地で、碑文が断片的に発見されていることについては承知しているが、そうしたものが正真正銘の古代の文字であるのかどうかは、まだ疑わしい段階なのである。そうすると、興味深いことが出てくる。それはモルモン経が「陸地が狭くなっている所」のすぐ近くに数千年間も読み書きのできる民が住んでいた、と書いていることである。その場所は、メソアメリカの地峡地帯と同じ地域であって、新世界では、この地域を除いて同じような読み書きの伝統を持つ地域は、これまで知られていない。

初期の学者たちが一般的に気づいていなかった重要な点が、もうひとつある。

それは、マヤとエジプトの象形文字に、構造上の類似点が見られることである。最近、コロラド大学のリンダ・M・バン・ブラーカムは、この点を明らかにし、6種類のおもな記号を取りあげて、それが両象形文字に共通しているとした。モーリーの時代遅れの見解を批判する言葉の中で、ブラーカム女史は次のように言っている。「マヤの象形文字は、旧世界の文明の……文字体系と比較して、その進化の段階が劣っているとする人々は間違っている。」実際、「マヤの絵文字は、エジプトの絵文字と同じ6種類の方法で使用されたのである。」(注15)

エジプトとマヤの文字には、ほかにも類似した点がある。それは、双方の文字とも、人の生涯の神聖な面と深くかかわりを持っていた、あるいはまた、おそらくはそこから派生したと思われる点である。ホッジは、「話し言葉と文字の両方に見られる不可思議な力」を理解することが、エジプト人の間でどのように絵文字が発生し、またいかにそれが使われ続けたかを解く鍵になると語っている。エジプト人たちは、実際に、この絵文字を「神のみ言葉」と呼んでいた。(注16)またトンプソンは次のように言っている。「マヤの象形文字と宗教との間には、密接な関係が存在する。象形文字の形や、またおそらくはその名称の多くに、何らかの宗教的な意味が含まれていることは、ほぼ疑いのないところだからである。」(注17)

モーリーとその同僚たちが、宗教と文字には何らかの関係があると感じたのは正しい。しかし、それ以外の内容はほとんど書かれていないと仮定したことに誤りがあった。文字体系というのは、文明化された生活のあらゆる側面にわたって、神聖な意味づけをするための手段だったのである。その領域は、商業、政治、歴史、暦、天文学、そしてさらに、戦争、いけにえ、死、健康、運命、系図といったものにまで及んでいる。これはいずれ



石の柩<sup>ひつぎ</sup>のふたの端に彫られていたこの3つの絵文字は、王の生まれた年代（紀元603年）、そして、パカルの統治が紀元615年から683年まで、68年もの長きにわたっていたことなどを記録している。こうした絵文字の解読が進んだ結果、マヤの碑文は、純粋に表意文字が用いられていて、表音文字ではないとする古い考え方が、はっきりと間違っていたことがわかってきた。

も、宗教的な意味合いを持つものであり、皆、文字が必要なものばかりであった。

例をあげてみよう。マイケル・コウの主張によれば、マヤの墳墓から壮大な埋葬用のつぼが出土したが、そこに描かれている情景の出典は、「死者、あるいは死を迎える人々に対して手向けられたと思われる長大な鎮魂歌であって……その究極的な主題は、マヤの王国の君主たちの死と復活なのである。」実際、「古代マヤにも、古代エジプト人の死者の書と同じような死者の書が現実に存在したという可能性も、否定しきれないのである。」(注18)事実、「古代マヤには、そうした書が数多くあったはずである」とコウは言っている。高地グアテマラのキチェ・マヤ族の神聖な書物に「ポボル・ヴフ」というものがあるが、これは、そうした種類の書物のひとつを後代に書き直したもので、象形文字の原典から音訳したものである可能性がきわめて高い。(注19)大部分のマヤ諸族は、「ポボル・ヴフ」に神話的要素が含まれていることを承知していたし、また、そうした書物を通じて、死や復活、創造といった概念が伝えられることも理解していた。しかし、このマヤ語版の死者の書である「ポボル・ヴフ」が、唯一最も保存状態のよいものであった。ほかのメソアメリカの文化にも、類似の信仰や慣習があって、「メソアメリカには、ただひとつの統一された思想体系が存在し……これをまとめて、メソアメリカの宗教と呼んでよいだろう」(注20)

とコウは主張している。

完全な意味でその宗教とのかかわりが許されていたのは、おもに神官階級であった。神官たちだけに、そうした宗教の全容を知るために必要とされる複雑な言語を習得する機会が与えられたのである。その結果、「マヤ文字は、神官語といったものの中に埋め込まれているように思えるのである。」そして、「隠喩<sup>ひんご</sup>の豊かさ、言い換えや名前を隠す技術」に関しては、きわめて骨の折れる学習を通じて習得しなければならなかった。(注21)この文字体系を知っているということが、「取りも直さず、指導者の地位を継承する権利を獲得するための必要条件であった。」神官というのは支配者だったからであり、また支配者というのは、同時に神官でもあったからである。(注22)

書体の複雑さは、象形文字の体系の習得が困難であることの理由のひとつとなっていた。もちろん50年前には、マヤの文書の書体について理解できる人はほとんどいなかった。しかし、1950年までには、J・エリック・トンプソンが次のように言える状況にまでなったのである。

「植民地時代のマヤの写本、および私の確信に従えば、象形文字の原典そのものと、詩篇の詩句、およびヨブの詩との間には、きわめて類似した点が見られる。」

トンプソンは、次の点に注目した。それは、両者とも「詩が交互に繰り返される形式(交誦形<sup>こうじゅうけい</sup>)をとっており、その形

式では、詩の2行目が1行目の変形に呼応するか、それが繰り返されるかしている」という点である。(哀歌3:3とエレミヤ51:38〔特に英文〕にその例が見られる)同じ形式が、16世紀のユカタン語の文書にも、チュマエルやチジミンの「ラム・パラム<sup>ラム・パラム</sup>の書」にも現われる。また、1907年にラコンドン・マヤのインディアンが記録した祈禱書にも同じ形式が見られる。この言語について、エリック卿は次のように言っている。「詩の韻律、詩格が自由に使われていること、そして、どの行にも交誦形の特徴が見られることなどに注目するとよい。」「単語の音で遊ぶ……高度な無韻詩の技法には、押韻ではなく、しゃれに近いものが使われている。」(注23)

チューレーン大学のマンロ・エドモンソンは、さらに次のように強調している。「『ポボル・ヴフ』は、韻文であって、いかなる意味でも散文として理解することはできない。完全に並行形の……2行連句で構成されているのである。」この形式をとっているため、そしてまた、マヤの諸言語の語根の持つ性格のため、文書の中から明確な意味を導き出す作業が著しく困難になっている。こうして「1個の単音節の語根から、12か、それ以上のまったく異なった意味が導き出されることすらたびたびある。」(注24)さらにまた、エドモンソンは、詩篇に使われているような並行法も使用されていると指摘している。つまり、鍵になる語を共通に持つ

連続した2行が、意味のうえで非常に密接なつながりを持ち、時には英語に翻訳できないような地口やしゅれも使われていたのである。

これはみな、ヘブライ語の形式や語義、原文の形式を彷彿させるものである。ある言語に現われている事象が、別の言語から直接派生したものであると断言することは、いささか無謀ではあるが、マヤ語を話すヘブライ人がいたら喜んで使ったと思われるような文体上の考え方や形式には、マヤの人々もほとんど違和感を持たずにいられたのではないだろうか。

さて文体について、こうした点を指摘してくると、当然カイアズマス（交差配列）に思いあたる。これは、モルモン経の中や古代中東、地中海地方の文献の中に広く見られる特徴的な表現形式のひとつであって（注25）、並行法の一変形である。通常の並行法というのは、たとえば箴言15章1節に見られるようなものである。「柔らかい答は憤りをとどめ、激しい言葉は怒りをひきおこす。」ここでは、2行にわたる表現がほぼ一対一の対応関係にあるが、カイアズマスでは、これにひねりが加えられて、2行目では、対応の順序が逆になる。「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、あなたがたの道は、わが道とは異なっていると主は言われる。」（イザヤ55：8。訳出にあたり英文聖書の語順に従って改訳してある）著しく複雑なカイアズマスも知られている。モルモン経の中にも、全文にわたってそうしたものがあり、中には長さが数千語に及ぶものもあって、きわめて細かい分析をしない限り、カイアズマスだと認識できないものすらある。（注26）私は10年ほど前、トンプソンに、マヤの文献の中にもカイアズマスが見つけれないものかどうか、尋ねたことがある。しかし、トンプソンが、カイアズマスという表現形式については聞いたことがないと言ったため、私がその形式を説明してやると、

深い興味を示し、「チラム・バラムの書」の中には確かにカイアズマスだと思われる短い節があるということであった。メソアメリカの文書や芸術作品の中には、ほかにもカイアズマスが隠されていると思われる例もあるだろうが、これはユカタン研究とともに、一層の研究が待たれる分野である。（注27）

マヤ語（や、ほかのメソアメリカ諸語）における地口やしゅれの使い方は、セム系諸語やエジプト語における使い方と著しく共通するところがある。セールトン・ホッジは、「セム系の言語は、その構造のゆえに、あの種の地口が可能なのであり、それは特異な、また難解な方法で展開していく可能性がある」と指摘している。印欧諸語やそのほか数多くの言語においては、この種のしゅれは成立しない。ホッジはまた、エジプトの象形文字なら、こうした傾向の結果として、部分的にも様々に変化していった可能性が高いと考えている。（注28）

これまで述べてきたことはみな、モルモン経の記述と驚くほど合致している。ベンジャミン王は、「（3人の息子を）智恵のある者にし……ようとし、先祖の言葉をみな3人に習わせた。」（モーサヤ1：2。言うまでもないことだが、これが祭司たちであったら、当然教えていたはずである）王の関心は、自分の息子たちが難解な言語を完全に習得し、それによって「神の奥義」（モーサヤ1：3）の書かれた先祖の記録が読めるようになることにあった。

ヨーロッパ人による征服当時のユカタン地方では、象形文字に関する知識を持っていたのは祭司と、祭司の息子たちと、「大国の君主」の一部と、「君主の子供たち」だけであった。（注29）ベンジャミン王は、息子たちに言葉を習わせるにあたって、正当な王家の父親として当然の義務を果たしていたのである。ゼニフのことにも注目しておこう。ゼニフは、この

読み書きの能力があることを非常に誇りに思っていたため、モーサヤ書9章1節から始まる自分の記録の冒頭に、わざわざその旨を書き添えている。そんなことを書き添えたところでほとんど意味がないと思われる場面なのである。ともかく、多大な労苦の末に初めて習得ができるというこの言語は、「（ニーファイ人の）いわゆる変体エジプト文字」と、それを解釈するための語義に関する知識、すなわち「ユダヤ人の学問」とから成立していた。（モルモン9：32；I ニーファイ1：2）この複雑な言語を使いこなすことができるようになるまで、必要な時間を投資しなければならなかったということは、勉強する時間を確保できた富裕階級の者だけが「学問を修める便宜」を増し、一方、それができない人々は「貧乏のために学問がなく」という状態にあった、ということである。（III ニーファイ6：12）

そのほか、メソアメリカとモルモン経の言語体系が一致する点としては、文字をふたつ以上の言語にわたって使用できるようにできる融通性にもある。本稿の最初で指摘したような、音声面での要素の問題はあるが、文化的に関連の深い民族同士は、音声面での限定的な要素を暗記するか、それともそれに代わる新しいものを作るかして、言語を作り変えていくことができたのである。エジプト文字自体も、何千年も使用されている間に、新しい発音や新しい語彙に対応するために、変化や修正が求められてきた。モルモンやモロナイの時代に使われた文字記号とて同じである。もしニーファイの時代に、エジプト文字と考えられていたものに変化が加えられていなかったとしたら、「変体」エジプト文字などという言語は、生まれてこなかったであろう。

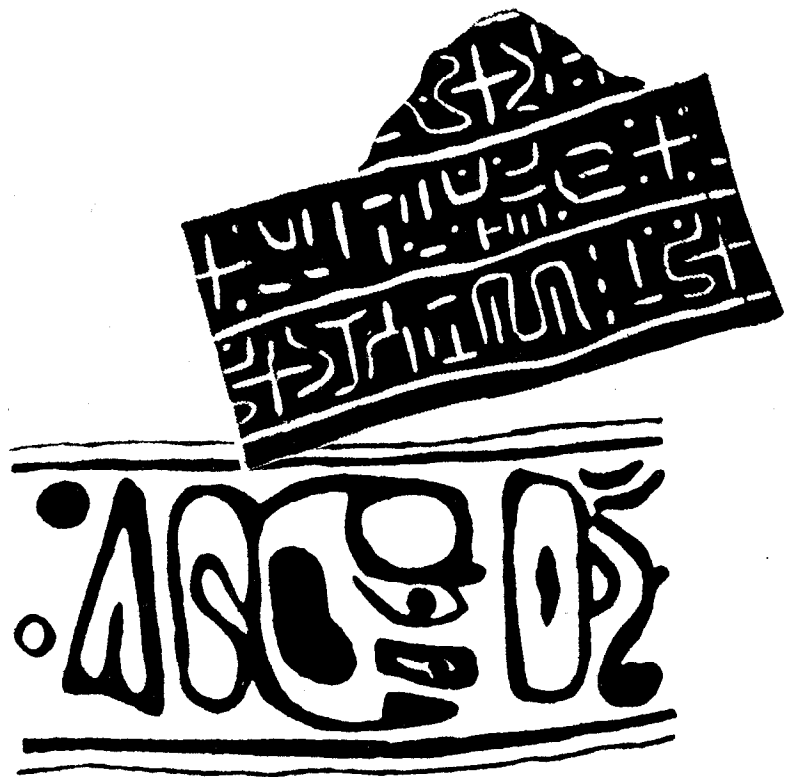
大きな変化が起きた以上、モロナイが言ったように、「私たちのほかに私たちの言語に通じている者のない」（モルモン

9：34) 状態が起きたとしても、驚くには及ばない。また、アルマの時代に「ニーファイの言葉」が「すべてのレーマン人に教え」られるようになったとき、絵文字の体系もまた別の方向に変わっていたことであろう。文字や絵文字を教えられたことにより、レーマン人たちは話し言葉にあった地域差を越えて交流をはかり、「商売をする」ようになった。(モーサヤ24：4，7) この当時、商人たちはどこへ行っても「混成外国語」のようなものを書くことによって、商売をすることができたのである。それ以外の理由では、「ニーファイの言語」を学ぶことがなぜそれほどまでに商業活動を刺激し、繁栄をもたらしたのか説明のしようがない。マヤの絵文字は、ちょうど今述べたような方法で利用されたのである。つまり、マヤ語系の言語が20かそれ以上も使われていた中で、一般的に絵文字を書けば、どこへ行っても理解してもらえたということである。

モルモン経の時代に、数多くの記録があったことはたびたび書かれている。(たとえば、ヒラマン3：15；IIIニーファイ5：9) 当然のことながら、そうした記録の大部分は、安価で便利な材料である紙に書かれたことであろう。アモナイハで神を信じた人々が火の中に投げ入れられたとき、一緒に焼かれた聖文(アルマ14：8参照)というのが紙製のものであったことは、ほとんど確実である。メソアメリカの記録は、大部分が樹皮の紙の上に書かれ、折りたたんで本の形にされた。(注30)マヤの地域では、こうした写本の中で確実にコロンブス以前のものと言えるものはたった3冊しか現存していない。(注31) 絵文字は、「各ページ」の縦の欄に書かれていた。マヤの碑文には、その縦枠がふたつあり、隣合った文字を組み合わせて読んで、一組ずつ上から下へと進んでいくようになっていた。キリストの時代頃より以前は、この縦の枠が

上：オルメク時代のこの円筒形の石印は、1948年にメキシコ・シティーの近くで発見されたものである。これは、メソアメリカから発見された文字の中でも、最も古く、しかし最も進んだ文字である可能性がある。ここで使われている記号の中には、アントン写本の文字と類似しているものも見られるが、さらに、旧世界の文献の中に見いだされるものもある。

下：メキシコ、中央チアパスのチアパ・デ・コルツオから発掘されたオルメクの円筒形石印。権威者のひとりであるウィリアム・F・アルブライト教授は、この印章を鑑定して、「明らかにエジプトの象形文字と確認できるものがいくつかある」と語った。



ひとつしかない形のもが使われていた。ここで「アントン写本」に注目してみよう。これは、モルモン経の金版からジョセフ・スミスがその文字を写し取ったもので、1980年になって初めて日の目を見た写本である。ここには、縦枠がひとつしかなく、モルモン経が書かれた当時の「ニーファイの言語」の時代、すなわち、古い、キリスト以前の時代の慣習と一致している。(注32)1828年に、ジョセ

フ・スミスが書いた写しをマーテン・ハリスに見せられたチャールス・アントン教授が当時手にしていたほんのわずかの情報に基づいて、自分の目にしたものを「メキシコの暦」と比較したとて、別段驚くには及ばないのである。(注33)

記録の利用のほかの面について、特に文字そのものや、記録をした人々といったことについて、もっと多く書くこともできよう。しかし今考えてみると、ここ

数十年の間に、メソアメリカの文字に関する私たちの知識が、多くの点で革命的な変遷を遂げていることも明らかである。こうした新しい情報を利用すれば、モルモン経の中で文字や書物について述べている部分にも、新しい意味を見いだすことができるようになる。これからもさらに多くの変遷が期待できるし、そうした変遷を通じ、聖典の情報と学問の情報とがますます一致してくるようになるであろう。

(次号に続く)

## 注

1. Sylvanus G. Morley, *The Ancient Maya*, 2nd edition (Stanford: Stanford University Press, 1947), pp. 260-61. 本稿に引用した部分は、1935年に書かれたものである。p.259も参照のこと。
  2. Michael D. Coe, "Ancient Maya Writing and Calligraphy," *Visible Language* 5 (1971), p.259.
  3. 同上 p.298.
  4. J. Eric Thompson, "Maya Hieroglyphic Writing," in Gordon R. Willey, editor, *Handbook of Middle American Indians*, vol. 3 (Austin: University of Texas Press, 1965), pp. 652-53; Thomas S. Barthel, "Writing Systems," in Thomas A. Sebeok, editor, *Native Languages of the Americas*, vol. 2 (New York: Plenum Press, 1977), p.37.
  5. Coe, 1971, p. 301; David H. Keller, *Deciphering the Maya Script* (Austin: University of Texas Press, 1976).
  6. Coe, "Ancient Maya Writing and Calligraphy," p. 301; Coe, *The Maya Scribe and His World* (New York: The Grolier Club, 1973), p.11.
  7. Coe, 1971, p.301.
  8. モルモンがここで、文字通りに自分たちの文字体系のせいで言い尽くせないことが多々あると言っているのではないことは明らかである。実際にモルモン経の中で扱われている話題の多さから考えても、明白である。イテル12:25で、モロナイはモルモンの言わんとしたことを明確にしている。モロナイがここで指摘しているのは、「言葉の用法」のゆえに誤るということである。これが、文字を書くうえでの「不完全」さという意味であった。(モルモン9:31参照)ア
- ルフアベットではなく、絵文字を使ったことから起こったあいまいさが、そうした困難さを生み出した原因であろう。(モルモン9:33と比較する)
9. Thompson, p.646.
  10. Barthel, p.35; George C. Vaillant, *The Aztecs of Mexico* (Harmondsworth, England: Pelican Books, 1950), pp.201-204; Frances F. Berdan, *The Aztecs of Central Mexico: An Imperial Society* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1982), pp.150-51.
  11. Coe, "Early Steps in the Evolution of Maya Writing," in H. B. Nicholson, editor, *Origins of Religious Art and Iconography in Preclassic Mesoamerica* (Los Angeles: UCLA Latin American Center and Ethnic Arts Council of Los Angeles, 1976), pp.110ff. コウは13種をあげてオルメカの記号を除いてある。そして、この記号はやがて、絵文字であり、またほかに例を見ないトラティルコの印璽であることが立証されるかもしれないとしている。ここには、ほかのものはまったく異なる文字が書かれているのである。また、これと「アントン写本」の興味深い共通点については、次に書かれている。Carl Hugh Jones, "The 'Anthon Transcript' and Two Mesoamerican Cylinder Seals," *Newsletter and Proceedings, Society for Early Historic Archaeology* 122 (September 1970), pp.1-8. その模写は、David H. Kelly, "A Cylinder Seal from Tlatilco," *American Antiquity* 31 (1966), 744-46.
  12. 注11で述べたトラティルコの印影、およびカミナルフューの第10石碑。Coe, 1976, p.115も参照。
  13. Joyce Marus, "The Origins of Mesoamerican Writing," *Annual Review of Anthropology* 5 (1976), p.44. 今では、女史の時代算定は、おそらく1世紀遅れていたと考えられる。いずれにしても、この遺跡(オアハカ、サン・ホセ・モゴテの第3遺跡)に書かれている絵文字は、その様式があまりにも整いすぎているため、それ以前から何世紀にもわたって歴史的に徐々に発展してきたと認定することは困難である。
  14. Barthel, op. cit.
  15. Linda Miller Van Blerkom, "A Comparison of Maya and Egyptian Hieroglyphics," *Katunob* 11 (August 1979), pp.1-8.
  16. Carleton T. Hodge, "Ritual in Writing: An Inquiry into the Origin of Egyptian Script," in M. Dale Kinkade et al., editors, *Linguistics and Anthropology: In Honor of C. F. Voegelin* (Lisse, Belgium: The Peter de Ridder Press, 1975), pp.333-34, 344.
  17. J. Eric S. Thompson, *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction* (Norman: University of Oklahoma Press, 1960), p.9.
  18. Coe, 1971, pp. 305-306; 1973, pp. 18ff.
  19. Coe, 1971, p.305. Alfred M. Tozzer, editor, "Landa's Relacion de las Cosas de Yucatan: A Translation," *Harvard University, Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Papers*, vol. 18, 1941, p. 169と比較せよ。
  20. Coe, 1973, p. 8; David H. Kelley, "Astronomical Identifies of Mesoamerican Gods," *Archaeoastronomy* (Supplement to *Journal of the History of Astronomy*) 11 (1980), pp.S1-S54.
  21. Barthel, p.45.
  22. 同上. Thompson, 1970, p.7; Tozzer, p. 28と比較せよ。
  23. Thompson, 1960, pp.61-62.
  24. Munro S. Edmonson, "The Book of Counsel: The Popol Vuh of the Quiche Maya of Guatemala," *Tulane University, Middle American Research Institute, Publication* 35 (1971), pp.XI-XII.
  25. John W. Welch, editor, *Chiasmus in Antiquity: Structures, Analyses, Exeheresis* (Hildesheim, West Germany: Gerstenberg Verlag, 1981); John W. Welch, "Chiasmus in the Book of Mormon," in Noel B. Reynolds, editor, *Book of Mormon Authorship: New Light on Ancient Origins*, (Provo: Brigham Young University, Religious Studies Center, 1982), pp.33-52.
  26. Welch, 1982, pp.49-50.
  27. たとえば、Margaret McClear, *Popol Vuh: Structure and Meaning* (Madrid, New York: Plaza Mayor, 1972), pp.55,67-90; Marvin Cohodas, "The Iconography of the Panels of the Sun, Cross, and Foliated Cross at Palenque: Part I," in Sociedad Mexicana de Antropologia, XIII a Mesa Redonda, Xalapa, 1973 (Mexico, 1975), pp.75-101.
  28. Hodge, p.344.
  29. Tozzer, p.29.
  30. 同上 p.28.
  31. Thompson, 1960, pp.23-26.
  32. Daniel W. Bachman, "Sealed in a Book: Preliminary Observations on the Newly Found 'Anthon Transcript,'" *Brigham Young University Studies* 20 (1980), pp.321-45; 別刷を入手する場合, Reprint BAC-80, Foundation for Ancient Research and Mormon Studies, P.O.Box 7113 University Station, Provo, Utah 84602.
  33. B.H.Roberts, *New Witnesses for God*, vol.2, part2 "The Book of Mormon" (Salt Lake City: Desert Book, 1926), pp.95-100. この問題に関しては、拙著 "The Book of Mormon as a Mesoamerican Codex," *Newsletter and Proceedings, Society for Early Historic Archaeology* 139 (1976), p.2 も参照のこと。

# 会員宣教師になる

リンゼイ・R・カーティス

「私<sup>私</sup>は2度ほど友人に福音を紹介しようとしたのですが、断わられてしまいました。」「彼らから、教会のことに興味もなく、知りたくもないと言われてたときは、どうしたらよいかわかりませんでした。」16歳のマリはこう話しています。

マリは、頭のいい魅力的な高校生です。敬虔な伝道精神を持った家庭で育っており、セミナーにも出席しています。私には、予言者の勧告に従いたいという彼女の気持ちがとてもよくわかりますが、かえってそうすることで彼女は親しい友人たちを遠ざけてしまっているようです。

伝道が成功した場合の報いがどんなに大きなものか、疑う余地はありません。ではその反対に思わしくない結果を招かないためにはどうすればよいのでしょうか。100パーセントの成功は期待できないにしても、もっと良い方法があるはずだ。

ロビンが海軍に入ったのは、ちょうど19歳のときでした。間もなく彼女は合衆国の東海岸に任務を命ぜられました。ルームメイトは末日聖徒で、ふたりはたちまち意気投合しました。

「私はルームメイトの生き方や彼女の持っている高い理想、標準に感心しました。私がこうありたい、こうしたいと思っていたものを彼女はすべて持ち合わせていました。私は彼女や彼女と同じ標準を持った人々の仲間になりたいと思いました。彼女たちの仲間の活動になんとか誘ってほしいと思っていたのです。でもどうとうその機会を与えてもらえませんでした。」

数カ月後、ロビンは西海岸の海軍基地に転任することになりました。その転任先でのルームメイトがまたまた末日聖徒だったのです。その最初の晩、ふたりはいろいろな話をし、この教会の人々はほかの人に比べ大変に忙しいという結論に達しました。しかし前と違ったことは、ロビンがすぐにルームメイトの誘いを受けて仲間に入り、いろいろな活動に参加

するようになったことです。

それから数週間して、ロビンは宣教師のレッスンを受け、バプテスマを受けました。彼女はその地域の最もすばらしい会員宣教師となり、同僚たちを教会の活動に誘い、彼らに教会を知るきっかけを与え続けてきました。そして軍の任務が解かれるとすぐに、ロビンは専任宣教師に召されました。

もうひとつ、私たちの伝道部で伝道中のある長老の例を紹介しましょう。彼は次のような改宗談をしてくれました。

「高校1年のとき、とても仲間意識の強いグループがあるのに気づきました。彼らはほかの生徒とは違っていました。悪い言葉は使わないし、標準も高く、外見も違っていました。麻薬などはもちろん、タバコも吸わなければお酒も飲まないのです。私はすっかり感心し、彼らと友達になりたいと思いました。

彼らはよくパーティーやダンス、そのほかいろいろな社交活動に参加して、楽しんでいるようでした。彼らが末日聖徒イエス・キリスト教会に行っているということをだれかから聞いたのですが、別に気にも留めませんでした。私はただ彼らの仲間に入りたかったのです。私は彼らの活動に誘ってほしいという気持ちをそれとなく知らせていたのですが、どうしても気づいてもらえませんでした。そこで高校3年のとき、私は勇気を奮い起こし、教会員でなくても彼らの活動に参加できるのかどうかを率直に聞いてみたのです。

それから数週間後、私はバプテスマを受け教会に入りました。そして約1年半たった今、この教会の宣教師として伝道しています。伝道に出てみて、求道者を見つけて改宗へと導くことがどんなに大変かを考えると、高校時代の仲間たちが私を活動に誘うことがどうしてそんなにむずかしいことだったのか不思議に思えます。」

私は監督として、自分のワード部の若

者たちと面接をするときに、必ずこう尋ねます。「教会員でない人ともつき合っていますか。」

スーザンの返事はこうでした。「私はビルとつき合っています。お互いによく知っているし、とてもいい友達です。」

「では彼をワード部のパーティーに誘えますか。」

こうした質問をして間もなく、スーザンはビルを教会のパーティーに連れてきました。そしてワード部の宣教師たちがそのあとを引き継いだのです。その後伝道に出たビルは、現在テキサス州ヒューストンで副監督をしています。ビルやスーザンが経験したようなことは、教会のあちこちで起こっていることです。

これらの例を参考に、皆さんには何か良い案が浮かんだでしょうか。皆さんの友人の中に、皆さんの仲間になりたがっている人、ダンスやピクニックに参加したがる人はいないでしょうか。皆さんと一緒に楽しい時間を過ごしたいと思っている人はいないでしょうか。そのような人々にイエス・キリストの福音を紹介することは、そんなにむずかしいことではないと思います。そして宣教師に頼んで、彼らにレッスンをしてもらうこともできます。

私は、妻とふたりで十代の娘や息子たちにあるチャレンジをしたことがあります。もちろん子供たちはそのチャレンジを受け入れてくれました。それは、教会に来てくれそうな人を見つけることができるよう、熱心に祈るというものでした。いつまでというように期限は決めず、とにかく祈り、求め、みたまが彼らに語りかけるのを待つよう、そして一緒に教会の活動に参加してくれそうな人、宣教師のメッセージに耳を傾けてくれそうな人が見つかるのを待つようチャレンジしたのです。

そして、私たちは彼らにそのような人がいた場合は、あたかも主が指でさし示してくださるようにはっきりと知るこ



ができると断言したのです。彼らはまた、そのような人に出会ったとき、どう話しかけたらいののかも知らされるよう、祈りに加えることにしました。

2週間ほどして、息子のひとりが、大学でそばに座っていた若い男性にぜひ声をかけてみるよという強い気持ちを感じたということでした。しかし接触はできたものの、教会の話をして断われたというのでした。当然のことながら、彼は失望し、このような試みがはたして効果のあるものなのかどうか、疑問を持ち始めたのです。

そこで私は息子に言いました。「本当にその人を心から愛そうとしたのかい。それとも試しにちょっと声をかけてみただけなのかい。」そして続けました。

「その人に声をかけたとき、心の中に愛があったと思うかい。目にはやさしさがあふれていたかな。うまく話ができるよう、みたまに耳を傾けてみたのかい。」

「もう1度やってみよ。」息子が言いました。「断食して祈ってみてから、もう1度あたってみよ。」

断食し祈ったあとも、息子の心の中にはどうしてもあの若者に教会を紹介すべきだという強い気持ちがありました。そこで彼はもう1度その若者に声をかけました。今度は心の中に、そして目に愛を表わして。その若者はついに、息子と一緒に宣教師に会い、教会の教えを聞くことに同意してくれたのです。

こうして、その若者はバプテスマを受けました。そして教会に不活発だった彼の妻が再び活発になり、今では3人の子供たちが末日聖徒の家族としての祝福にひたっています。

娘のひとりにつき合っていた青年（のちの彼女の夫）も、宣教師のメッセージを聞き入れてくれそうな人を捜せるよう祈るというこのチャレンジに挑戦してくれました。彼の場合は、子供の頃からずっと親しくしてきながら、1度も教会のことを話したことの無い友人にあたってみるよという導きを受けたのです。1カ月もたたないうちに、この友人はバプテスマを受け、教会に入りました。

アプローチの仕方は人によって違います。その人の個性に合った、気持ちよく受け入れられるような接し方をする必要

があります。私たちの話しかける人がみな即教会員になるというわけではありませんが、あとになってメッセージを受け入れてくれるかもしれません。そしてそのうちの何人かは、いつの日か仲間に加わるに違いないのです。

私たちは、認めようと認めまいと、自分の信じるところに従って生活している限り、世の者とは異なるのです。では、私の知っているふたりの宣教師を紹介しましょう。

ちょうど夕食の時間帯でした。外はやみそうもない雨が降り続いていました。そんな雨の中でも、このふたりの宣教師は伝道を続けていました。彼らの訪問を受けたある家の父親は、その晩の出来事をこう語っています。

「私はお腹をすかせて、仕事から帰ったところでした。疲れ切っていた私は、だれにもわずらわされず、ゆっくりしたいと思っていました。つけ加えれば、私は戸別訪問のセールスマンというのがどうも苦手でした。私が夕食の席についたときです。ドアをノックする音が聞こえました。これといった心当たりもなく、はっきり言ってこのような時間に訪問されるのはあまりありがたいことではありませんでした。

多分、私はあつけにとられてしまったのでしょうか。どういうわけか、怒ることもできず、訪問者の前でドアをぴしゃりと閉めることもできなかったのです。玄関先には、大きな笑顔を見せたふたりの若者が立っていました。そして文字通り顔を輝かせながら、私と家族に特別なメッセージを持ってきたと言うのでした。彼らが特別な人たちだと感じたこと以外、私には彼らを家に招き入れさせたものが何であったのか、いまだにわかりません。ただ彼らは、私が今までに経験したことのない特別な特質を身につけていました。

彼らを家に招き入れたことで、私自身また私の家族はこの上ない大きな祝福を招き入れることになりました。そうです、私たち家族はバプテスマを受け、末日聖徒となったのです。」

教義と聖約88章67節にはこのように出ています。「もし汝ら誠心誠意わが光栄を顕さんとすれば、汝らの全身光明に充た

され（ん）。」救い主の教えに従った生活をしている私たちは、ほかの人々とは違うのです。私たちの体は光明に満たされ、人々はそれに気づいてくれるでしょう。

ある日、ひとりの男性が教会のことを詳しく知りたいと言って伝道本部にやって来ました。「飛行機で隣り合わせた方が、この教会の方だったんです。」そう彼は言いました。「私もその方を見習おうと思ひまして。その方は家族のことやお互いに抱いている愛について話してくれました。話している間その方の顔は光輝いて見えました。」

この人は普通の人と比べてずっと世に染まった、この世的な人でした。「この辺で生活を徹底的に変えなければと思っていてるんです。私もぜひあの方の持っているものを身につけたいと思ひまして。私にとっても家族は大切ですからね。」彼はそう言いました。

自分の信念に従った生活をしていれば、私たちの模範は、私たちにとっても教会にとっても、またとりわけ「勝る道」（イテル12：11）を求めている人々にとって、すばらしい宣教師の役目を果たしてくれるはずで、私たちの生き方や標準を賞賛している人は大勢います。彼らは自分のために、また家族のためにそのような生き方をしたいと思っているのです。

教義と聖約123章12節では、このように言われています。「この世にはなお……真理のある所を知らざるが故にただ真理に遠ざかる者、あらゆる……宗派の中に多ければなり。」ではそのような人々が真理を見いだせるように、どのようなお手伝いができるのでしょうか。どうすれば私たちはすばらしい会員宣教師になれるのでしょうか。

その最良の方法は、あなた自身が自己の最良の状態を示すことだと思います。人々に親切にし、喜びを分かち合うのです。あなたの身近な人で教会員でない人々に、ぜひあなたの味わっている喜びや楽しみを分かち合ってください。彼らはひそかにそれを望んでいるかもしれないのです。

そのようにすれば、友達を失うどころか、この世だけでなくのちの世にまでも続く友情を育むことができるに違いありません。

# 「自身の家を整うべし」

第一副管長  
マリオ・G・ロムニー

ロムニー副管長によるこの説教は以前になされたものですが、個人や家族の学習のため再び掲載します。

**「子**をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない。」(箴言22:6) この勧告は、今の世の中を悩ましている物質主義や宗教の冒瀆、道德の退廃、成人および青少年の非行、増加する犯罪、神の律法や人間の尊厳を軽視する風潮に対する最良の特効薬が子供の訓育であることを確信させてくれます。

現代の醜い面を強調して皆さんを脅かすのは決して私の目的ではありません。私が皆さんの注意を喚起する目的は、それらの悪影響を家庭で、あるいは私たち自身の生活で食い止めなければ、両親や子供たち、それに靈的に矛盾するこの世の思想や人々の生活態度、現代の慣習に屈してしまうすべての人々の人生に、大きな嘆きや悲しみを及ぼすことになるからです。

教会は両親が子供を訓練する助けをすることができますし、やろうとしています。しかしできるのは助けることだけです。教会は両親の最も大切な責任を代わって行なうことはしませんし、できません。主によれば、その責任とは「その子供8才の時、悔改め、生ける神の子キリストの信仰、バプテスマと按手による聖靈の賜などの教義を教えて理解せしめることです。(教義と聖約68:25)

予言者ジョセフ・スミスにこの指示をお授けになってから1年半後、主はひとつのこをつけ加えられました。すべての子供は幼児の有り様では神の前に罪はないが、その後「かの悪魔来りて(人に不従順を説き)……光明と真理を取り去りぬ。

されど、われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり」とあります。(教義と聖約93:39-40)

それから主は指導者の兄弟たちと語られ、まずフレデリック・G・ウイリヤムスに告げておられます。「汝はいまだにわが誠命に従って汝の子供たちに光明と真理を教え居らず、さればかの悪魔はいまだに汝を支配し居れり、これ汝の苦しみを受くる所以なり。」

私たちの抱えている苦悩や少年非行の問題などは、子供たちが光明と真理を教えられていないことに起因しているのではないのでしょうか。

主はこの件に関してウイリヤムス兄弟に断固とした調子でこう続けておられます。「われ今汝に一つの誠命を与う。すなわち、汝もし救われんと欲せば自身の家を整うべし。」(教義と聖約93:43)

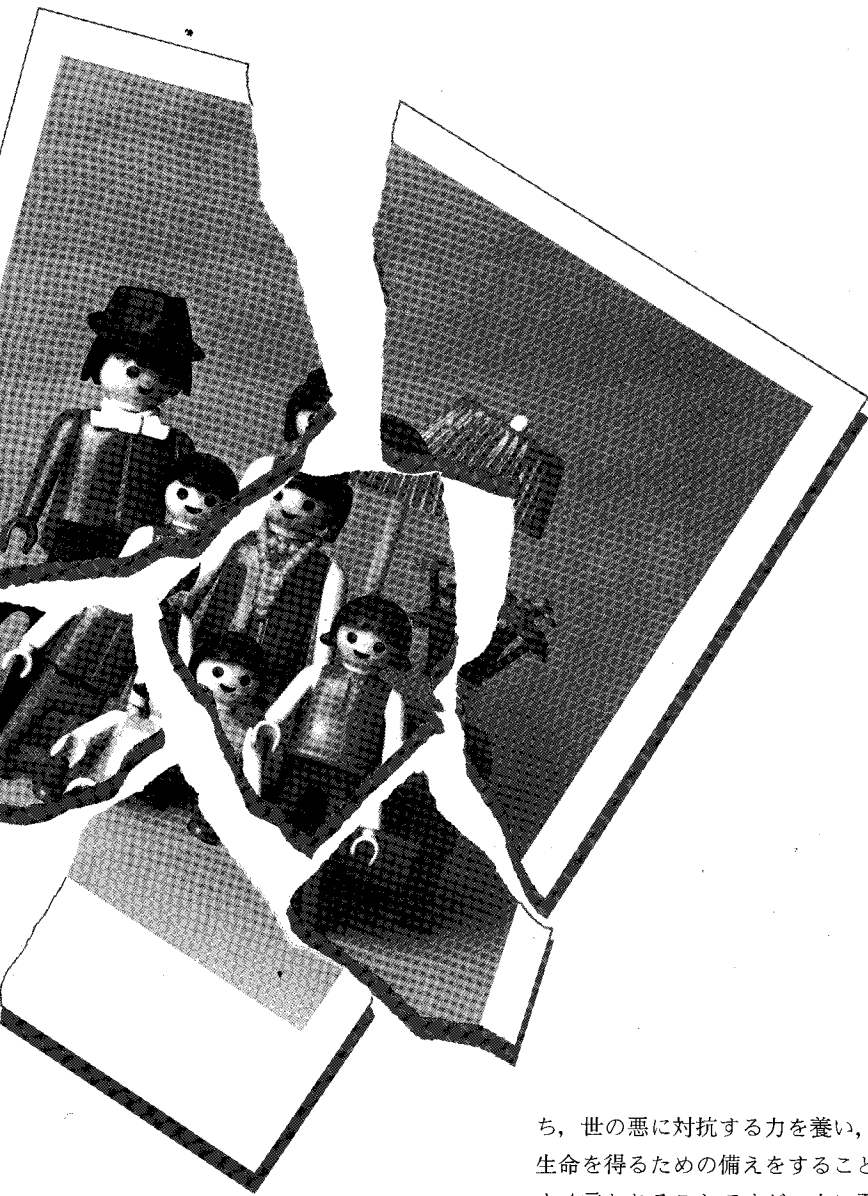
それから主はシドニー・リグドンに、「その子供たちに就きいまだにわが誠命を守」っていないと告げ、守るよう

められました。主はさらにニューエル・K・ホイットニーに対し、子供の不品行のゆえに「その家族を整うべきものなり。その家族の者共をして、家に在りて必ず今一層勤勉に事にかかわらしめ」るようにと叱責されました。(教義と聖約93:50)

予言者ジョセフ・スミスも子供を正しく訓練していないことを叱責されました。「汝の家族共は必ず悔い改めて、或る事を捨て……ざるべからず。」(教義と聖約93:48)

このように初期の兄弟たちは、子供を





「子供を教えるようにと  
戒められた主のみ言葉を  
すべての人が実行するならば、  
現代の若者の犯罪は  
どんなに少なくなるでしょう。  
これは末日聖徒にとって  
真剣に取り組むべき  
問題であるはずで。」

より立ちのかされざるべからず。」(教義と聖約93:48)では法律を守らないことに関して予言者は何とっておられるでしょうか。「われらは……法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」(信仰箇条第12条)

このように、国の法律に心から進んで従うという基本的な原則を正しく教育することが、多くの破壊行為や犯罪を一掃するうえで効果的な働きをするはずで。

子供を教えるということについて主が示されたもうひとつの原則は、労働です。現代の若者に関連する問題の多くは、この原則を顧みないことからきています。

「怠惰な頭脳は悪魔の仕事場である」という言葉があります。聖典でも怠惰を最も卑しむべきものとしているように、この言葉は疑いもなく真理です。ニーファイは、示現で見た彼の子孫の民について次のように描写しています。「これらの子どもは、とうとう無信仰に陥ってから……汚らわしくなり、まったく怠惰者であらゆる汚らわしい行いをする汚ない民になってしまうのが見えた。」(Iニーファイ12:23)

現代の神権時代に、主は怠惰を少年非行や罪悪、特にむさぼりに関連させて厳しく戒められます。「およそ怠る者は主の前に憶えらるべければなり。今やわれ主は、シオンに住める民を悦ばず。そは、怠る者その中にあり、彼らの子らもまた今や次第に悪事に増長し、永遠の富を熱心に求めずしてその眼は貪欲を以て充さるればなり。」(教義と聖約68:30-31)

ち、世の悪に対抗する力を養い、永遠の生命を得るための備えをすることです。よく言われることですが、山に登ることに熱中するあまり、疲れ果てて頂上から美しい景色を眺めることを忘れることがないようにしなければなりません。世のものに執着しすぎて、福音の観点から物を見る目を失っている人がいるのが残念です。

特に子供を教えるようにと戒められた主のみ言葉をすべての人が実行するならば、現代の若者の犯罪はどんなに少なくなるでしょう。これは、末日聖徒にとって真剣に取り組むべき問題であるはずで。

たとえば従順です。主はジョセフ・スミスに言われました。「汝の家族共は必ず……汝の言うことに一層誠実に心を留めざるべからず、然らずんば彼らの居る所

導くように、またみたまを受けて生活することを妨げるものは捨てるように命じられましたが、今日の両親も同じ義務を負っています。福音の原則のもとに子供を教育しないことによってもたらされる結果の重大さは、当時から今も変わりはありません。また、啓示の中で主が語りかけておられるのは父親に対してですが、その義務は母親にも同等の重さで課せられています。

この大きな責任を遂行するにあたって、食べることや着る物、家事、さらには子供のこの世的な要求を追い求めることに心を奪われるあまり、大切な事柄をおろそかにしてはなりません。それはすなわ

「現代の神権時代に  
主は怠惰を少年非行や罪惡、  
特にむさぼりに関連させて  
厳しく戒めておられます。」

では、主がとりわけ子供に教えるようにと戒められたもうひとつの習慣、すなわち祈りについて述べたいと思います。

主はシオンに住む民に向かってこう言われました。「また両親はその子供たちに祈ることと、主の前に正しく歩むことを教えざるべからず。」(教義と聖約68:28)

予言者ジョセフ・スミスに主は告げられました。「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つ様に祈れ、また現にサタンの仕事に力を与えるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10:5)

末の日の文明が神とその義を日常生活や世の出来事から排除しようとしている今日、日々そかにあるいは家族で祈ることが特に求められています。

賢明な末日聖徒の両親は、祈りの力と世間の不信仰な風潮をよく理解しているので、子供に祈ることを教えないわけがありません。朝に晩に決まって天父の前にひざまずいて心から謙遜に祈る人以上に、悪に對抗できる強力な武器を持っている人はいません。

それに加えて、両親は子供のために捧げる毎日の祈りの力を過少評価しないでください。わがままな息子と仲間を悔い改めに導いたのは、彼らのために捧げたアルマの祈りでした。

私たちが子供に教えるよう主から期待されている真理は、ほかにもたくさんあります。それらは聖典や末日の予言者の勧告から探すことができます。

しかし何を教えるべきかを知ったら、次は福音の真理をどのように家族に教えるかも大切になってきます。この、どのように教えるかということは、私たち自身が研究と経験と聖霊の導きによって知るべきことで、このみたまは「信仰の祈りによりて……与えられ」ます。(教義と聖約42:14) しかしいかなる方法を用いようとも、それが、福音の実践が幸福につながることをよく理解できるものでなければ、効果的なものとは言えません。受けているしつけや訓練が独断的で、いつも行動が制限される、生活が楽しくないと子供が感じるようであれば、彼らは私たちの目の届くところでのみ言うことを聞き、ほかでは勝手気ままに振る舞うようになります。

それでは、私たちの行ないによって子供が福音から離れたりするようなことがないようにするには、どうしたらよいのでしょうか。主が予言者ジョセフ・スミスに与えられた次の勧告はすべての両親にとって確かな導きとなりましょう。

「如何なる権力も勢力も、神権によりて維持する能わず、または維持すべきものにあらず、だた説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛による。

また、親切と淨き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。

すなわち、聖霊に感動しては機に臨みて激しく人を責む。然る後、また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。

かくて、彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。」(教義と聖約121:41-44)

この忍耐と堅忍、愛によって、私たちは子供たちの同意と信頼を得ることができます。啓示によって与えられた福音の真理に自発的に従うよう、時間をかけ、心を込めて子供たちを教え導けば、少しずつでもあなたの教えに耳を傾け、「人類が現世に在るのは幸福を得んためである」(II ニーフアイ2:25) ことを理解して味ううほどになるでしょう。予言者ジョセフ・スミスは言っています。「幸福を得ることが私たちの存在する目的であり、目標である。もし幸福につながる道を歩むなら、そこに到達できることだろう。」子供たちはみずからの経験と私たちの導きにより、予言者の次の言葉の意味を知って信じるようになります。「その道は

末の日の文明が神とその義を  
日常生活や世の出来事から  
排除しようとしている今日、  
日々ひそかにあるいは家族で  
祈ることが特に求められています。



徳、高潔、忠実、清さ、そして神のあらゆる戒めを守ることである。」(「教会歴史」5：134-35)

アルマが息子コリアントンに語ったように、私たちも子供たちに「罪悪は決して幸福を生じたことはない」と教えましょう。(アルマ41：10)悔い改めを引き延ばすと最終的には滅びがやって来ることを教えましょう。「あなたたちが自分の救いを受ける日はぐずぐずしている間に永久になくなってしまい、あなたたちの亡びは決まってしまう。」レーマン人サムエルは不従順なニーファイ人に続けて言い

ました。「それは、あなたたちがその時までいたずらに生涯を送って手に入れることのできない幸福を求め、罪悪をしながら幸福を求めたが、このような行いは私たちの偉大なる永遠の頭の性格である義にそむくからである。」(ヒラマン13：38)

私たちは、子供たちが成長するとともにこれらの偉大な真理を理解できるよう、聖霊の導きを通して助けなければなりません。正しい行ないをほめながら、不正が悲しみをもたらすことを理解させるのです。

どのような社会も、両親が教訓と模範によって子供を教え、イエス・キリストの福音の原則に従って生きる決意を進んできるように靈感を与えるときに整えられていくものです。人は福音の原則が神

聖なものであるという証を得、その約束の喜びを少しでも知ると、熱心に祈り、勤勉に働き、神の戒めに厳密に従うようになります。これは、当然のことながら国の法律についても同じです。

子供を教えることに関して、両親の皆さんにはモルモン経の精神を感じ取っていただきたいと思います。ベンジャミン王は偉大な最後の説教の中で、悔い改めに導かれて信仰を強めた民に対し、子供を教えることについて次のように語っています。

「私はすでに言ったけれども、今一度これをお前たちに言おう。お前たちがもしも神の栄光を知り……自分の心をこれほどまでに喜ばせる罪の赦しを受けているならば、私はお前たちが常々神の偉大なこと……を忘れずに思い起して低くへりくだり、毎日毎日主の御名によって祈り……確く信じて変わらないことを望む。

もしもお前たちの行いがこのようであるならば、お前たちはいつも喜び、神の愛に浴し、いつも罪の赦しを保……(つ)ようになる。

またお前たちは互いに傷つけ合う心がなく、安らかに暮らして、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになる。

またお前たちは、自分の子供らを飢えさせたりはだかのまま置いたりはしないであろう。またお前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして……悪魔に仕えることを許さず、

お前たちは自分の子供らに真の道を行

どのような社会も、  
両親が教訓と模範によって子供を教え、  
イエス・キリストの福音の原則に従って  
生きる決意を進んでするように  
靈感を与えるときに  
整えられていくものです。

う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教えるであろう。」(モーサヤ4：11-15)

当時初等協会に属していた息子とこの聖句を読んだときのことを思い出します。私たちはモルモン経を、1節ずつ交替で読んでいました。この聖句を読んでいるときに息子は次の言葉にとても強く心を動かされた様子でした。「お前たちは自分の子供らが神の律法に背き互いに争ったり戦ったりして……悪魔に仕えることを許さず……。」(14節)そこで彼は自分の悪ふざけを思い出して目に涙を浮かべていました。それ以来成人するまで、けんかをしそうになるとこの聖句が心に浮かんで来て、目に涙があふれるのでした。

兄弟姉妹の皆さん、このベンジャミン王の偉大な説教の精神と心構えを子供に感じさせることができれば、子供を教えることはもっと容易になると申しあげます。福音の精神で子供を高めるようにしましょう。そうすれば子供は互いに傷つけ合おうとは思わなくなり、かえって安らかに暮らして、あらゆる人にその当然受けるはずのものを与えたいと思うようになるでしょう。ベンジャミン王が言ったように、「真の道を行う事と真面目でなければならぬ事と互いに愛し互いに助けねばならぬ事とを教え」てください。(モーサヤ4：15)

もし父親と母親が聖霊の導きに従い、主の戒めを固く守って生活し、主と予言者の勧告に従って子供をその行くべき道に従って教えるならば、末日聖徒はやが

て栄光の門に到達することでしょう。ここではニーファイ人が享受したように、「住民……の間に何の不和争論もなく一人のこらずみな互いに正しく扱」い、「民はその心に神の愛を保っていたから……何ら不和がなかった。また、嫉妬、争闘、暴動、みだらな行い、虚言、人殺し、および何らみだりがわしい行いがなかった。」(IVニーファイ1：2、15-16)当時の聖徒たちの非常に祝福されていた様子を、予言者であり歴史記録者であったニーファイは次のように表現しました。「まことに神が造りたもうたすべての民の中でこの民ほど幸福な民があるはずがなかった。」(IVニーファイ1：16)

主は、現在の神権時代にも同じような社会を築くことができると保証してくださっています。そのことを忘れないようにしましょう。しかし現代の悪の力を退けるために、私たちがすべきことはたくさん残されています。末日聖徒の両親、教師、指導者は新しい気持ちでみずから家を整え、子供が人生の真の幸福をつかめるように、愛情を込めて、しかも効果的に教えられるよう努力しなければならないのです。

### ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点を話し合うとよいでしょう。

1. 今の世の中を悩ましている問題にとって最良の特効薬は子供を教えることである。
2. 教会は両親が子供を訓練する助けを

することができるし、やろうとしている。しかし両親に取って代わることはしないし、できない。

3. 子供のこの世的な必要を追い求めることに心を奪われるあまり、世の悪に対抗する力を養い、永遠の生命の備えとなる大切な事柄をおろそかにしない。
4. 何を教えるべきかを知ったら、次はいかに福音の真理を家族に教えるかを知ることも必要である。いかに教えるかということは、私たち自身が研究と経験と聖霊の導きによって知るべきことで、このみたまは「信仰の祈りによりて……与えら」れる。
5. 私たちの教えは、福音を実践することが幸福への道であることを子供に納得させることができなければ、効果的なものとは言えない。忍耐と堅忍と愛によって子供たちの同意と信頼を得ることができる。

### 話し合いを進めるために

1. 「自身の家を整える」ことの重要性について自分の意見を述べる。家族にも話してもらおう。
2. 家族で朗読したり話し合ったりすると良いと思われる聖句や引用文がこの記事の中にないだろうか。
3. 訪問の前に家長と打ち合わせた方がよい話し合いができるのではないだろうか。両親の責任について、定員会指導者から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

# みたまによって教える

七十人第一定員会会員

ローレン・C・ダン

**カ**ナダの西北部にあるイエローナイフでは、辺境地域を飛ぶ若いパイロットが、日曜日に担当の神権定員会で教えるための準備を、今ちょうど祈りをもって進めているところです。オーストラリアのダーウィンの一会社員は、同僚に電話をしてホームティーチングの打ちあわせをしています。日本の東京では、ふたりの宣教師が求道者にレッスンを教えるようとしています。ドイツのシュツットガルトに住む主婦は、次週の初等協会のクラスを楽しみにしています。

世界のいたる所で、いく千もの有能な男女が教会の教師として重要な働きをしています。だれもが福音を教える召しに応えています。そして彼らが教える対象は、教会のあらゆるステーク部、地方部、ワード部、支部に集う人々で、老若男女、教会員であるなしを問いません。

私たちはこれらの信仰深い教師たちが行なっている良き業に対して、十分な賞賛の言葉を知りません。彼らは単に情報を伝えているわけではありません。その召しはもっと偉大であって、みたまの力によって福音を教えているのです。聞く者の魂を高揚し、良き業に励むよう靈感を与える業です。

理想的な教育について、救い主は次のように表現しておられます。「汝ら相集る時は……実行すべき方法を知らんために互いに教え導くべし。」(教義と聖約43:8) 教えることと導くことは別です。導くことにはもっと深い意味が含まれています。導くとは、みたまの力によって教えることです。人がみたまによって教え導くとき、聞く者はさらに良き業に励みたいという気持ちになり、教えられたことを何らかの方法で実行に移したいと思うのです。

以上のことから考えると、みたまによって福音を教えることは、教会のすべて

の教師にとって第一の責任であると言えます。世の中は人の教えを教えており、おもしろい情報や余分な事実を単に交換しているだけです。しかしみたまによって教えるとき、そこには異なった世界が生まれます。教える者が耳を傾ける者の身と霊に語りかけるからです。そして、語る者も聞く者も啓発され、導かれて、魂の内なる喜びとさらに充実した人生への願望に満たされるのです。

教会の教師にとって準備の方法はいくらでもあります。教師養成コースに出席すること、あるいは教会で発行している各テキストの提案や助言に従うこともそのひとつです。しかしながら、教師が最優先に準備しなければならないのは霊性を高めることであり、これは一人一人が行なわなければなりません。

私たちは次のように言われています。「汝らもし『みたま』を受けざる時は教うべからず。」(教義と聖約42:14) この言葉はふたつの意味にとれます。第一に、福音を教える召しにこたへるには、バプテスマを受けて真理の源である聖霊の賜を身に受ける必要があるということです。二番目は、みたまの賜が生活に生かされるよう祈り、実践することです。そのような生活は私たちのみならず、私たちが召されて教える生徒たちをも高め、啓発します。主はこのことを強調して、「汝らは何のために聖職の按手任命を受けたるか」という質問に次のように答えておられます。「真理を教えんために遣わされたる『慰め主』、すなわち『みたま』によりてわが福音を宣べんためなり。」(教義と聖約50:13-14)

これは教会で教える際にすべてにあてはまる、聖典の約束事と言えましょう。主はさらに先の聖句で、その重要性を強調しておられます。「およそわれによりて聖職の按手任命を受け、『慰め主』……に

よりて真理の言を説くために遣わさる者は、果たして真理の『みたま』によりて教えを説くか、はたまた他の道によりてこれを説くか。

もし何らか他の道によるとせば、これ神によるにあらず。」(教義と聖約50:17-18)

教会の教師が福音を教える者として成功を収めるために必ず行なわなければならないのが、この霊的な準備です。この準備は必ずしも学歴や経験、知識量と結びつくとは限りません。ただ一生懸命準備をすることでみたまが教えるべきことを明らかにし、その結果として信仰が強められるのです。また教師は伝えたいメッセージを聞く者の心に植えつけることができ、教える者も受ける者も「両者共に徳に導かれて共に悦ぶ」のです。(教義と聖約50:22) 義なる行ないは、こうして靈感を受けた人々を通してもたらされます。

このような教師にとっては、教えるに忠実に生活することが信仰の原則を知ることと同じように重要であり、神権を尊ぶことによって祝福を得ることが神権の原則を教えることと同様の意味を持つのです。みづから教えていることを実践している人にこそみたまは下るのです。

みたまによって教えるとは、単に靈感あふれる話を語ることでも、人の心を打つ経験を紹介することでもありません。それらを超越したものです。ただ感情に訴えるだけのものと聖霊の静かな働きかけとを混同する人もいるかもしれませんが、必ずしも両者は同じではありません。信仰あふれる教師から教えを受けて心に得られる静かで平安な確信は、世に言う感動的な体験とはまったく異なることもあるのです。しかしそうして得た確信は教師と生徒を励まし、霊的に高め、霊的な真理を繰り返し学ぶうちに共に喜びを

「教師が最優先に準備しなければならないのは、  
靈性を高めることであり、  
これは一人一人が  
行なわなければなりません。」

得るのです。「見よ、われ……汝の智と情に告げんとす。」「これによりて汝にその正しきを感じしむ。」(教義と聖約8:2; 9:8)

聖靈の力によって教える教師には、はっきりとした特徴があります。いくつかを次に列記しますから、相互の密接な関連性に注目してください。

**1. 慈愛** 救い主はイザヤの言葉を引用して導きと教えの業を始められました。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして……打ちひしがれている者に自由を得させ……るのである。」(ルカ4:18)

さらに救い主は会堂にいる人たちに言われました。「この聖句は、あなたがたが耳にしたこの日に成就した。

……すると、彼らはみなイエス……の口から出て来るめぐみ(慈愛)の言葉に感嘆した。」(ルカ4:21, 22)

みたまによって福音を教える人には慈愛があります。それは各人の謙虚さや信仰、そして人々に対する深い永続的な愛に起因するものです。

私たちがニュージーランドに住んでいた頃は、ほかのユニットを訪問する責任がなかったので、恵まれてマウント・ロスキル第8ワード部の福音の教義クラスに出席していました。当時の教師は改宗者のジョアン・アームストロング姉妹でした。彼女のレッスンは、祈りの気持ちで準備したことがうかがえるレッスンでした。教科書をひとつのガイドとして、福音の原則を教えてくださいました。

しかも彼女の考え方には彼女自身の信仰が反映されていました。またレッスンには彼女の人生経験が織り込まれていて、主がいかに彼女に靈感を与えて導いておられるかがわかりました。アームストロング姉妹は外面的には決して目立つ教師

でも弁の立つ教師でもありませんでした。でも彼女には備えができていました。まさにそのことが、みたまから得られる慈愛を彼女にもたらしていたのです。その同じみたまがクラスを治めていました。積極的な参加はあっても決して悪意は見られず、討論はあっても、論争ではありませんでした。奥義や憶測を強調することはありませんでした。自分自身をよく備えていたので、そうする必要がなかったのです。生徒は啓発され、高められた思いでクラスを後にするのでした。

教会にはアームストロング姉妹のような教師がたくさんいます。みたまの導きに心から従うことで慈愛の心を養い、それによってみたまを受けて生徒たちの心を動かすのです。教師はそれぞれに個性を生かし、違う方法でレッスンに取り組んでいるのですが、これは真理です。福音に対して博学な人も、福音を熱心に学び始めたばかりの未来の教師も、この共通の土台で結びついています。

**2. 証** 「すなわち、われ汝らの罪を許してこの誠命を与う。……汝らに伝えたるこれらのことを全世界に証するに、汝らの心の中に厳か……を固く執りて失わざることなり。」(教義と聖約84:61)

現在教師養成クラスは教師の養成のためにすばらしい効果をあげており、それはこれからも変わらないでしょう。またテキストは、教師が聖典や予言者の言葉を引用してレッスンができるように、またレッスンを日常生活にいかに応用すればよいかわかるように準備されています。しかし最も大切な要素である自分の証をレッスンに取り入れなければ、どんなテキストを使っても生身の人間を超えた福音の教師にはなれません。教会全体の力を結集したとしても、証を育てない教師、教えるときに自分の証を使わない教師を補う福音のテキストを作り出すのは不可能です。みずからの証の力によって福音





を教えている教会の多くの教師に、心からの感謝を捧げるものです。

**3. 聖典** 「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。」(アルマ17:2)

主は聖典を道しるべとして教会に与えられました。聖典として私たちが受け入れているものには4つの標準聖典のみならず、「聖霊に感じた」近代の使徒たちや予言者、ほかの教会指導者による靈感あふれる書物や説教があります。(教義と聖約68:4)

数年前のこと、オーストラリアのシドニーにあるパラマツタ・ステーキ部センターで開かれた求道者のファイヤサイドに出席する機会に恵まれました。十二使徒定員会のひとりが説教者でした。聴衆はすでに長い間福音の原則を学んできたにもかかわらず、行動に移すだけの証がない求道者たちでした。その晩の十二使徒は特別な祝福を受けていて、非常に力強く福音の回復について語りました。聖句を一つ一つ参加者に解き明かしていききました。教えていることが真理であるとみたまが証していました。集会の終了後、7人の長期求道者がバプテスマの日を決めたのです。

大管長会と十二使徒定員会の方々は、教会の代表として福音を教え、真理を求める人々を啓発するには聖典を活用することが大切であることを身をもって示しておられます。

ジョセフ・F・スミスは次のように述べています。「聖典の靈感と神聖さをとりわけ特徴づけるものは、聖典が記されたときの精神と、誠実に信仰をもって読む者に伝わる霊的な宝にほかならない。聖典は人の霊的な賜を伸ばし、人と神の絆を明らかにして強めるためのものである。」(「インストラクター」1912年4月号)

**4. 祈り** 「この『みたま』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる。」(教義と聖約42:14)

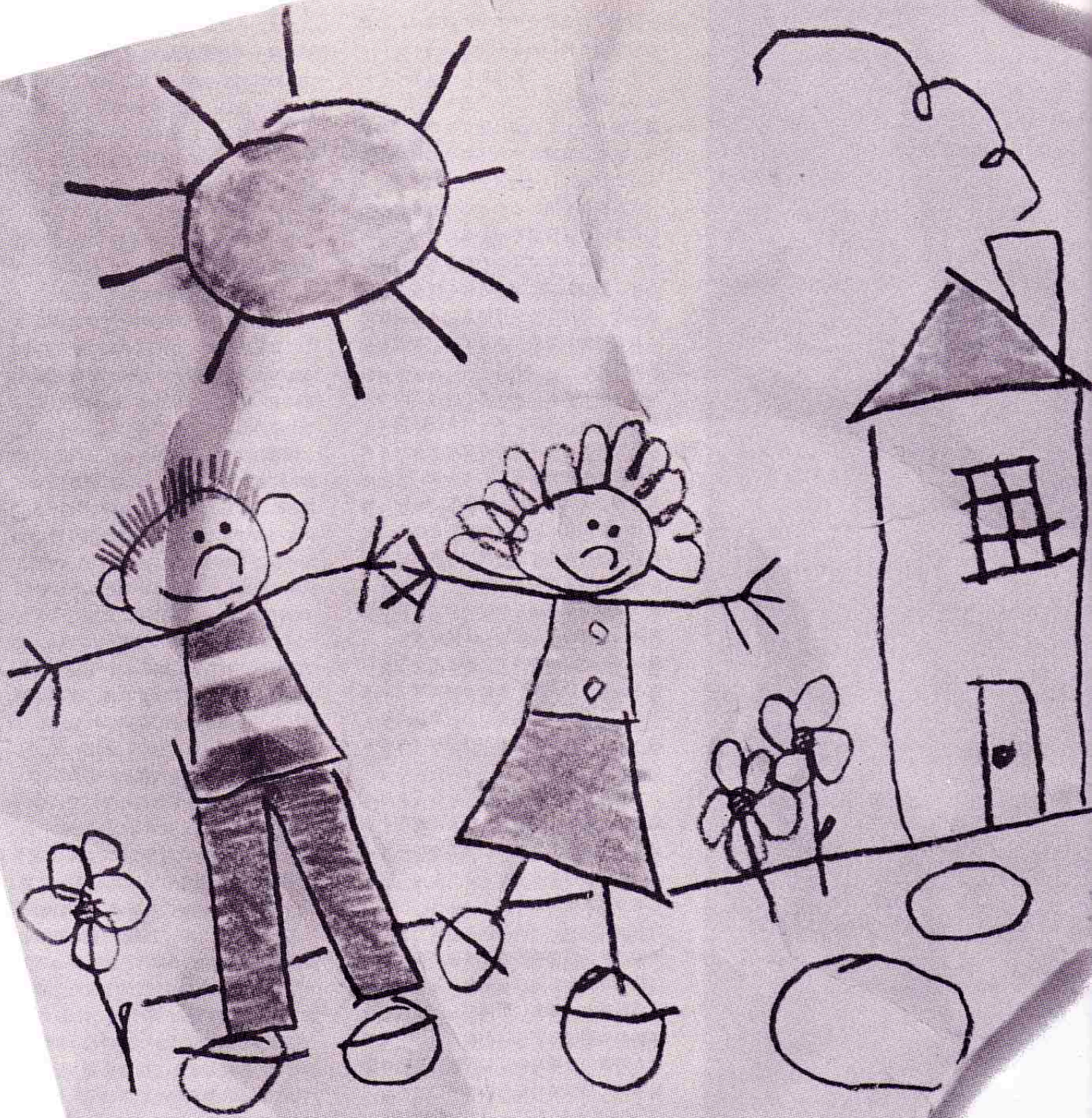
霊的な準備にとって最も大切なことは祈りです。祈りは導きと知識を求めるひとつの手段です。「人間は主の悟りたもうことをことごとくは悟れない」からです。(モーサヤ4:9)

まず、テキストを繰り返し祈りの気持ちで調べてください。レッスンの指針がつかめたと感じたら、祈りの中で主に尋ねてください。この祈りの中で心に感じたことを導きとします。「もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ10:4)心に平安と確信を感じたら、さらに続けてください。もしとまどいや疑いが生じたら、方法を変えて再び祈りの中で主に尋ねることです。教師として召されて生徒の前に立つときには特に、なすべきことすべてに主のみたまが宿るよう、心を低くして主に尋ね求めてください。

スペンサー・W・キンボール大管長は言われました。「主は立って戸をたたいておられる。私たちが耳を傾けなければ、夕食を共にすることも、私たちの祈りに答えることもされない。私たちはいかに聴き、把握し、解釈し、理解するかを学ばなければならない。主は立って戸をたたいておられる。決して退かれない。また強制もされないであろう。もし私たちが主との距離が開くとすれば、離れたのは私たちの側であって主ではない。もしも祈りの答えが得られないとすれば、私たちの生活の中にその理由を求めなければならない。なすべきことをしていなかったり、なすべきでないことをしていたのではないだろうか。聞く耳を鈍らせ、見る目を曇らせていたのは私たちである。」(「奇跡に先駆ける信仰」p. 208)

みたまの力によって福音を教えることが、教会のすべての教師を治めている偉大な原則であることを理解できたと思います。事実、ジョセフ・スミスは次のように語っています。「すべての人は聖霊の力とその作用によって福音を宣べ伝えるべきである。聖霊なくしては何人も福音を宣べ伝えることはできない。」(「教会歴史」2:477)

末日聖徒イエス・キリスト教会の教師は、教会のあらゆる人々と同じように大きな影響力を持っています。主が教師の皆さんの上に喜びと成功とを祝福されますように、また常にみたまによって福音を教えられますように。



# 誕生日の プレゼント

フロイド・ダウン・マツケイ

**息**子のエリックが先日18歳の誕生日を迎えました。そこで、当時ユタ州プロボにあるブリガム・ヤング大学にいたエリックに家族全員で何か特別な物を送ろうと決めました。妹のジェニファーはクッキーを作ることにし、父親はお金を送り、同じブリガム・ヤング大学にいる兄のブラッドはそのお金の使い方を教えることにしました。弟のジェフはイラストを書くことにし、私は豪華な誕生日カードに特別な言葉を書き添えることにしました。

エリックの今までの人生の1年ごとに1節ずつ書こうと決めて取りかかったこの仕事は、私を夢中にさせました。

私は机に向かい、最初の数節を書くとき楽しくて笑いがこみあげてきました。そしてエリックが6歳の頃のことを思い出しました。

「エリックがね、ガールフレンド見つけたよ。エリックがガールフレンド見つけたんだ。」エリックと一緒に学校から帰ってきた兄のブラッドがエリックをから

かっていたことを思い出しました。

エリックは黙っていました。私は彼の無邪気な顔に、ほほえみも困惑も何の変化も見つけることができませんでした。彼は完全にブラッドを無視して、私にこう尋ねました。「お母さん、明日の朝から食事の時間早くしてほしいんだけど。僕、学校へ早く行きたいの。」

私は「いいわよ」と答えたものの、彼の冷静なのにびっくりさせられました。「いいけど、理由は教えてくれないの。」エリックは首をふりました。そしてニコッと笑って、後ろのドアから遊びに飛び出して行きました。

「ね、僕の言った通りでしょう。」ブラッドは自信あり気に言いました。

私は決してうるさい母親ではありません。少しはうるさいこともあります。でも、エリックが毎日なぜ15分早く学校に行き、15分遅く帰ってくるのか知りたかったと思います。エリックは何も言いません。

そこで、ちょうど火曜日に図書館に本を返しに行くことになっていたので、1時50分に出かけ、学校が終わる2時20分頃に学校のそばを通れるように計画しました。

私は遅れてしまい、エリックを見つけたのは家に着くほんの少し前のところでした。見ると、エリックはひとりの女の子と一緒にいます。長いブロンドの髪にかわいい洋服を着た女の子でした。でも、普通の子と少し違います。左足が短いのです。また、追い越したときに気づいたのですが、左腕がだらりと下がっています。エリックは私に気づくと、照れ臭そうにニヤッと笑って手を振りました。私は笑みを返しながら、天使のようなほほえみを浮かべた青い目の美しい小さな少女に目を向けました。

夕食のとき、私は事の次第を明らかにするときがきたと思いました。私はエリックに、小学校の1年生でも友達をつくることは大切だということを知ってもらいたかったのです。たとえそれが女の子であってもです。

「きょうあなたの友達を見かけたわ。とってもかわいい子ね。」

「それにステキなのさ。」そう彼はつけ加えました。

「お前が学校へ早く出かけるのはそのためかい？」お父さんが尋ねました。

「そうだよ。」

「じゃ、その子について少し教えてくれないかな。名前は？どんな子なの？」

「名前はジェナ。そしてね、ええっと、あのね、女の子だよ。」

みんなはどつと笑いました。「とってもかわいい子よね。」私が助け船を出しました。「髪はブロンドで目は青、それにほほえんだ顔がとってもステキだわ。」

「足はどうしたの。」ブラッドが無邪気に尋ねました。

エリックは怒って、声高に言いました。「足なんてどこも悪くないよ。」

「ブラッドは意地悪で言ったんじゃないのよ、エリック。ジェナは足と手が不自由でしょう。脳性マヒという病気なの。でもだからと言って、ジェナがかわいくてステキなことには変わりはないわ。」それから私は、身体的に障害を持った子供たちがいること、まただれもが完全ではなく、何らかの制限を持っていることを教えました。

それから少しして、12月の初めに電話がありました。

「もしもし、エリックのお母さんでしょうか。」

「はいそうですが……。」

「私、ハミルトンです。ジェナ・ハミルトンの母です。」

「まあ、そうですか。はじめまして。」

「私がお電話をさしあげましたのは、エリックが私たちのために、いえ、ジェナのためにしてくれていることをご存じないのではないかと思います。ジェナだけじゃありません。私たちみんな感動していますのよ。」

突然のことなので、私はびっくりしてしまいました。「あの、何のことでしょう。」私はそう正直に答えました。

「ジェナをご存じですわね。」

「ええ、学校から帰るとき見かけました。とってもかわいいお嬢さんですね。」

「ご存じだとは思いますが、手足が不自由でしてね。脳性マヒにかかったのです。」

「ええ。」

「私たちは今年の夏にここに引っ越してきたんですが、学校ではジェナを受け

入れたくないと断わってきました。学習能力は劣っていないのですが、体の自由がききませんでしょう。みんなにいじめられて、結局は学校に入れなければよかったと思うようになるだろうと言うんです。そして特殊学校に入れるように勧めてきました。でも私は受け入れてくれるように懸命に頼みました。学校側は半信半疑でしたが、私の決心は変わらなかったんです。」

「お気持ちよくわかりますわ。」

「初めは彼らの言った通りでした。大きな声でしつこく悪口を言っただけは笑いものにするんです。だれも遊んでくれませんしね。最初の1週間半は、毎日目に涙をためて帰ってきました。それから、小さな奇跡が起こったんです。エリックが……」

「エリックがどうかしたんですか。」

「もうがまんできかないと思ったのでしよう。ジェナに休み時間に遊ぼうと声をかけたんです。みんなはそんなエリックまでばかにしました。そして、大声で悪口を言ったんです。でもエリックは彼らを見捨てました。」

私は「それはうちのエリックではないわ」と心の中でつぶやきました。

「エリックは、いじめっ子たちから守るために、ジェナと一緒に歩きました。その日からエリックは学校までジェナと一緒に歩き、休み時間はジェナと遊び、帰りは家まで一緒でした。学校が始まって3週間目、男の子たちがジェナに石を投げつけました。でもエリックは、やめないと、こてんこてんにやっつけるぞ、と言ったんです。」

こういうところは我が家のエリックです。普通の子と比べると5センチくらい背が低いのですが、負けん気はだれにもひげをとりません。

「エリックが断固としてそう宣言したので、男の子たちはきつとジェナをからかうのをあきらめたんでしょうね。ジェナは今は何もかもうまくいっています。ほかの子供たちもジェナと遊んでくれますし、だれもあの子の手足にこだわらなくなってきたようですわ。」

「まあ、本当に良かったですね。」

「まだあるんです。」彼女は続けました。「きのう、エリックを呼び止めたんで

す。いろんなことがうまくいっているのでもうれしかったので、エリックにこう言いました。『あなたは本当にやさしい子ね。そんなにやさしい子になることをどこで教わったのかしら。』もちろんこれは質問ではなく、私のほめ言葉でした。でもエリックはすぐに答えてくれたのです。『僕たちの教会は、僕たちみんなが良い子になるよう教えてるんだよ。』

ええ、実際のところ本当に驚きました。そして尋ねたんです。『どこの教会へ行ってるの。』

エリックは答えました。『末日聖徒イエス・キリスト教会。ときどきモルモン教会って呼ばれているんです。宣教師の話聞きたくありませんか』って。本当に立派なお子さんですわ。」

「宣教師の話をお聞きになりませんか。」私は自分の声がそう言うのを望みました。でも、声は出ませんでした。私は答えました。「ええ、うちのエリックのことだと思います。わざわざお電話をくださって本当にありがとうございます。」

ジェナ・ハミルトンはその後間もなく、エリックを必要としなくなりました。もちろん友達には変わりなかったのですが、やがてエリックは、女の子をみんな「のろま」とからかう男の子たちと一緒に遊ぶようになりました。そしてジェナは、それから1年ほどして引っ越しました。そして私たちも引っ越しました。

私は誕生カードに目を落としました。そして、6歳のときのこの出来事は書かないことになりました。あまりにも特別な経験でしたから。

完成して、少々重量制限を越えた誕生カードをポストに入れながら、エリックがルームメイトに子供の頃の出来事を読んであげている様子を想像し、とても楽しくなりました。

電話が鳴ったのは金曜日の真夜中でした。

「お母さん、僕、エリック。」

「エリック！きょうはあなたのお誕生日よ。私のカード受け取ったでしょう。お金も。あなたはどちらも気に入ったわね。わかるわ。でもこんな時間に『ありがとう』の電話をかけてこなくていいでしょう。」

「お母さん、ちょっと聞いてよ。ブラ

ッドと僕、寮で思い出話をしてたんだ。そしたら電話がかかってきてね。それが女の子からなんだ。そしてこう言ったんだ。」

『エリック、あなたは多分私を覚えてはいらっしやらないと思います。ずーと昔のことですもの。私、ジェナ・ハミルトンです。』

『ジェナ、本当かい？もちろん覚えてるよ。でも、ユタで何してるの。遊びに来たの。』

『あなたと同じようにBYU（ブリガム・ヤング大学）に通っているの。』

『でもどうして、どうして君がBYUに来ることになったの。』

『3年くらい前のことなんだけど、お母さんと私が夕食の後片づけをしていると、ふたりの青年がドアをノックしたの。そして、自分たちはイエス・キリスト教会の代表者で、私たちにメッセージを伝えたいって言ったわ。母は「ありがとう。でも私たちはまったく興味がありませんのよ」と答えたの。そしてどうしてなのかわからないんだけど、母が「あなたたちはどこの教会の方？」って聞いたの。そしたら彼らは「末日聖徒イエス・キリスト教会。ときどきモルモン教会と呼ばれています」と答えたわ。私たちは顔を見合せて、思わず「エリックの教会だわ」と言っちゃった。私たちは興味はなかったんだけど、エリックの教会から来た人は心からもてなしたかったの。それからどのようになったかはわかるでしょう。私たちは4回目のレッスンの後でバプテスマを受けたの。』

『ジェナ、それはすごい。ねえ、きょうは僕の誕生日で、今お祝いしてるの。君はどこに住んでるの？行ってもいい？』

エリックは話を終わりました。私はとどめなく頬に伝わる涙をぬぐっていました。彼は長い間黙っていました。「それで」私は聞きました。「ジェナのところに行ったの？どうだった？」

「きれいだった。」エリックは力を込めてそう答えました。

「足は良くなったの？」

「足？足なんかどうだっていいじゃない。」

# 質疑応答

●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。

悔い改めは、主との1対1の交わりによってできるものでしょうか。それとも、監督と面接しなければならぬのでしょうか。



解答者

ジェリー・テイラー

(ユタ・プロボステキ部、  
プロボ第32ワード部監督)

この質問の内容はふたつあって、そのどちらも答えは「はい」です。スペンサー・W・キンボール大管長(当時は十二使徒定員会会員)はその著書「赦しの奇跡」の中でこう述べています。「罪人の多くは、恥と自尊心から表だった告白をしないでひそかに主に祈りを捧げ、これが犯した罪の告白として十分なことであると自分で正当化して、少なくとも一時的に良心を満足させている。『だって私は天父に罪の告白をしたのだから、これで十分です』とそのような人は言うに

違いない。しかしこれは前述の大きな罪の場合にはあてはまらない。このような場合に罪人に平安をもたらすにはふたつの赦しが必要である。ひとつは該当する教会の管理役員から、もうひとつは主ご自身からである。主はアルマに教会管理について説明したときにこの点を明らかにしておられる。

『いざ、汝ら行きて何人にてもわれに対して罪を犯す者をその罪に応じて裁判せよ。されど、もしもかれが汝とわれとにその罪を白状し真心より悔い改むるならば汝はこれを赦せ、われもまたこれを赦すべし。』(モーサヤ26:29)」(p.189)

質問の後半の方を理解するために、告白の目的を考えてみたいと思います。教義と聖約には、霊はそれを構成するものが「ひときわ極微純粹」(教義と聖約131:7)なだけで、肉体とよく似ていて書かれています。私たちの体が傷つけば、医者のところに行って治療の処方箋をもらいますが、霊を傷つけたときもそれと同じです。霊を正しく癒すための療法の一部が告白なのです。

最近のことですが、我が家の7歳の息子のウェードが盲腸をはらして、それが破れてしまいました。腹部全体に炎症が広がっていたのですが、外からは何もわかりません。適切な手当ををしていなかったら命を失うところでした。大きな罪を犯したあとの霊は、大病を患った人間と同じように、告白をしなければ癒されません。その人の霊性は弱いままで、永遠の目的に向かう気概は薄らぎ、さらに力が衰えて死ぬ危険もあります。

ただ、ここで指摘しておきたいのは、ささいなすり傷を医者に見せることはないように、「小さな」罪をいちいち監督に告白する必要はないということです。ブリガム・ヤング大管長は、「自分のほかはだれも知らない取るにたらない行為についてしゃべり立てないように」(「説教

集」8:362)と言いました。大事なのは、大きな罪と「取るにたらない行為」とを正直に区別できるようになることです。

キンボール大管長は「赦しの奇跡」の中で、その区別をするときの基準をはっきり教えています。「背罪者は『真にへりくだりたる心と悔いる精神』(教義と聖約59:8)を持ち、また進んでへりくだり、主から求められていることは何でもしなければならぬ。自分が犯した大きな罪を適切な教会の管理役員に告白することも主から求められているこのひとつである。これらの罪には姦通、婚前交渉、その他の性的な罪、またこれに類する重大な罪がある。」(p.189)

自分の犯した罪がこれにあてはまるかどうかよくわからないならば、監督に相談してください。監督は正しい助言を与えるでしょうし、秘密は口外しません。

犯した罪について監督に話す最良の時は今です。電話をして、面接の時間を約束してください。監督はワード部の会員のために、いつでも喜んで助けになってくれます。

監督と普段から定期的に面接することは、教会の全若人の特権でもあります。そうしたときに、監督から質問があると思います。それに対しては、正直に答えることが大切です。体面をつくろうために、罪に関してうそをつこうという強い誘惑があるかもしれません。しかし、キンボール大管長はそのような行動について厳しく警告しています。

「教会の指導者にうそをつく者は主が定められた大切な律法と真理を忘れているか、あるいは無視しているのである。つまり、主が人々を王国の高い位に召して、その人々に権威の衣を与えられると、彼らに対するうそは主に対するうそと等しくなり、教会の役員に半分しか本当のことを言わないことは主に半分しか本当

「重大な罪の場合、  
適切な権威ある者に  
告白することの大切さは、  
聖典に繰り返し強調されています。」

のことを言わないことになり、主のしもべに反対することは主に對して反対することになり、福音の鍵を持つ教会幹部の兄弟たちに対する違背はいずれも主に逆らう思いと行為に等しくなるのである。主はこれについて次のように述べておられる。「そは、わが僕らを受け入る者はわれを受くればなり。

また、われを受け入る者はわが父を受くるなり。」(教義と聖約84：36-37)  
(「赦しの奇跡」p.93)

重大な罪の場合、適切な権威ある者に告白することの大切さは、聖典に繰り返し強調されています。

「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。

人罪を悔い改めしや否やは、見よ、彼は自らこれを告白しその罪を捨つべければ、その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」(教義と聖約58：42-43)

「その罪を悔い改めてこれを白状した者は、みな教会の聖徒らの中に数えられども、

その罪を白状せず悪事を悔い改めない者はみな教会の聖徒の中から除かれその名を削られた。」(モーサヤ26：35-36)

「されどこの主の聖日に於ては、いと高き者に汝の捧物と聖式とを奉りて、兄弟たちに向い主の前に於て汝の罪を告白するを忘るべからず。」(教義と聖約59：12)

「赦しの奇跡」第13章で、キンボール大管長はこの質問をさらに掘り下げて、こう語っています。

「告白は平安をもたらす。多くの人々が私の事務所に来て、長い間抱いていた重い気持ちから解放されて帰って行った。分かち合うことによって彼らの重荷は軽くなったのである。彼らは自由になった。真理が彼らに自由を与えた。」(p.197)

サタンの力の限界はどの程度でしょうか。サタンは人間の心に思いを吹き込むことができるのですか。私たちの思いを見抜くことはできますか。



#### 解答者

ローレンス・R・ピーターソン・ジュニア  
(ソルトレイク・ブライトンステーク部  
バトラー第31ワード部監督)

**モ**ルモン経で言われている最も印象的な教えのひとつが、人間に対するサタンの力は、人が邪悪になるにつれて強さを増し、ついにその人は「悪魔に捕えられて」「地獄の鎖」(アルマ12：11)に縛られてしまうことです。サタンの方法は、人をそそのかし、誘って、絶えず「人々の心」(IIニーファイ28：20)の中で活動しながら、人の思いに影響を及ぼすというやり方です。ニーファイは寒気

をもよおすような言葉で、「(悪魔は)耳にささやいて一度かかったら決して逃れられない恐ろしい鎖でとうとう縛ってしまう」と、その方法を述べています。(IIニーファイ28：22)

しかし、サタンの力は抑制できないものではありません。ジョセフ・スミスは、私たちがみずからを引き渡す以外、サタンに私たちを支配する力はないと教えています。「(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.181参照) また、ニーファイは、民が正しいとサタンが無力になり、「聖者の民が義しい生活をし(たから)サタンは民の心を支配する力がなく」(Iニーファイ22：26)と説明しています。

この、サタンが人を捕らえるときとまったく無力なときの両極端の間に、人を誘い、そそのかす力が強くなり弱くなりして存在するのです。霊であるサタンは、霊の領域で神のみたまと拮抗しながら働きます。ですから私たちの自由意志は保たれ、私たちは善悪の選択ができます。リーハイが、「人間はもしもあれに誘われこれに誘われなければ、随意に選び行うことはできないのである」(IIニーファイ2：16)と教えている通りです。サタンが私たちを悪に誘えば、聖霊は私たちを徳に「導き」ます。(モーサヤ3：19参照) 人には自由意志がありますから、聖霊も悪霊も人の意志に反してその人をコントロールする力は持ちません。

霊に働くこの両勢力が、どちらも人の知と情に、聖典によれば人の心に直接働きかけて、その人は自分の意志でひとつを選び、もうひとつを無視することになります。すると勢力の変化が生じ、永遠の生命に近づくか、滅びと悲惨に向かうか、いずれにせよ一歩が始まるわけです。バプテスマを選び聖霊の賜を受けた人が神の影響の側に大きく寄る一方で、悪ゆえにパウロの言葉のように良心に「焼き印をおされ(た)」(Iテモテ4：2)人

「私たちは、  
心と勢力、思い、体力を尽くして  
神に仕えたいと望むことにより、  
不幸に導くサタンの力を  
自分から遠ざけることができます。」

は、サタンの影響の下に入ってしまうのです。主のみたまは、そうした人をもはや励まされなくなります。(I ニーファイ 7:14参照)

サタンは、人をそそのかすことにおいて強力な力を持っています。ジョセフ・フィールディング・スミス長老は次のように教えました。「私たちはサタンに接近されないように常に警戒しなければならぬ。……サタンは私たちの中に考えを吹き込んだり、言葉によらない印象を与えることによって私たちにささやきかけ、欲求や欲望を満たさせようとたくらむ力を持っている。またその他いろいろな方法で私たちの弱点や欲望に働きかけてくる。」(「福音の質疑応答」p.282)だれしも受ける誘惑は、知と情に対するささやきの形を取ることが多いものです。

次に、サタンは私たちの思いを見抜けるかという質問ですが、これは簡単ではありません。教義と聖約で、主はオリヴァ・カウドリにこう告げておられます。「神のほか汝の考えを知り汝の志を知る者更になき……。」(教義と聖約 6:16)

ある人たちはこの言葉を、人の思いを

知ることができるのはただ神だけであるという意味に解釈しています。高価なる真珠のモーセの書 4章6節に、サタンは神のみこころを知らないと書いてあることもその根拠にあげています。しかし一方では、教義と聖約 6章16節(24節も)は人間が他人の思いを知ることができないということを言っているものであり、モーセの書 4章6節はサタンが人の思いを知っているかどうかについては何も言及していないと主張する人もいます。この通り、サタンが私たちの心の思いや意図をじかに見分けることができるかどうかについて、ご質問の解答は出ていません。

最終的にどういう答えになるとしても、ある特定の疑惑に関して、サタンは私たちの思いを表わす言葉や行動から、それに私たちが負けそうかどうかくらいはわかると思います。救い主が教えられたように、木はその実によって知られるのであり、「心からあふれ出ることを、口が語るもの」なのです。(ルカ 6:45) サタンは、私たちの人物も、私たちの実も見ることができます。サタンが、私たちの露呈する弱点をたくみに利用することは確

かです。

私たちの思いをサタンが知ることができるかどうかというのは興味深い質問です。しかし、結局のところ、サタンがどのような力を持つにしろ、大して違いはないのではないのでしょうか。私たちは耐えられない試しには遭わないと約束されています。(I コリント 10:13参照)自分が望むならば、どんな形の誘惑にも常に屈服しないでいられるのです。

キンボール大管長はこう書いています。「誘惑はすべての人に分けへだてなくするのである。神に見捨てられた人とそうでない人の違いは、通常、前者は誘惑に負け、後者は誘惑に抗するところにある。」(「救いの奇跡」p.92)

私たちは、心と勢力、思い、体力を尽くして神に仕えたいと望むことにより、不幸に導くサタンの力を自分から遠ざけることができます。人の魂をつかむ闘いはその人の心の中で戦われるのであり、勝つ力は私たち一人一人にあるのです。救い主に従いたいと願うなら、だれに知られてもかまわないような清らかな思いを持つようと努めなければなりません。

## 家庭の夕べで 学ぶ信仰箇条

エリザベス・マーティンセン

**私**たちは、2歳、3歳、5歳になる我が家の小さな子供たちのために、霊的な内容のある家庭の夕べをと願ってきました。ところが、どうもうまくいかないのです。そこで、主人がある提案をしました。それは毎週、信仰箇条をもとにレッスンをするというものでした。主人はさっそく、信仰箇条第1条を絵文字に描き表わし、子供たちに「読ませ」ました。これを毎晩、家族の祈りの前にさせました。すると1週間もしないうちに、子供たちはすっかり暗記してしまいました。

2歳の子供までもです。こうして、その月の家庭の夕べでは毎回その信仰箇条に焦点を置いたレッスンをするようにしたのです。このようにすれば、毎月新しい信仰箇条を学ぶことができるわけです。この方法を取り入れたことによって、私たちは1カ月前から家庭の夕べのレッスンを計画することができるようになりました。また子供たちは信仰箇条を暗記するのを楽しみにしているようですし、福音の原則を学ぶことに喜びを見いだしているようです。

# 「その好むところに従って」

七十人第一定員会会長  
デーブ・L・ラーセン

い く度となく私が耳にしたこの話は、おそらく事実に基づいたものであるだろうと思われまふ。次のような内容です。ある日のこと、教会のある訪問者センターで、案内人のところへひとりの老人が近づいてきて、自分は教会員であるが、若いときから、もうずっと教会とはかかわっていないと話しかけました。態度が悪かったので日曜学校のクラスから追出されたのだそうです。その日以来教会の建物の中には一歩も足を踏み入れたことがなく、さらに子供や孫、ひ孫を合わせると100人を越すにもかかわらず、だれも教会員ではないとのことでした。

私の聞いたところでは、この話の意味するところは、日曜学校の役員が怒りにまかせて性急な行動に出た結果、恐ろしい代価を払わなければならなかったというものです。しかし私たちは、日曜学校の役員の話の側を聞いていません。ましてや、みづからとった行動の責任を忘れ、決して人を許さず、悔いようとしなない青年の苦悩と憎しみの歳月を考へることもしません。それらは彼自身の人生のみならず、多くの子孫の人生をも毒してきたのです。

この話は悲劇で満ちています。その悲劇は一体だれの責任で、どうしたら避けることができたのでしょうか。

教会のステーク部を訪問するたびに、日曜学校や若い女性、アロン神権定員会の各クラスで若い女性や若い男性を教える教師が直面している問題の報告をよく受けます。神権指導者が次の教師をなかなか見つけられないほどのスピードで、

教師が次から次へと代わっていくというのです。こうした実状を考へてみると、教会がいかに効果的な教師養成プログラムを必要としているかがわかります。しかし確かにその必要はありますが、不幸な事態の責任が教師にあるとは思えないのです。

私は何年もの間、自分の人生に起こったある経験に心を悩ませてきました。私が働いていた地区では、地方の高校に隣接して週日のセミナーが開設されました。ある年度の途中で健康上の理由から教師がひとり欠員になりました。そこで私が呼ばれて、一時期ですが代わりが見つかるまで、やめた教師のクラスを毎日受け持つことになりました。多くの点でそれはすばらしい経験であり、思い出しても楽しいものでした。しかしあるクラスに、かなり手のかかる男の子がいました。彼は高校の最上級生で、才能に恵まれ、頭もよくて、ほかの生徒にも人気があり、大きな影響力を持っていました。しかしセミナークラスでの彼の行動は概して分裂的で、反抗的な態度をとることで皆の注目を集めようとしていました。

クラスの中に靈的な事柄について学んだり話し合ったりできる雰囲気づくりをしたいと考えていた私は、この青年の悪ふざけにイライラのし通しでした。ところが彼の方とは言えば、ほかの生徒の注目を浴びたい一心でした。ふたりだけで何度か面接をしてもまったく効果がありません。面接のときには確かにわかったと言うのですが、次の授業ではまたクラ



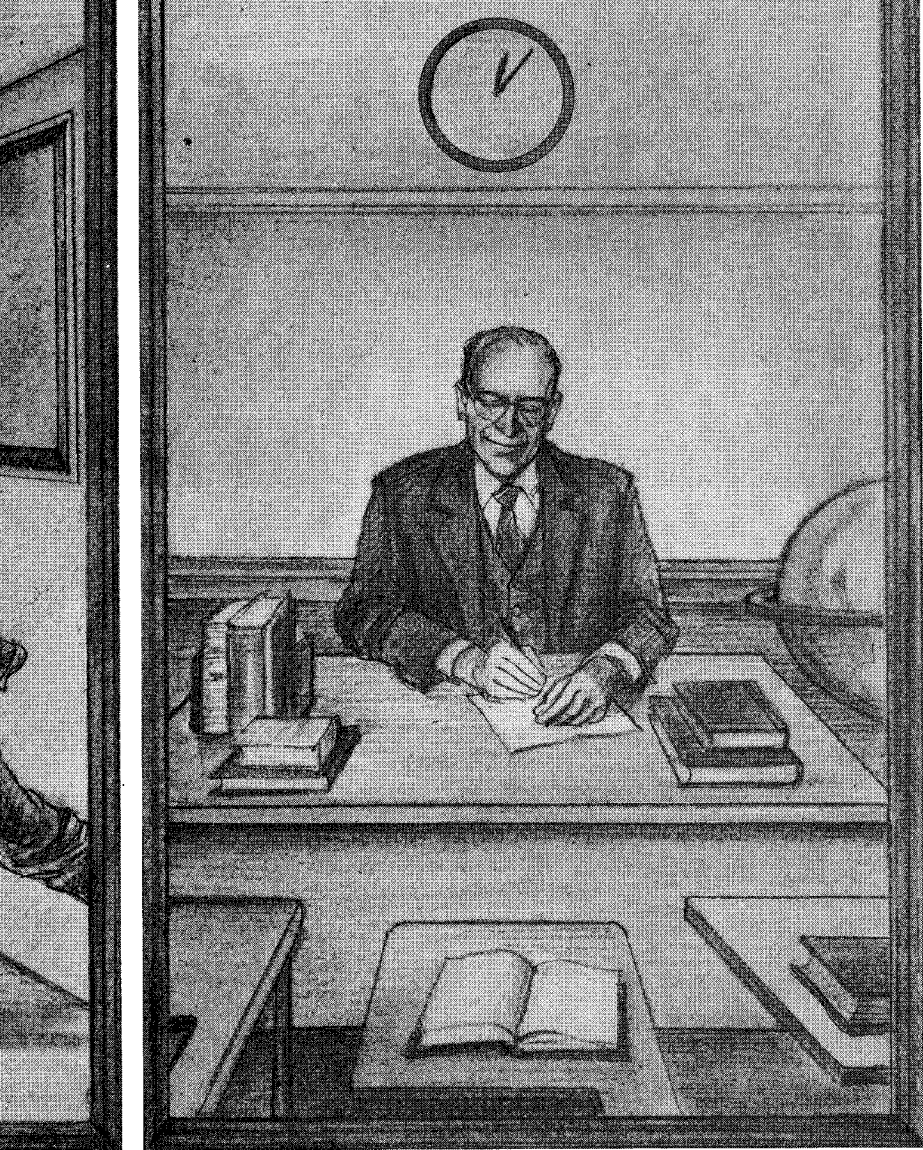
スをぶち壊すのです。

高校のカウンセリングの先生に相談したところ、彼は片親の家庭に育ち、高校のクラスでも絶えず問題児だったとのことでした。しかし能力テストの点数は平均以上なのです。

クラスの秩序と管理を維持するのに決定的な手段を講じなければならない日がとうとうやってきました。その日も彼がクラスの雰囲気めちやめちやにした後、私は彼と一緒に教室から出るように言い、これ以上ほかの生徒を犠牲にできないことを話しました。行動を慎んでセミナーのクラスに必要な靈的雰囲気を保つよう協力しない限り、もうクラスには歓迎できないと言ったのです。彼は何も言わずにくるりと後ろを向くと、建物から出て行きました。それ以来二度と彼の姿を見かけることはありませんでした。

その日の午後彼に彼の母親から電話があ





りました。怒りと悲しみに満ちた声で、セミナーのクラスから彼を追い出したことが、後々までもあなたの心から離れないだろうと言いました。この母親の予言は正しかったのです。私の心がこの経験から完全に解き放たれることはありませんでした。

この出来事から1、2週間ほどして、私は仕事が変わって、ほかの場所へ引越しました。あの青年がセミナーに戻ったかどうかはわかりません。20年以上も前のことなので、名前も覚えていません。でも、今では大勢の子供の父親となっている自分が教会を離れたことを、何年も前の心ないセミナー教師の行った行為のせいにしていない人がどこかにいるのではないかと、私はときどき考えるのです。

私はこの20年の間に、私がとったよりもっと効果的な解決方法を学んだよう

に思います。彼の態度や行ないを変えるために、自分にもできたことが多分いくつかあったはずですが、いや、確かにありました。しかしその経験を振り返るたびに、私は、彼以外の生徒のことも一生懸命心配していた自分の姿が、鮮やかに脳裏によみがえってくるのです。彼らが祝福を受けられるように、私は心から願っていました。ひとりの若者の霊的成長に対して私がとるべき責任もさることながら、彼の行動に脅かされつつあったほかの生徒たちの成長の機会に対しては、どう責任をとったらよかったですでしょうか。そして、彼の責任はどうなるのでしょうか。

つい最近、私はあの若者の話とは対照的な経験をしました。あるステーク部大会の土曜の夜の部会を終えたところで、ひとりの婦人に「私を覚えていらっしゃいますか」と挨拶されたのです。顔はど

こかで見かけたようなのですが、思い出すには助け船が必要でした。

その姉妹は、何年も前の高校の文法のクラスで私の生徒だったのです。すぐに32年前の彼女を思い出しました。生徒会の一員で良い生徒でした。私たちは共通の思い出話に花を咲かせ、彼女は家族に私をうれしそうに紹介しました。結婚している子供たち、宣教師として伝道中の息子がひとり、それに孫も何人かいました。堅固な家族が築かれて、地域社会や教会ですばらしい貢献をしていることがよくわかりました。

訪問中にこのすばらしい姉妹が私に突然聞くのです。「私にクラスから出て行くようにおっしゃった日のことを覚えていますか。」その質問にびっくりしただけでなく、そんな出来事は全然記憶にありませんでした。彼女については良い生徒だったという思い出しかなかったので、彼

自分の欠点は棚に上げて、  
互いに生活に深くかかわっている人に  
責任をなすりつけているうちは、  
双方に不幸な思いが続くだけです。

女が錯覚しているのではないかと思いました。それでも彼女は言い張りました。「いいえ、おしゃべりばかりしていた日があったのです。先生から注意されたにもかかわらず、言うべきではない失礼を申しあげてしまいました。すると先生に教室から出るように言われて、私はびっくりしました。私をそのように罰した先生はひとりもいませんでしたから。私は出るのを拒みましたが、先生は私を廊下に出したところで、きちんとできるようになったら戻ってもよいとおっしゃったのです。

私は自分が惨めでなりません。そして、どうやったら返しができると考えていました。父は地元の有力者だったのでこのことを聞いたら黙っていないでしょう。

でも、後になってその日のことを冷静に考えてみると、先生が正しくて私が間違っていたことがわかりました。ほかの先生や友達、私のそんな態度をずっと黙認してきたのです。今まで気づかなかった自分の性格を発見して、変えなければと決心しました。それで私はクラスに戻ると、教室での非礼を先生におおびしました。それは私の人生でとても大切な転機でした。先生にはいつも感謝しております。」

これはある若い女性が失敗の中から自分の責任に気づき、正義のためにふさわしい行動をとった例です。このことから深く考えさせられました。この女性と、セミナーのクラスから同じようにして出されたあの青年との間にあるこの違いをどう受けとめたいのでしょうか。同じ状況でそれぞれが示した反応は、それからの長い人生にどのような違いとなって現われているのでしょうか。同じような状況にあるほかの人々はどうか。

両親も教師も指導者も友人も、みんな

愛と関心と助けを与える責任があります。しかしその責任と、愛と関心と助けを受ける側の人の責任とは、どこかで合流するのです。他人との論争やあつれきにかかわることが多い人は、自分が一体どの程度その問題の要因になっているか、正直に自分の心に尋ねてみるべきです。自分や他人にとって害になるようであれば、行ないを正す責任があります。自分の欠点は棚に上げて、互いに生活に深くかかわっている人に責任をなすりつけているうちは、双方に不幸な思いが続くだけです。

モルモン経のよき教師であり指導者であるアルマも、一向に反応を示さない人人の心をどうにかして動かそうと、じりじりしていました。そんな欲求不満のように表現しています。「ああ私が天使になって私の心の願いを達することができたら善いものを。私の願いとは出て行って神のラッパのように地を震わせる声で話し……。」(アルマ29:1)

おそらくアルマは、拒まれ退けられたアモナイハ市での経験を思い出していたのでしょうか。人々の足もとの地を震わせることができたなら、驚かして服従させることもできたかもしれません。しかしアルマはそれは神の方法ではないことを知っていました。

「私は多過ぎる希望をもって正義の神の堅い取り極めを不満に思ってはならない。なぜならば、人が死を願うのにも生を願うのにも神はこれに応じたまい、人の心が救いを求めるのも亡びを求めるのも神はこれを許したもうと言うことを知っているからである。

善も悪も一切の人々の前にある。善と悪とを区別することのできない者はこれを責めることができない。しかし、善悪の区別を知る者は善を好むも悪を好むも生を好むも死を好むも、また喜びを好むも良心のとがめを好むも、各々その好む

ところに従って与えられる。」(アルマ29:4-5)

ひとたび何が善で何が悪かがわかったら、私たちは自分の行ないに自分で責任をとらなければなりません。良い両親を持つことはとても大切なことですが、良い息子、娘であることも同じように重要です。つまり、責任は私たちにあります。良い教師や指導者に恵まれることは大切なことですが、良い生徒、良い支持者であることも同じように大切です。自分の責任を他人の肩に負わせることはできません。主は現世の生涯を、自分勝手な行ないの結果から最終的には逃れることのできない場として造られました。

若人の皆さん、教師やアドバイザー、指導者がふさわしくないし、おもしろくないと感じたときには、はたして自分自身は良い生徒であるのか、また定員会の兄弟、息子、娘として立派であるか、正直に心に尋ねてください。自分も含めてみんなが、持っている可能性を伸ばせるように、一生懸命取り組んでいるのでしょうか。それとも、時々起きる問題の原因になっている自分に言い訳を探していませんか。もし過ちを犯しても、自分の責任を認めて、もっと良いことをしようという勇気と誠実さを持っていますか。

いつの日か私が教会のどこかを訪問したときに、次のような言葉で私に近づいてくる男性が現われるように希望を持ち続けたいと思います。「私を覚えていませんか。あの日あなたのセミナークラスから出て行った生徒です。あのとき私は人生の大切な教訓を学びました。すべてが良い結果をもたらしていることをあなたに知っていただきたいと思ひまして。」

そのときこそ、あの日以来20年間心にかけていたことが消え去る日なのです。そして、彼の夢に悩まされることも、もうなくなるでしょう。

ふさわしい  
時に  
ふさわしい  
所で



**私**は77名のアメリカ人学生と共に、フランクフルト行きの飛行機に乗りながら、興奮と期待に胸をはずませていました。私たちは1カ月間を西ドイツのニューレンベルグで過ごすことになっており、その間ドイツの高校（ジムナジウム）を訪ねたり、ドイツ国内のツアーに参加することになっていました。中でも一番の楽しみは、78家族ものドイツ人が私たち同様、胸はずませながら、到着を待ちうけていることでした。私は、ニューヨーク、フランクフルト間の8時間という飛行時間がもどかしく、なんとかもっと縮まらないものかと思いました。私は、ぶつからないよう手荷物を高く

持ち上げながら、機内の奥へと進んでいきました。最後列のひとつ前の列に自分の座席を見つけると、私はさっそく頭上の棚に荷物を置き、ため息交じりに腰をおろしました。私と隣合わせになった人は、18年前にドイツから移住してきたという、ペンシルベニア州ピッツバーグ出身の感じの良い女性でした。彼女はミュンヘンの家族に会いに行くところでした。私たちは、夕食が出されるまで、ドイツ語と英語を交えながらいろいろな話をしました。

私は食事をしながら、ドイツ人は食事時にどんな飲み物を飲むのか尋ねてみました。

「ビールかワインです。」すぐに返事が返ってきました。

「そうですか、私はお酒をやらないのですから……。」私が答えました。

「向こうに行かれたら、すぐに飲めるようになりますわ。」彼女はくすくすと笑いながら言いました。

「いいえ、私は宗教上、飲まないことにしているんです。」

「じゃ、あなたはモルモンですか。」

「ええ、そうですが。どなたかモルモンをご存じなんですか。」私は教会の話ができたかと思いながら、尋ねました。

「ええ、一度若い男の人たちが来てくださったことがあります。」

「宣教師ですか。」

「さあ、白いシャツに地味なスーツを着ていました。」

「じゃ、間違いありません、宣教師ですよ。」私は確信をもって言いました。

「とても親切な方たちでしたわ。」

「彼らのことについて何かわかりましたか。」

「ええ、自費で伝道していらっしゃることに、ガールフレンドを作っちゃいけないということかしら。そうなんですよ？」

「ええ、そうです。」私は答えました。

間もなく、彼女の方からいろいろな質問が出され、私の方はすっかり答える側に立ってしまいました。夕食の食器が片づけられ、機内が薄暗くなると、スクリーンに映画が映し出されました。しかし私たちふたりは、映画など気にもとめず、話に熱中しました。

話はすぐに十分の一や永遠の結婚、死者のための儀式、知恵の言葉、そのほかの福音の原則にまで進んでいきました。彼女は私の話にも何の疑いもはさまず、ただうなずいて聞いていてくれました。ひとつづつ説明が終わればまたひとつと、彼女はいろいろな質問をしてきました。

こうして当然のように話はモルモン経へと入り、気がつくと、私はニーファイ人やレーマン人のこと、そしてモルモン経に関してモロナイの果たした重要な役割について誇らしげに説明していたのです。そのあと、話はジョセフ・スミスのことに入っていきます。彼女に真理を伝えているという確信から、私の心は温かい気持ちに満たされました。

1時間以上にもわたったでしょうか、質問に対する私の説明がひと通り済み、彼女の方も一段落したようでした。私は今自分の経験したことに気持ちが圧倒されそうになりながら、少しの間背もたれに寄りかかりました。そして、このような機会に自分をこの座席に座らせてくださったことを、また何を話すべきかを教えてくださいました。感謝しました。

しかし、これだけで終わってほしくないという気持ちから、私は彼女にモルモン経を差し出しました。必ず受け取ってもらえるという自信があったのです。と

ころがそうはいきませんでした。「結構ですわ。」彼女のそっ気ない返事が返ってきたのです。彼女がなぜそのような返事をしたのか、理由はすぐにわかったのですが、一瞬私はがっかりしてしまいました。彼女はこう続けました。「私、英語があまり読めないんです。ですからお借りしても、ほとんど内容が理解できないと思います。」

私はやや興奮気味にバッグに手を伸ばし、中から一冊の青い本を取り出しました。そしてそれを彼女に渡しました。そこには「Das Buch Mormon」と書いてあります。「これは、ドイツ語ですよ。」私は少々誇らし気な気持ちを抑えながら言いました。彼女は大変驚いたようでしたが、私にお礼を言うとパラパラとページをめくりました。「そうそう、この本を読む人に特別な約束がしてあるんです。」私はそう言ってモロナイ書10章3節から5節を指しました。

2、3分の沈黙のあと、彼女が言いました。「少し読ませていただくわ。飛行機を降りるまでにはお返ししますから。」

「いいえ、いいんです。差しあげますよ。私のここにありますから。」私はすぐに答えました。彼女は目を輝かせ、お礼を言うと読み始めました。しばらくしてから、彼女は宣教師を派遣してもらえるようにと、自分から私に住所を教えてくださいました。

私は感謝の祈りをしながら日記を開け、そこに信じがたいような今の出来事を書き記しました。やがて機上の旅も終わり、私は再び彼女のお礼の言葉を背に受けながら、別れを告げました。

ドイツから帰ると、私はさっそく彼女の住所をペンシルベニア州のピッツバーグ伝道部に送りました。彼女が教会員になったかどうか、それはわかりませんが、私はいつかきっとそうなると信じています。

この旅から帰って間もなく、話の準備をしていた私は、ふと教義と聖約100章4-8節に目が留まりました。その聖句は、もともとジョセフ・スミスとシドニー・リグドンに与えられたものですが、私にもあてはまるように思えるのです。私はこの聖句から、自分のいるべき所において、自分のなすべきことをなし、聖霊を通して天父に耳を傾けることの大切さを学びました。

を学びました。

「この故に、主なるわれ汝らをしてこの地に来らしめたり。何となれば、かくの如きは人々を救うために必要なりし故なり。」

この故に、誠にわれ汝らに告ぐ。この民に向いて汝らの声を挙げ、而してわが汝らの心に与えんとする思想を語れ。さらば、汝ら人々の前にあわて惑うことなかるべし。

そは、汝らの言うべきことはその時その瞬間に与えらるべければなり。

されど、われ一つの誠命を汝らに与う。すなわち、汝ら何事にまれわが名によりて宣ぶる事は、すべてに於て厳肅なる心、柔和なる精神を以てこれを宣ぶるべし。

さらば、われこの事を約束す。すなわち、汝らこれを為さば、聖霊汝らに注がれて何事にまれ汝らの語るすべてのことを証せん。」

私はまた、天父が私を必要とされるそのときに、その場所に居合わせることを心から望んでやみません。



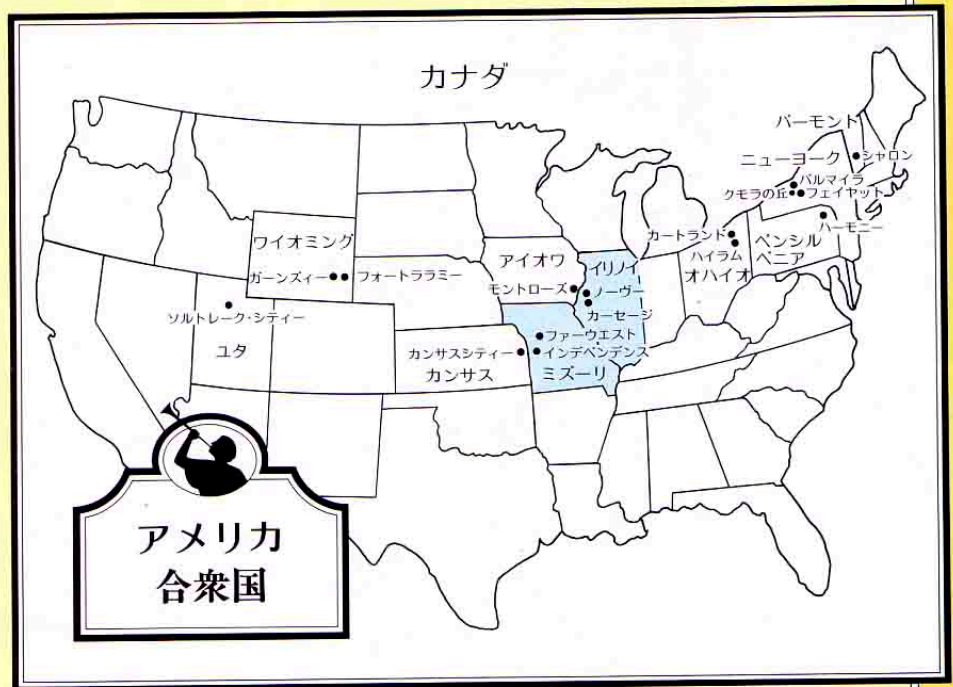


# あの場所は今

## カメラによる教会史跡巡り

教会史跡をカメラで追うその2回目、今月はミズーリ州とイリノイ州を巡る。撮影はエルドン・K・リンショテン。

上：空から見たミズーリ州インデペンデンス。1831年8月3日、ジョセフ・スミスは1.2ヘクタールの神殿用地をここに奉献した。12月19日にはエドワード・パートリッチ監督が、さらに25ヘクタールの土地を130ドルで購入している。写真では、復元末日聖徒イエス・キリスト教会のドーム型講堂の左手が神殿用地。講堂の真上が末日聖徒イエス・キリスト教会訪問者センター、さらにステーキ部センターの駐車場、ステーキ部センター、その上部に隣接するのが伝道本部と事務所になっている古い教会堂。神殿用地には、チャーチ・オブ・クライスト所有の白い木造の集会所が建っている。





上：空から見たノーヴー。中央右に神殿跡地，中央左に七十人会館が見える。

右：弟子たちを召す救い主を描いた大きな複製画が，ノーヴー訪問者センターに展示されている。

下：ノーヴー神殿跡地を東に見て。基礎はすでに発掘されている。





タイムズ・アンド・シーズンの建物。1839年から1846年の間に、社名をいただく新聞と、モルモン経、教義と聖約、讚美歌、そのほかの教会書籍がここから発行された。



前方の建物は復元末日聖徒イエス・キリスト教会所有のノーヴー館。中央左の薄色の建物が、予言者ジョセフが最後の10カ月を過ごしたマンション・ハウスである。



インデペンデンスの訪問者センター。1971年に神殿用地の一部として献納された。

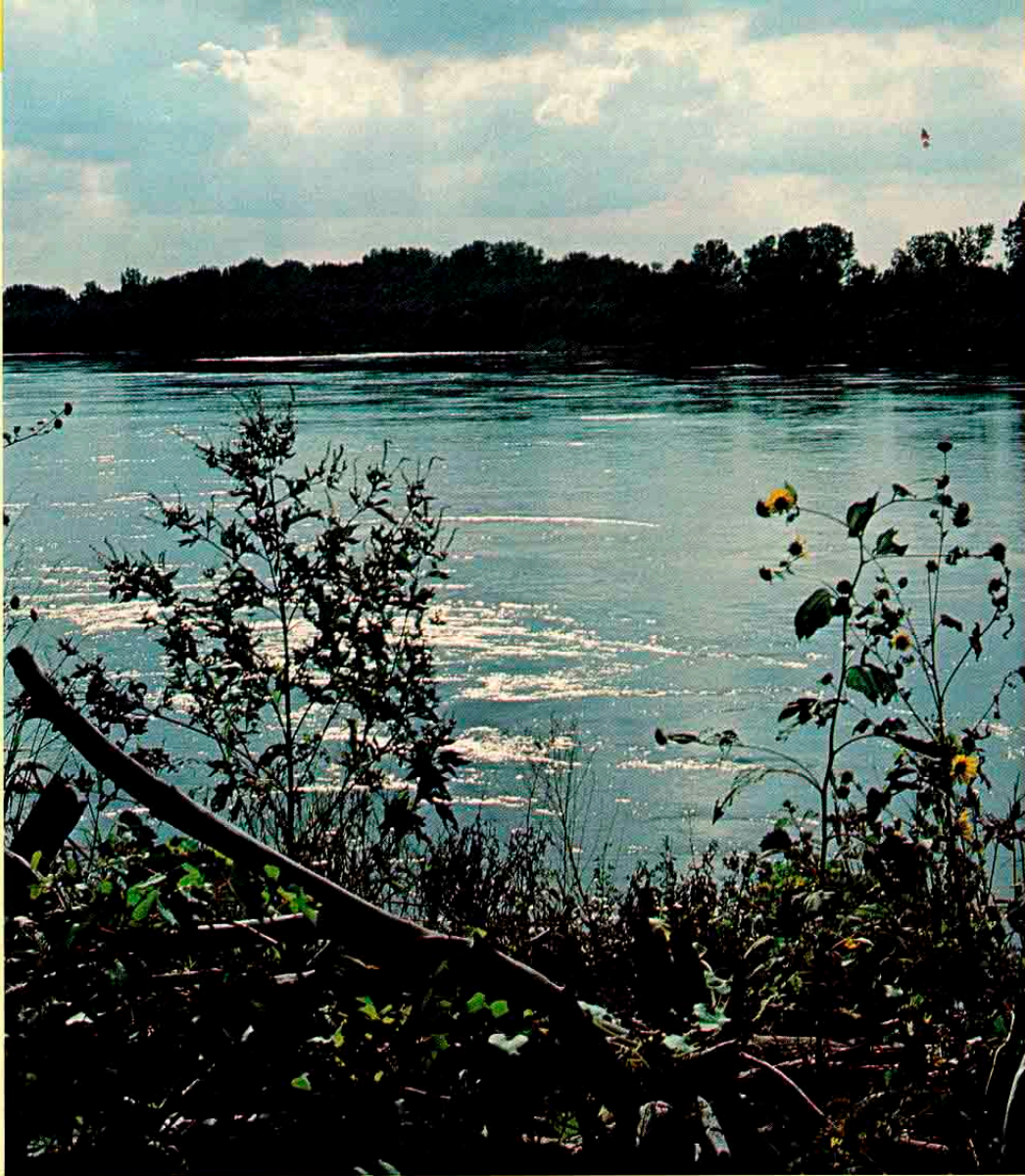


上：1929年に行なわれたインデペンデンス神殿用地の発掘で、建設予定の北東部分近くに石灰岩盤が露出、表面を削って1831年という文字が刻まれていた。チャーチ・オブ・クライスト所有。

右：同じく発見されたこの石には「SECT 1831」と刻まれている。「神殿の南東隅 (south-east corner of temple)」という意味。







ジャクソン郡から追われた聖徒らは渡し船でミズーリ川を渡し、この州をあとにした。インデペンデンス船着き場や近辺の渡し場から数千の人々が冬期の旅に出、パーレー・P・プラットはその光景を「言語に絶する」と書いている。



1838年、聖徒たちはミズーリ州コールドウェル郡ファーウエストに集合した。予言者ジョセフはこの草深い野原を神殿用地として奉献し、教義と聖約118章では十二使徒たちがここから英国伝道に出立を命じられている。聖徒たちは暴徒により州を追われたが、忠実な使徒たちは異国への航海に出発する前にこの地を再び訪れた。写真は神殿の南西側礎石。

右上：カンサス・シティーに最初に設立された学校の記念碑。1862年建立。  
この学校は1831年8月2日、末日聖徒が壁の丸太積みから着手した。  
左上：ノーヴーの渡し場からミシシッピ川越しに望むアイオワ州モン  
ローズ。1846年の冬、開拓者たちはここから凍結したミシシッピ川を渡った。  
下：ノーヴー神殿の西にあるこの林の中で、毎日曜日に2回集会が開かれ  
た。ジョセフ・スミスは、かくまわれていた間、エドワード・ハンターの  
白い家の窓を開け放して、そこから礼拝に加わった。





# 日曜日は休業！

クウィンティン・ウォー、レイ・ウォーの  
話をルース・ヘイナーが記述したもの

「うちの帳簿を見てください。日曜日に店を開けようなんて、絶対に思わなくなりますよ。数字を見ていただければわかりますが、日曜日も営業していた年で、その日に利益が上がったためしはありませんからね。」

若い頃、私は妻と一緒に数年間、アイダホフォールズの飲食店で働いていました。店の方は日曜日も営業していたのですが、どういうわけか日曜日になるとどうもむだなお金が出ていってしまうんです。いつも機械類が故障し、お客の注文に<sup>こた</sup>えられなくなってしまうんですよ。修理人を頼めば、その日は普段の2倍の手間賃が取られるのです。かといって、機械類に精通した人を雇うのはなかなか大変なことでした。私たちは、自分の店が持てるようなことがあったら違ったやり方をしようと話し合っていました。

そうしたある年、ついにその機会がやってきました。私たちは小さなレストランを手に入れたのです。しかしその店を買うために、私たちは多額のローンを抱えることになりました。金融業者や周囲の飲食店の所有者たちは私たちに、日曜日という最も売上げの期待できる日にフル回転で働かない限り、ローンを完済することはできないだろうと言いました。

すでに頭金を払い、なんとか仕事を軌道に乗せたいと思っていた私たちは悩みましたが、結局、店は日曜日にも開けることにしました。

彼らの言う通り、日曜日は私たちににとって大切な日となりました。日曜日に開店すると決めたからには、もう変えるわけにはいきません。私たちは、休業することで仕事に損失がくことを恐れていたのです。そしてついには心の奥底に、日曜日に開店しなければお客をなくしてしまい、店を自分たちのものにするだけの大きな利益を上げることはできないという考えを抱くようになりました。

ところが、ようやく目標に達した頃、私が心臓発作に見舞われたのです。日曜日に働いてくれる人を捜すのは大変なことでした。そこで私たちは仕方なく冬の間だけ、日曜日は休業することにしました。

医者には私たちのそうした決断を知り、私が少しでも多く休養を取れることを喜んでくれました。しかしひと月ふた月とたつうちに、私は帳簿に記された仕事の量が減っていることに不安を抱き始めました。そこである日、私はもう一度日曜日に店を開けようと妻に話を持ちかけました。妻は少しの間だまって私の方を見

てから言いました。「鏡をのぞいてごらんさない。毎週7日間も仕事を続けられる人と思うの？」

「それもそうだね。」私はゆっくり答えました。「やっぱりやめよう。」

あとで、私たちふたりは年間の売上げを調べ、評価してみました。結果は恐れていた通りでした。総売り上げは、前年より1万7千ドル以上(約425万円)も低くなっていました。ところがどうでしょう。仕事の量が減ったにもかかわらず、利益の方はわずか10ドル(約2,500円)少なくなっただけでした。驚いたことは言うまでもありません。この数字に気をよくした私たちは、もう1年日曜日を休業してみることにしました。結果は同じでした。売り上げは減少しても利益は変わりませんでした。こうして私たちは、日曜日に開店しなくてもうまくやっていけるようになったのです。

健康を害したことや日曜日にせつせと働きながら何の利益も上がらなかったことを考えると、安息日の律法に従って得られる報いに気づくまでに、なんと手間どったのかと我ながらあきれてしまいます。安息日は主の日です。安息日を尊ぶときに、私たちは確かに祝福されるのです。

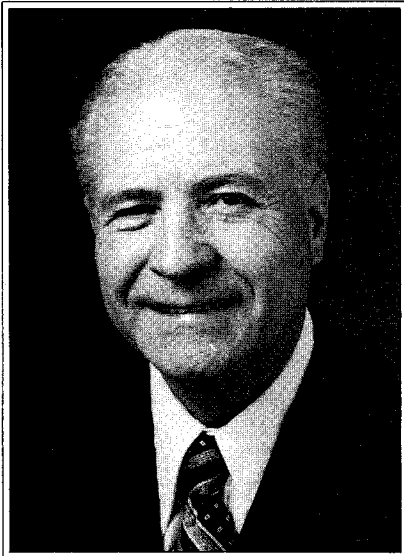
「わたしはよみがえりであり、  
命である。

わたしを信じる者は、  
たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、  
わたしを信じる者は、  
いつまでも死なない。」

（ヨハネ11：25,26）

# 各地のたより



## 七十人第一定員会 会長会G・ホーマー・ ダラム長老逝去

1月10日に心臓発作のため74歳で死去した七十人第一定員会会長の一員、G・ホーマー・ダラム長老の告別式が1月14日、ソルトレーク・シティーで行なわれた。

ダラム長老は十二使徒会地区代表を経て、1977年4月、七十人第一定員会の一員に召された。そして1981年10月からは定員会会長会の一員として、その務めを果たしていた。

1911年ユタ州パローワンで生まれたダラム長老は、英国での専任宣教師をはじめ、ユタ州、アリゾナ州の高等評議員、日曜学校中央管理委員会、教会成人委員会委員長など広範囲にわたる教会の責任を受け、逝去したときは教会歴史部の実務部長であった。

ダラム長老は職業においても、教育者としてみごとな管理能力を広く発揮した。1960年代のアリゾナ州立大学学長在任中、学生の登録数は過去の約3倍の26,000人に増加し、カリキュラムも法律、建築、機

械工学、看護学が正式に取り入れられ、さらにラテン・アメリカおよびアジア問題を含む各種研究機関が確立された。

1970年にはユタ州に戻り、ユタ高等教育委員会第一コミッショナーおよび理事長を教会幹部に召されるまで務めた。アリゾナに移る以前は、付属行政研究所長(1946-53)、政治学部長(1948-53)、ユタ大学副学長(1953-60)を歴任した。またユタ州立大学で、さらにはかつて博士号を取得したUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)では非常勤教授として、教鞭を執った。そのほか行政・教育委員、州行政顧問として、また各行政組織の役員としてその任に当たった。

またダラム長老は、行政学に関する数々の書籍の著作、編集、監修でその名を知られており、さらにジョセフ・スミス、ジョン・テイラー、ウイルフード・ウッドラフ、ヒーバー・J・グラント、デビッド・O・マッケイ各大管長に関する研究の業績も周知のところである。

遺族は妻ユードラ・ウィットナー・ダラム姉妹、息子ひとり、娘ふたり、孫20人、ひ孫ひとりである。

## エチオピアに援助の手 を差し伸べる末日聖徒 イエス・キリスト教会

末日聖徒イエス・キリスト教会は、これまで、飢餓に苦しんでいるエチオピアの人々を援助するための救済活動に積極的に携わってきた。教会福祉事業部長のグレン・L・ベース兄弟は、その資金が断食献金から出されていることを説明した後で、次のように語っている。

「福祉事業部は、大管長会と管理監督会の指示により、食糧が不足して困っているエチオピアの人々のために、国際救済機関を通じて援助をさせていただいております。援助の内容は、食糧の調達とその輸送費用をまかなうことです。」

この救済運動に参加を希望する兄弟姉妹

は、これまで通り断食献金を納めるよう、またできれば納める額を増やすよう勧められている。

## ブリガム・ヤング大学 フットボールチーム、全米 チャンピオンの座に輝く

ラベル・エドワーズコーチの率いるブリガム・ヤング大学(BYU)フットボールチームが、去る12月21日にカリフォルニア州サンディエゴで行なわれたホリデーボウルでミシガン大学を24対17で下し、名実ともに全米の最高峰を極めた。BYUの年間通算成績は13勝0敗。今まで無敗でチャンピオンの座を手にしたのは、1971年のネブラスカ大と今回のBYUの2校だけである。

全米ランキング1位は、BYUフットボールチームにとって遠い夢だった。これまでギフォード・ニールセン、マーク・ウィルソン、ジム・マクマン、スティーブ・ヤングなどの名クォーターバックを輩出しながらも、BYUが属する西部体育連盟(WAC)に強豪チームがいなかったことなども手伝って、全米ランキングは一昨年の7位が最高だった。しかし今回はその実力がシーズン初戦で一昨年全米第3位のピッツバーグ大を20対14で破ったことで認められ始め、UPL、AP、「スポーツ・イラストレーテッド」誌のすべてが、すでにホリデーボウル前からBYUをトップにランクしていた。それが、ホリデーボウルでビッグテンの強豪ミシガン大学に逆転勝ちを収めたことで確かなものとなったのである。

エドワーズコーチはこう語る。「私たちのこのタイトルは、受けるべくして受けたものだと確信しています。ミシガンのような強豪チームに6回もターンオーバーを許しながら逆転するんですからね。」

しかし、ゴードン・B・ヒンクレイ副管長の次の言葉は、このチームの別の側面を浮き彫りにしてくれる。「BYUが全米チャン



BYUの強肩パッサーであるクォーターバックのロビー・ボスコ兄弟。全米最優秀選手に贈られるハイズマン賞の候補にノミネートされたが投票の結果では第3位となった。

ピオンに輝いたことは、大学にとっても、州にとっても、また教会にとっても偉大なことです。しかしそれに加えて、チームメンバーの中の52名(40パーセント)が帰還宣教師で占められているという事実は、注目に値します。……報道機関は、単にBYUの成績だけでなく、チームメンバーの日常生活や道徳規範、また教会の信条にまで触れて、当教会の真実の姿を伝えてくれます。』

## 世界的心臓外科の 権威ロバート・E・ ファウルズ博士来日

**世**界的な心臓外科の権威であるロバート・E・ファウルズ博士が去る12月、東京女子医大主催の心筋症シンポジウムに招かれて、キャサリン夫人と共に来日した。ファウルズ兄弟はハーバード大学医学大学院を優等で卒業した後、スタンフォード大

学メディカルセンターで心臓移植チームに加わるなど、心臓病の専門家として世界的に高名である。現在はソルトレーク・クリニックで医療活動に携わると同時に、米航空宇宙局(NASA)の宇宙飛行に伴う医学上の問題を研究する委員会のメンバーとしても活躍している。

今回ファウルズ兄弟に同行したキャサリン夫人は、日本の地を奉獻した第7代大管長ヒーバー・J・グラントの曾孫にあたる。

ここにファウルズ兄弟姉妹の証を紹介する。

**「曾祖父が奉獻させていただいたお国に来て、感激です」** キャサリン・ファウルズ姉妹

**私**たちは、末日聖徒イエス・キリスト教会で教えられている福音を実践することによって心が平安になり、幸福生活を送ることができます。私がそう確信したのは、20代初めでした。この世の誘惑は大きいです。サタンは、酒やタバコを飲めば友達もできるし、本当の親しいつきあいができると言って誘います。私は断言します。そのようにしてできた友人関係や親密な間柄は決して長続きしません。状況が変わればもう終わりです。それに対して、神との霊的な交わりは、私たちの方で断ち切らない限り永遠に続きます。神は決してご自身で扉を閉じられることはありません。閉じるのは私たちの方なのです。

私は今まで世界各地を旅し、いろいろな国々の教会員の方とお会いする機会がありました。そして、福音を実践するために私たちよりもずっと大きな犠牲を払っている方がたくさんおられることを知りました。犠牲を払うのは大変ですが、その大変さの中に私たちを強くしてくれるものがあるのです。今、私は日本に来て、日本の教会員の方々が犠牲を払いながら知恵の言葉を一生懸命守っておられるのを知りました。お茶やお酒など、お断わりするのが大変なこともあると思います。私の住んでいたカリフォルニアではワインを振る舞うことが生活の一部になっていて、時々むずかしい状況に追い込まれることもありましたが。しかし今までの経験から、培ってきた友情の質が高ければ高いほどそれが互いの嗜好に左右されないことがわかっています。

皆さんも同じだと思いますが、私の育った東部では、教会に出席したり神殿に集ったりするのに遠い道のりを通わなければならない人がたくさんいます。それでも彼らは、大きな犠牲をもちかえりみず主を礼拝することによりどれほど豊かな報いが得られるかを知っているのです。

私たちは、福音の原則を生活に取り入れれば取り入れるほど、充実した幸福生活を送ることができるようになります。たくさんの方を達成できるようになります。また困難な問題に直面しているときは、自分に具わっている霊の力や兄弟姉妹たちの助けによって力を得、また今までに得た祝福の数々を思いめぐらしながら努力するようにしています。主は苦難を乗り越える力を私たちに約束しておられます。そして苦難を乗り越えたとき、私たちは人の手になるものによっては決して生み出すことのできない「高い」思いを得ることができるのです。

私はヒーバー・J・グラント大管長の曾孫として、日本の兄弟姉妹にこの証ができましたことを心からうれしく思っています。

**「私たちの細胞は年々新しくなっています。では、  
霊はどうでしょうか」**

ロバート・E・ファウルズ博士

**私**の半生を通じて、主はたくさん祝福を私にくださいました。その中で最大のものは、証です。それも、モルモン経を読んでそこに書かれている救い主についての記述に触れながら、少しずつ得てきたものです。



地区代表の相良健一長老ご夫妻と共に

モルモン経には偉大なメッセージがたくさんありますが、そのひとつに、愛にあふれたイエス・キリストの教えはあらゆる偽りの知識を凌駕するということがあります。この特別な季節にあたり、私たちは救い主への愛をいついかなるときでも持ち続けるように決意する必要があるのではないのでしょうか。また同時に、天の御父が私たちをいつも見守っておられることも忘れないようにしなければなりません。

主が私たちに授けてくださるのは「幸運」ではありません。「機会」です。什分の一の律法を考えてみてもわかるように、祝福は授けられた機会を生かして従順に什分の一を納めることによって得られるのです。これが御父がとられる方法です。

私たちは毎年毎年進歩していきます。今年のあなたは去年のあなたではありません。私は医師として、人間の体が常に変化していることを知っています。体は再生を繰り返しているのです。皮膚はもちろんのこと、内臓や骨でさえ、小さな細胞がどんどん変化を遂げています。

では、霊はどうでしょうか。体と同じように、霊も毎年毎年進歩していかねばならないのではないのでしょうか。よほど沼のようであってはいけないのです。だれであっても、また老若を問わず、常に変化することができるというのは実にすばらしいことです。そして最も効果的に、しかも良い方向に変われるのは、イエス・キリストの福音に従ったときなのです。

私はこれまで、教会員であることで不利な立場に追い込まれたことは一度もありません。福音は私の公私にわたる生活の中で確実な指針となってきました。リーハイのリアホナと同じです。私はニーファイの次の言葉を信じています。「私は、主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命令も人に下したまわないことを承知しているからである。」(I ニーファイ 3 : 7)

これが私の証です。この1年、互いに戒めを守ることにより、より良い自分へと変わろうではありませんか。

## 「われらの力なる神に むかって高らかに歌え」

(詩篇81 : 1)

—東京地区インスティテュートの  
「音楽の夕べ」に400人が出席—



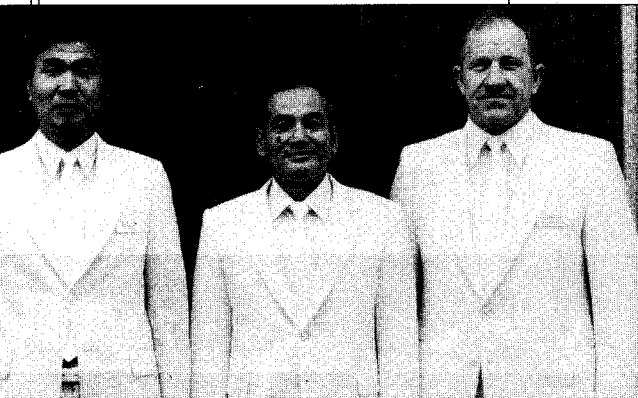
聖歌隊を指揮する武田修兄弟

**去**る12月23日(日)、東京ステークスセンターにおいて「音楽(讃美歌)による礼拝」と「賛美の喜びを分かち合う」ことを目的に、インスティテュートのファイヤサイドとして「音楽の夕べ」を催しました。

この「音楽の夕べ」では、東京渋谷と池袋インスティテュートの学生を中心に70名の聖歌隊が組織され、地区代表の相良長老、鈴木長老をお迎えして開かれました。400名もの兄弟姉妹が礼拝堂に集い、みたまに満たされたひとときを過ごすことができました。

渋谷と池袋インスティテュートの合同ということで、広い地域に聖歌隊員が分散していることと、短期間で練習しなければならぬことが大きな問題としてありました。また、初めて会う兄弟姉妹たちばかりで、果たして心を合わせて歌うことができるだろうか、という不安をだれもが感じていたと思います。しかし、同じ信仰を持つ霊の兄弟姉妹たちが、まことの父なる神様に向かって心からの賛美をするならば、必ず特別なみたまが私たちをつないでくださるという確信のもとに一人一人が精一杯の努力をしました。

学業、仕事、家庭、教会での責任を果たし、さらに聖歌隊の準備をするというのは、とても大きなチャレンジでした。そのような中で、ある姉妹は歌詞を覚えるために自分で小さな歌詞カードを作り、通学のとき



サム・K・島袋神殿長ご夫妻

●写真左より第一副神殿長の渡辺驩兄弟、神殿長のサム・K・島袋兄弟、第二副神殿長のレイモンド・C・プライス兄弟

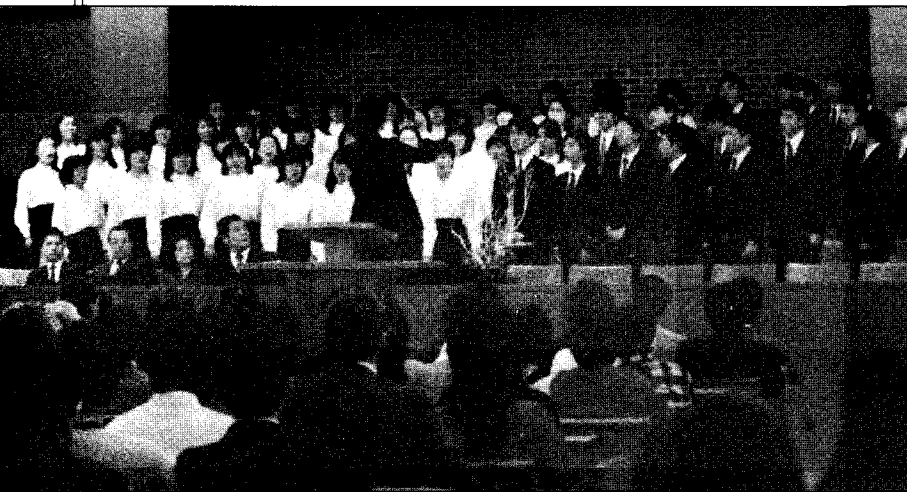
## 東京神殿長会再組織される 新神殿長にサム・K・島袋兄弟

これまで1年半にわたり東京神殿長を務めてきた七十人第一定員会会員のアドニー・Y・小松長老が解任になり、ハワイホノルル出身のサム・K・島袋兄弟(59歳)が1月13日、ゴードン・B・シンクレイ第二副管長により按手任命され、第3代目の東京神殿長に就任した。第一副神殿長には渡辺驩兄弟が、第二副神殿長にはホノルル西ステークス部第一副ステークス部長であったレイモンド・C・プライス兄弟(元日本東京北伝道部長ハリスン・T・プライス兄弟の弟)が

召された。神殿事務局長は従来通り松下泰洋兄弟。

新たに召された島袋神殿長は、1981年から1984年までの3年間、日本仙台伝道部長を務め、解任後間もなく東京神殿の第一副神殿長に召され、その責任を果たしてこられた。来日以前には、ハワイで監督や高等評議員を歴任し、ハワイ州労働部に勤務していた。

また、妻の島袋道子姉妹は神殿長夫人として介添の職にある。



東京ステークキ部センターで行なわれた「音楽の夕べ」で、美しいハーモニーを披露する東京地区インスティテュート聖歌隊

て、たくさんの祝福をいただいてきました。聖歌隊は、歌うのではなくて賛美をすること、また主に賛美を捧げるために最大限の努力をして備える必要があるのを身をもって学ぶことができました。発表の機会ごとに、たくさんの兄弟姉妹たちが賛美の美しさと力を感じ、その中からイエスがキリストであるという証を得てきました。そのような兄弟姉妹たちの喜ぶ姿を見ると、神様の大きな愛と、共に働いてくださった方々に対する感謝の気持ちが深まり、大きな喜びに包まれるのを感じます。

神様は私たちが心を込めて賛美するとき、多くの祝福を与えて応えてくださり、「すべて心の歌は、われらの喜びなり。然り、義しき者の歌はわれらに対する祈りなり。彼らの頭に祝福を与えてその応えとなさん」(教義と聖約25:12)という約束を果たしてくださることを証いたします。(レポーター：東京渋谷インスティテュート聖歌隊長・武田修)

や、ちょっとした時間を使って覚えるようにしていました。また、多くの兄弟姉妹たちが、練習に来るために大きな犠牲を払っていただきました。

そして、人の知恵や考えでは克服するのがどうしても無理だと思ふような試練に直面した姉妹もいました。私たちは共に話し合い、証を述べ、断食をして、すべてを主にゆだね、天の助けを求めました。

そのほかにも、ここにご紹介できないほど多くの祈りと涙と犠牲とがあつて、ようやく当日を迎えたのです。

リハーサルで歌っているときに、聖歌隊員の一人一人の目がまるで天使のように輝き、文字通りみたまによって賛美しているのを感じたとき、それまでの不安がすべて消え、力に変わるのをよく知ることができました。

また本番直前に、私が心から愛し、尊敬する兄弟と共に時間を取って祈ったときに、人の声ではなく、みたまの声でイエスがキリストであるという証を聞きました。その兄弟の霊性と神権の力に、また多くの兄弟姉妹たちの祈りに支えられ、強められて本番に臨むことができたことに心から感謝しています。

「音楽の夕べ」の中では、クリスマスキャロルを中心とした讃美歌のほかに、歌とスライドによって救い主イエス・キリストの生涯とそのみ業について紹介し、教会員だけでなく、多くの求道者の方々と共に特別な思いを感じることができました。父なる神様は礼拝堂にあふれるほどのみたまを注いでくださり、あたかも天上の聖歌隊を遣わしてくださったかのようでした。最後の曲の「おお聖き夜」の中で、聖歌隊員一人一人が流す涙を見て、そのことをはつき

りと知ることができました。

シェア・ライツ・カンパニー(光を分かち合う仲間たち)という名称で組織されて1年あまりになりますが、その間に多くの発表の機会を得ました。また、渋谷インスティテュートの聖歌隊として位置づけられ



市長と共にオープンカーでパレードに参加するケント・ギルバート兄弟

## 山口県柳井市の市政30周年記念行事にケント・ギルバート兄弟を招請

**昨**年の11月22、23日の両日、山口県柳井市の市政30周年記念、新市庁舎落成、山口県ふるさとまつり、柳井まつりを同時に祝う記念行事が盛大にくり広げられたが、その一環としてケント・ギルバート兄弟にも多忙なスケジュールの中、参加していただき大変好評を博した。それはまた多くの市民の前に末日聖徒イエス・キリスト教会の所在を広めることにもなり、伝道の一役を果たすことができた。

そもそもギルバート兄弟を招請するきつ

かけとなったのは、彼の著書「面白大国ニッポン」の中で、柳井で伝道した当時を振り返り、日本での故郷は柳井だと書いているのを目にしたことからである。

8月のある日、私が私用で東京へ行つての帰りに偶然にも東京ステーク部長の新山靖男兄弟(柳井支部出身)と同席した。ケント・ギルバート兄弟のことを話したら彼を良く知っていると言う。それならばぜひ柳井市政30周年記念行事のために一役買ってほしいとお願いし、約束して帰った。



ちょうど時を同じくして、柳井市でアメリカの高校生との親善レスリング大会が行なわれ、通訳として招かれた当支部の武内隆市兄弟が白地柳井市長と隣席し、ケント・ギルバート兄弟のことを話したところ、ぜひ柳井に招きたいと希望された。私はその意向をくんで何とか実現させたい一心から武内兄弟と共に市の教育委員会の担当者と会って記念行事の詳しい説明を聞いた。新山兄弟を通じてケント・ギルバート兄弟に意向を伝えたと、ぜひ柳井へ行きたいと言われ、計画を具体化することとなった。教会員にもこの計画を説明し、それが実現するように神に対する祈りを要請して、支部が一丸となって協力しようと決めた。

ところがそこにひとつの障害が持ちあがった。市の予算があまりにも少なく、ギルバート兄弟が属しているプロダクションとの間に折り合いがつかないことであった。一度は断念せざるを得ない状況であったが、10月になって急にその話が再熱してきた。ギルバート兄弟の身が一時自由になったからだ。私は東京に直行し、ギルバート兄弟に会ってことの次第を確かめ、了解を得た。ただちに市の企画課に報告、市も急に色めき立ってきた。

当日、ギルバート兄弟が無事に来柳できるよう祈った。準備は万端整っている。あとは彼を迎えるだけだ。ところが、また胆を冷やす事態が発生した。到着予定の松山空港からの第一報があり、ギルバート兄弟が乗っているはずのジェット機から彼が降りてこないと言うのである。さあ大変、この機を逸するとパレードには間に合わない。すぐに市に連絡、市も本当に弱り果てていた。

すると、予定外に広島空港から電話が入った。「林さん、ケント・ギルバートさんがいました。今、広島空港のカウンターの女性が、柳井へ行くのはどうしたらいいのでしょうかと聞かれたそうです。確かにケント・ギルバートさんでした。本当に助かりました。ありがとうございます。」市の企画課主査の喜びは並大抵ではなかった。

22日は柳井まつりオープニングのパレードがあった。下は幼稚園児や小学生の鼓笛隊、上は陸上自衛隊の吹奏楽団に至るまで1,500名以上もの参列者を前にしてギルバート兄弟は堂々と挨拶を述べた。その後、オープンカーに白地市長と同乗して市中行進し、沿道の人々から盛んに歓迎を受けた。また、市長と親しく歓談し、宣教師として

伝道した当時をなつかしんだ。

夜は市の教育委員会主催でケント・ギルバート兄弟を迎えての講演会が催された。700人収容の市労働会館に、開会時間前から倍以上の2,000人が押しかけ、急拠、外にスピーカーが設置された。

入口という入口はもちろんのこと、非常口まで開け放たれ、パニック寸前の状態で講演が始まった。場内には一際目立って「歓迎ケント・ギルバート兄弟 末日聖徒イエス・キリスト教会」という横断幕が光っていた。

これだけの観衆が集まるとは、正直なところ私も思ってもみなかったし、市長はじめ係の人も予想だにできなかったことである。ギルバート兄弟の人気の秘密はどこにあるのだろうか？市役所の人々はこう言った。「人々との対応のときに、彼はいやな顔ひとつしないし、いつも笑顔で快く引き受けてくれる。それに、日本における故郷は柳井ですと言った彼の言葉に、皆が共感を覚えたのではないだろうか」と。

今回の一連の出来事を通じて、少なくとも柳井市民の中に末日聖徒の名を知らしめることができ、宣教師が伝道するうえで大きな助けとなった。また地域社会にささやかながら貢献できたのではないかと思う。(レポーター：広島ステーキ部祝福師・林忠夫)

## 帯広雪まつりに イエス・キリストの雪像

**私**たち帯広支部では、独身成人のメンバーを中心に、宣教師や求道者と共に、1月25日から27日の3日間行なわれた



雪像作りに参加した帯広支部の独身成人

帯広雪まつりにイエス・キリストの雪像を作成し、出品しました。

当初、受付の締切りは終わっていたのですが、新会員の提案で係の方に頼み込んで出品させてもらうことにしました。しかし、実際に作り出すと、今まで経験のないことなので、考えているように上手にいきません。一度外観を作ったあとで全部壊したり、服や手の細かい部分では、何度も失敗しました。ですが、思いも寄らなかった兄弟たちの才能によって、素晴らしい雪像が完成したのです。

4日間にわたり、夕方から作業を行っていたのですが、寒くて体が冷えます。そんなとき姉妹たちが用意してくれた温かい食事は、世の中にこれほどおいしいものはないと思うほどでした。

努力のかいあって、私たちは努力賞をいただくことができました。また、関係者の間では話題になっていたらしく、あとで借りていた道具を返しに行ったときに、こちらが何も言わないうちから、「モルモンの方ですな」と言われ、びっくりしてしまいました。

私たちは、この雪像作りを通して、一致団結するならば素晴らしい力を発揮し得ることと、一人一人に才能が与えられ、無限の可能性を持っていることを、改めて知りました。

今帯広支部では、毎週のようにバプテスマ会があり、新しい力が躍動しています。来年はそれらの人も含めて、さらに素晴らしいものを作りたいとはりきっています。

(レポーター：釧路地方部帯広支部長老定員会第二副会長・西原正行)

# 「クモラの丘霊園」 第2期分譲の お知らせ

クモラの丘霊園は、埼玉県毛呂山町にあり、池袋駅から約1時間、東武越生線の武州長瀬駅下車徒歩5分の所にある「武蔵野霊園」内に位置します。

教会は本来墓地経営はいたしません、当時の大管長であったデビッド・O・マッケイ大管長が日本人の風俗習慣について特別な理解を示してください、教会としては異例でしたが購入が許可されました。

その後、造成工事が行なわれ、1982年9月19日、ブラッドフォード長老の奉獻の祈りの後に第1期分譲が開始され、現在までに95の墓所の永代使用権が教会員の手に移管されました。

さて、このたび4月1日から第2期募集が開始され、一区画3平方メートル26万円ので分譲されることになりました。このたびの募集の特徴は従来の「一括払いおよび大信販ローン」に加えて、新たに無利子の分割払いを採用したことにあります。この方法によると、毎月の支払いの額が4千円台まで下がるため、今までよりも多くの教会員、特に独身の兄弟姉妹たちにも墓地購入が可能となりました。

また、東京近郊だけではなく、日本中の聖徒たちにご利用いただけるように、銀行の自動振替手続きの取引金融機関の枠をできるだけ広げるようにいたしました。このような配慮は、特に東京神殿参入プログラムが活発に行なわれるようになって以来、霊園の購入者の範囲が東京近郊に限らず全国に広まってきたからです。

先日開かれた地域評議会で、ブラッドフォード会長の方針が明確にされ、教会墓地の分譲業務は、別に販売組織や実行委員会を組織することなく、すべて宗務ラインを通して行なうこととなりました。すなわち、地区代表、ステーキ部長/地方部長、監督/支部長のラインで発表から申し込み受付までの便宜を図ることになりました。日本の聖徒たちのために特別に献堂されたこの霊園の祝福が、ひとりでも多くの兄弟姉妹たちに及びますよう心からお祈りいたします。

クモラの丘霊園事務局

## ●「クモラの丘霊園」第2期募集についてのご案内

クモラの丘霊園の第2期募集を以下の要領で行ないます。つきましては、その趣旨をご理解のうえ、ふるってお申し込みくださるようお願い申し上げます。

1. 墓地永代使用料 1 区画260,000円 (昭和62年度以降にお申し込みの方は毎年3,000円ずつ加算されます)
2. 墓地管理料 年間3,000円(初回金とともに一年分を前納し、以降毎年定められた期日までに支払うものとします)
3. 申し込み方法 以下の書類をクモラの丘霊園事務局に提出してください。  
イ. クモラの丘霊園使用申込書  
ロ. 住民票  
ハ. クモラの丘霊園永代使用契約書 2通  
ニ. 銀行自動振替手続き書類
4. 申し込み期間 昭和60年4月1日より昭和61年12月31日まで
5. 墓所の指定 申し込み書類受領確認の後、順番に行ないます。
6. 初回金および管理料の振込先 三和銀行 青山支店 普通口座 219499  
クモラの丘霊園 北村正隆
7. 埋葬費用 埋葬手数料は1体につき8,000円とし、2体目よりは1体につきそれぞれ2,000円増しとなります。
8. 字彫り費用 氏名と死亡年月日 17,500円(書家料 2,500円を含む)  
家紋および〇〇家 17,500円(書家料 2,500円を含む)
9. そのほかの費用 名義変更などで霊園使用承認証の再発行が必要となった場合、1件について5,000円が必要です。

なお、埋葬手数料および字彫り費用は昭和61年3月31日以降、値上げされる予定です。

### 添付書類

- |                   |    |                |    |
|-------------------|----|----------------|----|
| 1. クモラの丘霊園使用申込書   | 1通 | 4. クモラの丘霊園使用規則 | 1通 |
| 2. クモラの丘霊園永代使用契約書 | 2通 | 5. 銀行自動振替手続き書類 | 1通 |
| 3. 墓所地図           | 1通 |                |    |

埼玉県毛呂山町「武蔵野霊園」内にある「クモラの丘霊園」。4月1日から第2期募集が開始された。

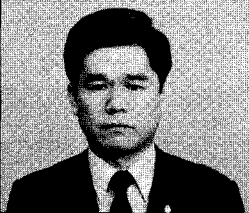
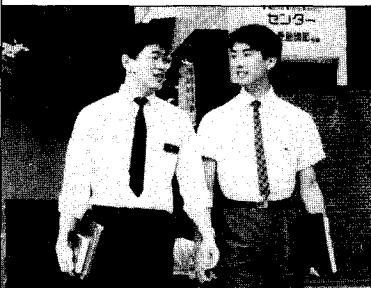
〒106 東京都港区南麻布5-10-30  
末日聖徒イエス・キリスト教会内  
クモラの丘霊園事務局  
電話 03(440)2351(代)



# JMTC設立6周年 1979-1984年 6年間に921名の日本人宣教師

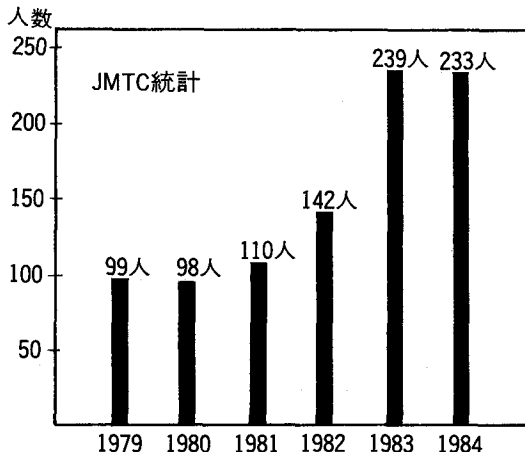
## 6年間に召された 日本人宣教師の数

(国外に召された日本人宣教師  
の数は含まれていない)



「彼らは前世からとおかれた  
すばらしい霊です」

JMTC講師 吉野 和洋



日本人宣教師訓練センター(JMTC)の講師として召されて以来、すでに5年が過ぎ、やがて6年になろうとしています。全国からやって来る宣教師と共にひとときを過ごせるのは、私にとって大いなる祝福であり、また喜びです。希望と期待に胸をふくらませ、信仰と証を持って元気にやって来る宣教師の顔には主から召された僕としての輝きが見られます。予言のみたまと啓示のみたまに満たされた彼らに接するときに、確かに彼らは主の召された僕であることがわかります。

JMTCも時の経過とともに発展してきました。最初は、当時府中にありました東京南伝道本部の一室を使ってトレーニングが行なわれました。期間も3日くらいでした。それから吉祥寺にあります東京ステークスセンターに移りました。この吉祥寺時代に、妻と共に奉仕をする機会がありました。

新しい宣教師のグループが、第1日目の朝7時前にやってきます。そのとき私は、製粉工場から彼らの朝食であるシリアルという小麦(「麦」と宣教師は言っています)を一袋運び、麦の食べ方を説明します。その麦を毎日買いに行くたびに、「一体、にわ

とりを何羽飼っているんですか」と聞かれたものです。最初は麦を食べられない宣教師も、必要に迫られてやがておいしく食べるようになります。

昼食と夕食は、妻と今は仙台に移られた山口節子姉妹が準備しました。彼女らは喜んで料理を作り、毎回奉仕できることを楽しみにしていました。また、後半は吉祥寺の辻本姉妹が、献身的に手伝ってくださいました。

JMTCが現在の教会地域管理本部に移るまで、当時の私は早朝の教義のクラスと夜の教義のクラスを担当していました。テーマは「家族」と「祈り」でした。

あるとき、ユースコンファレンスで秩父の山奥に行ったのですが、その日のうちに帰ることができなくて、朝3時に起き、真っ暗な山道を2時間走って駅へ行き、朝一番の電車で、吉祥寺へ行ったことがありました。熱心に学び、訓練を受けている宣教師の姿を思い浮かべると、私にとってそのことはそんなに大変ではありませんでした。それよりも、時間に遅れて大切な時間をむだにすることの方が気がかりだったのです。

教義のレッスンのほかに、月曜日の夕べは、宣教師と共に家庭の夕べで楽しく過ご

すことができました。レッスンプランの暗記とトレーニングで疲れている彼らにとって、月曜日の夕べはお互いの親睦を深める機会であり、経験を語り合うときです。みんなで歌をうたい、ゲームをしたり、タレントを発表したり、聖句探しをしたり、霊的なスライドやフィルムを見て、心温まるひとときを過ごしました。また、自分たちを伝道に送ってくれた両親への感謝の言葉を聞けるのもこのときでした。私たち夫婦にとりまして、本当に貴重なすばらしい時間でした。

JMTCが広尾の教会地域管理本部に移って、私の家からはずいぶん遠くなりましたが、月に一度の奉仕の日を心から感謝しています。教会管理本部の二階の部屋に入ると、そこには特別な雰囲気があります。とても神聖な雰囲気です。そこには主のためにみずから捧げている宣教師がいるからです。彼らは前世からとおかれたすばらしい霊です。レッスンをしているときにいつも強いみたまを感じます。そして、彼らの愛と犠牲、強い証に霊的感動を覚えます。人々の救いのために、すべてを主に捧げる決心をしてJMTCにやって来る彼らは、いつも主に守られ、導きと励ましを受けています。第1期生から第68期生までの宣教師と触れ合ったわけですが、本当に彼らは謙遜で、従順な聖徒たちでした。

主は教義と聖約の中で「完全なるわが福音、弱き者たち単純なる者たちによりて世界のいやはてまでも宣べられ(ん)」(教義と聖約1:23)と言っておられます。

伝道地で熱心に働いている宣教師から伝道の喜びの手紙を受け取るときに、また、無事に伝道を終えて、みたまで輝いている帰還宣教師に会うときに、そして神殿の中で「覚えていらっしゃいますか。第何期生の何々長老(姉妹)です。一生懸命伝道してきました」という言葉を聞くときに、まるで自分のことのようにうれしくなります。

また、鈴木正三長老、井上龍一長老の2代にわたる卓越したJMTC伝道部長のもとで働けましたことを心から感謝しています。JMTCがさらに発展して多くの若人がフルタイムの宣教師として召されまよう心からお祈りします。確かにこの教会はイエス・キリストの真実な教会であります。そして伝道活動がこの教会の最も大切な業であることを証します。(よしのかずひろ 1948年生まれ、東京西ステークス部 国立ワード部)



## 「次はあなたの番です」

JMTC講師 池内 英二

「同僚」とは、宣教師にとってその言葉以上に大切な意味を持つ存在です。

JMTC（日本人宣教師訓練センター）で、「愛」についてのレッスンをしているときのことでした。

「あなたの同僚に愛を伝えてください。ただし、何も話さないで目を見るだけで……」と言ったときです。同僚と向かいあっていたひとりの宣教師が、目に涙を一杯浮かべて泣き始めたのです。その宣教師は、「私は今とても同僚に感謝しています。それを言葉で言い表わすことはできません。いつも私を助けてくれました。そんな同僚にどのように私の愛を伝えたらいいのか、ずっと考えていました。今朝もそのことについて祈っていました。だから同僚の目を見て心の中で『愛しています!』と言ったとたん、涙がせきを切ったようにとどどなく流れてきたのです」と話してくれました。

これはJMTCで教えていたときに経験した数ある霊的な経験のうちのひとつです。そのすばらしい証にそれ以上の言葉はいりませんでした。

モルモン経の中の偉大な宣教師アンモンとその一行は、レーマン人の中に伝道に行くに先立って、「互いに別れる前それぞれの職に応じてこれを皆祝福し、その上神の御言葉を教えてかれらを勇気づけはげまし、ついにかれらと別れを告げ」て各々が伝道地へ行ったと記してあります。(アルマ17:18) 現在もJMTCで同じことが行なわれています。み言葉を教え、勇気づけ合い、そして励まし合うのです。そこには宣教師の信仰や犠牲を通してもたらされるみたまの強い力があり、ひとつでも多く伝道に役立つことを吸収しようとする気持ちがひしひしと伝わってきます。まさに彼らの熱意に

支えられて教える者の舌も緩まり、「教ゆる者も受くる者も互いに相悟り、両者共に徳に導かれて共に悦ぶなり」(教義と聖約50:22)と言われる通りのことが起こるのです。

1981年5月にこの仕事に召されてもうすぐ4年になります。専任宣教師の任を解かれて3カ月後のことでした。

この間、多くの日本人宣教師がJMTCから旅立っていきました。私自身もJMTCの初期の卒業生なのです。当時はまだJMTCの組織はありませんでしたが、1978年12月に3名の宣教師が訓練を受けたのを先駆けとして翌年1月に13名の新しい宣教師が菊地長老をはじめ指導者の方々から3日間で6つのセミナーを受けました。今でも目を真っ赤にして証したあの経験は忘れられません。

伝道中も壁にぶつかるたびに、JMTCで学んだノートを、いく度となく読み返しては問題解決の糸口としてきました。

たとえば、あるときには「涙を流して教えてくれる人を見て、何も感じない人がい

るだろうか。それは同情ではなく教える人から放たれる何かが伝わってくるのである」という話から、みたまによって教えることの大切さに気づいたこともあります。

また「どんなに落胆していても『もう1軒だけ行きましょう』と言いなさい。その信仰によって祝福を受けるでしょう」という言葉から、最後まであきらめずに行なう大切さを学びました。

このように、今も多くの宣教師たちがJMTCで学んだことを日々の生活の中に生かしているのです。

この6年間で約950名の日本人宣教師が日本の各地に巣立っていきました。そして今年の夏には1,000名を越えます。

主はこうおっしゃっています。「汝の心を励まして喜べ、そは汝が伝道する時来りたればなり」と。(教義と聖約31:3)

そう、次はあなたの番です。JMTCで近いうちにお会いしましょう。(いけうち・えいじ 1954年生まれ、東京東ステークス部七十人定員会会長)



一月に召されたJMTC第六十八期生十四名



二月に召されたJMTC第六十九期生十六名

# 「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」

— 母校の創立50周年記念講演会に  
講師として招かれて —



横浜ステーキ部川崎ワード部 近野 恵子  
(旧姓・正木)

「多くの人々に、より奉仕したい」という決意のもとに日々を過ごしていると、思わぬときに奉仕の機会がめぐってくるものです。

2年前の9月、浅間ステーキ部長を通して主から若い女性の会長の責任をいただいたとき、ステーキ部長の言われた「今の若い人たちは、世の中の悪い風潮に押し流され、大きな試練の中にいます」という言葉に、その責任の重さをずっと感じました。と同時に、「末日に生きている若人はサタンの力に屈しない高い霊性を持たなければ」と、身の引き締まる思いがしました。

その月の末に、私の卒業した高校の教頭先生から電話があり、創立記念日に講師として講演会でお話をお願いしたいとのことでした。私は、「ちょっと、それは……」と臆してしまいましたが、「若い女性の召しは、何も教会の中に限ったものではない」という思いが脳裏を横切りました。多くの生徒や先生方、PTAの方たちに、福音や人生の目的、神様のことが証できたら素晴らしいに違いないと思い、神様の与えてくださった機会に承諾の返事をしました。

しかし数日後、私は突然尿道結石という病に倒れてしまいました。1センチぐらいの石をレントゲンで見るときは、目の前が真っ暗になりました。10月15日の講演会はできそうにありません。しかし主人が「神様のみこころなら必ず治る」と励ましてくれ、聖なる神権の祝福も施してくれました。高熱が3日間も続いた風邪が治りかけたところでこの病気になり、すっかり体力がなくなっていました。

ところが再度レントゲンを撮った結果、結石がなくなっていたのです。主人も私も神権の祝福に心から感謝しました。

風邪と結石の重なった病が完治したのは、講演会の2日前でした。激しい痛みと戦いながら、2時間分の講演内容が神様のみこ

ころに添うように必死に祈り求めながら準備をしていると、「『聖徒の道』の大会特集号を読みなさい」という導きを受けました。すぐに立ちあがり、本棚に向かうと、1冊の『聖徒の道』に目が留まりました。パラパラと開くと、「これだ」と確信の得られる記事を見つけることができました。その内容を簡条書きにし、これまでの自分の信仰生活に重大な影響をもたらした聖句や予言者の言葉、さらに若い女性の「アドバイザー」というテープからの引用を書き加え、あつという間に骨組みを決めることができました。

私の母校は生徒の95パーセントが大学に進学する学校で、先生方も生徒も受験という試練と戦っています。今さら日本の教育制度がどうのこうのと言うより、思春期に受験、友人、家族、人生、世の中のことなど鋭い感覚で物を見つめる彼らに、少しでも福音を紹介できるなら群馬まで出かける価値があると思い、病みあがり足元が心もとない自分にそ言い聞かせるようにして出向いて行きました。

なつかしい母校の門をくぐり、体育館に入ると、大きな拍手で迎えられました。生徒、教師陣、PTAの方たち、同窓会の方々を合わせると約1,200名の人々がそこにいらっやいました。要点を簡条書きに軽く書き連ねただけの資料で2時間も大丈夫かしらと思いましたが、私は神様の力を得てまったく冷静そのものでした。

みたまは終始、私に言うべき言葉を授けてくださいました。話しているときは楽しくて仕方ありませんでした。私は神様に栄光あれと、心の中でそればかりを繰り返し、頭からは言葉が次々とわいてくるので、精一杯頑張って話しました。

宣教師のときの、求道者にレッスンをしている自分の姿が時々頭に浮かび、「ここで天のお父様のことを証しよう」という余裕

まで、主は与えてくださいました。私はこれまで自分が従ってきた福音は本当に真実だと強く強く感じました。なぜなら、聞いている人々の目から、涙がこぼれていたのです。(これまでの失敗談などの楽しいエピソードも交えて話しました。そのたびに大きな声で何度も笑われましたが……)

「人は外の顔かたちを見、主は心を見る」という聖句をはじめ、たくさんの聖句を彼らにプレゼントし、「偏差値や周囲の人々の豊かな才能と自分を比べて落胆するより、自分に与えられた環境を逆に利用して、自分の力を知り、経験によって成長することが最も重要です」と話したとき、会場にいる人々の目が変わりました。そして、イエス・キリスト様のような最高の人格を築くことが人生の目的であり、それには神を知ることですと証したとき、人々の目から涙が、そして輝きがあふれました。

講演後、校長先生は次のようにおっしゃいました。

「人間の存在価値そのものを根本から考え直さなければなりません。人間は本当に神の被造物なのですね。これまで我が校は、著名な教育界、文学界の重鎮や知識人、名僧を招いた講演会は何度も開きましたが、いまだかつて生徒は20分ももったことがないんです。話に飽きてしまって、むだ話のみならずマンガ本まで持ち込むといった状態で、頭を悩ましていました。しかし今回、こんな若い人を呼んでしまってまた失敗したらとはっきり言って最初は心配でしたが、2時間、私も生徒諸君も釘づけでした。こんなにも霊を洗われ、活気づいた講演会は初めてです。」

群馬の姉の家には、PTAの方たちから「子供が変わり始めた」「もっと早くうちの子に聞かせたかった」「受験勉強が楽になった」などの電話がきたそうです。また生徒の皆さんが書かれたたくさんの感想文を

読ませていただき、少しは人の役に立てたことを知ってうれしく思いました。それについて天のお父様に報告したときは、本当に平安な気持ちで、また喜びで胸一杯になりました。

福音は真実です。人の霊を清め、真理に

目覚めさせるのは天のお父様の力と愛です。「わたしたちの信仰こそ、世に勝たしめた勝利の力である。世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか。」(Iヨハネ5:4, 5) (ちかの・けいこ 横浜ステークス部若い女性会長)

加する兄弟姉妹の成長のため、第2に一致です。伝道のためとかいう大それた思いはひとかけらもなく、自分の弱点について悩み、苦しみ、少しでも自分を主に近づける努力、そして何よりも兄弟愛を実践することが目的ですから、それ以前に社会人としての常識がしっかりとできていなければなりません。私はそのことを何度もキャストに申しあげました。ミュージカルに携わる人々が少しでも成長できたら、私にとってミュージカルは成功です。たとえ観客がたったひとりだったとしても兄弟姉妹の成長の喜びに比べたら観客の人数などまったく問題ではないという点で私も監督会も思いは同じであり、あとは突き進むだけでした。みんなもこのことに気づき始め、精神的に独立し、霊的にも人格的にもその成長は目を見はるものがありました。

衣装は洗練されたもの、最高のものをと、2カ月をかけて扶助協会の姉妹たちの全面的協力を得て、製作に取り組みました。製作のために子供たちの寝たあと夜なべをした日も少なくありませんでした。

音楽もすべてオリジナル。5人の兄弟姉妹がすばらしい曲を用意してくださいました。録音も、著名な音楽家のミュージックルームをお借りして、彼らの友人のミキサー牛山さん、古賀兄弟(元キングレコードのミキサー担当)、さらに会員の中からドラム、ベース、バイオリンの演奏者も見つかり、シンセサイザー、ピアノも加えて、録音には丸1日かけました。

末日聖徒にだって、否、末日聖徒だからこそ本物ができると、私は自分に言い聞かせて脚本にも手を加え、音響、衣装、もちろんせりふにも、少しも妥協のない努力をするように、兄弟姉妹を励ました。スタッフも勉強に勉強を重ね、プロの演劇を見に何度も何度も足を運び、技術を習得していきました。大道具製作にはワード部の大半の兄弟が携わってくださり、練習のじやまにならないように教会の屋上で冷たい風に耐えて作ってくださった、あのときの兄弟たちの働きに、だれも頭が上がりませんでした。また、夜遅くまで照明、舞台装置の打ち合わせ、渉外の連絡に一生懸命働いてくださいました。

汗と涙、疲労、病気に明け暮れた毎日、祈りと愛の実践、本当に信仰の試されることばかりでした。また、キャストやスタッフとしてこの劇に参加して下さった3人の求道者の方々も、懸命に協力してくださ

## ハンドルのついた高級車は今

—ミュージカル「白い家」の軌跡—



横浜ステークス部川崎ワード部

**昭**和59年3月の川崎ワード部は、これまでで最も転出、転入する兄弟姉妹が多く、雰囲気が一変したかのようでした。そのうちに若い兄弟姉妹から「何かやりたい」という言葉がよく出るようになりました。その状態は、私の目にはまるでキラキラと輝く高級スポーツカーのようでしたが、よく見るとハンドルがついていません。一体何に、どのようにその持て余した力を発揮すればよいのか、と私ものめり込むように考え始めていました。

そしてミュージカルをやりたいという意見が出てくるや否や、次々と話が進んでいきました。幸運にも、青山のジャズダンス教室の先生の指導が無料で得られることになり、音楽はピアノの先生をしている菅姉妹が担当し、脚本は私が書くことになりました。

私は日本の家庭問題を福音的立場から解決していくことを題材にしようと決心しました。しかしこの種の題材は必ずわずかしい見方をされると思いましたので、私は主のみこころを脚本にすることができるよう、その晩、真剣に祈りました。朝4時頃目覚めると、主は頭の中に脚本の流れをはっきりと手にとるように教えてくださいました。私は、「必ずできる」という確信を得て、一気に4幕までの脚本を書きあげました。

日曜日に教会に持っていき、皆に読んでもらいますと、参加者がすぐに20名ほど集

まりました。練習が開始され、演出は上智大学演劇部の西巻さんが援助して下さることになり、発声からすべて、細かい指導をしてくださいました。スタートが遅かったので会場も容易には見つかりませんでした。12月25日のクリスマスの日に川崎市立労働会館というすばらしい施設を使えることになりました。しかしこの舞台では、今のままではとても声の届かないことがわかり、キャストは懸命に発声の練習を重ねました。スタッフも動き始めました。演劇経験者ゼロの、ミュージカルという名の高級車はこうしてスタートしたのでした。

苦勞に苦勞を重ねたうえでの1回目のランスルー(通しげいこ)のできばえは、ひどいものでした。とても人様に見せられる状態ではありません。練習時間がまともに取れないうえにまったくの素人がやっているのでは無理ありませんが、小学校の学芸会の劇の方がましと思えるくらい下手でした。「そんなものやめろ！」というサタンの声が聞こえそうな中で、キャストにやる気があるかどうか尋ねると、次々に「クリスマスにはどうしても私たちのミュージカルを見ていただきたいんです。頑張りますから、どうぞやらせてください」と、目に涙を浮かべて頭をたれたのです。最悪の状態の中で最善の努力をすることを兄弟姉妹は身をもって学びました。

ミュージカルの目的は、第1にそれに参

いました。その中の小高さんは、本番直前の12月23日、バプテスマを受けました。

いよいよ本番、主の導きで、高級車にハンドルがつき、私たちが夢見たミュージカルの上演日に、すてきな車はついに動き出したのです。全員の顔が輝き出しました。ファイトがみなぎって、最高の状態の中で、スタッフの号令に幕が上がりました。キャストは精一杯演じ、歌い、踊りました。熱を押し出演した姉妹も、病みあがりの姉妹も今までの最高の出来で舞台裏との呼吸もピッタリです。私は最後の第4幕だけ客席で見ることができましたが、あたかも主ご自身が舞台にいらっしやるかのように、会場全体がみたまに満たされていました。「やればできる。」兄弟姉妹にはわかりました。いつまでも尽きない拍手の中、幕は下りました。キャストは今、幕の後ろで泣いているだろうと思いつつ、私は腰から力が抜け、しばらく立ちあがれずに震えていました。

「本物のミュージカルにしたい。」演技は下手でも、心意気だけはそうしたい。私たちは、末日聖徒だからこそできる最高のものを求めて、全力を尽くすことができました。そして主は静かに見守ってくださったと確信しています。ワード部あげての一大作、ミュージカル「白い家」は、こうしてクリスマスの日に幕を閉じました。

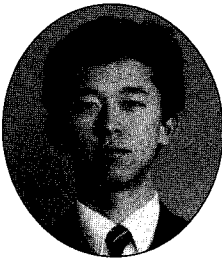
ワード部の宝、一致という名の高級車は、様々な可能性を秘めて走り出しました。どこへ行くかは、主がすべて教えてくださいます。「すべて『みたま』によりて願う者は『みたま』により与えられるべし。」(教義と聖約46:28)神様の深い愛と恵みに、心から感謝いたします。(レポーター：近野恵子)



ミュージカル「白い家」の一場面から

## 神様に栄光を帰すため

— 東京都中野区成人式実行委員長になって —



東京北ステーク部  
中野ワード部

徳沢 清児

**高**校生になった頃から、目立ちたがりの性格を神様に栄光を帰すため、また一般の人々のクリスチャンに対する否定的イメージを変えるために役立ちたいと思うようになり、いろいろな活動をしました。大きなステージでコンサートを行ったり、生徒会の仕事をしてみたり、映画を作ったり、また大学に入ってから自分でバスケットボールのチームを作ったり、とにかく目立つと思ったなら何でもやりました。

昨年9月に、1通の手紙が届きました。「あなたの手で成人式の企画をしてみませんか」というものです。私は、区政など政治面に少し興味があったこともあって、思いきって申し込んでみることにしました。無事採用され、会を重ねるうちに、実行委員長に推されて上の立場に立ったとき、教会で与えられている多くの責任を果たすのがむずかしくなってきました。

実行委員会の集会は、週2回火曜日と木曜日にありましたが、火曜日は教会のダンス・サークルのリーダーをしていたので、木曜日のみ出席していました。やがて週1回の出席をするうち、ほかの実行委員の心がしだいにばらばらになってきたことに気づきました。そんなとき、インスティテュートで池内兄弟は、優先順位を考えて行動しなさいと教えてくださいました。それで計画表を作り、よく祈りながら自分の考えをまとめ、結局ミーティングに週2回とも出ることにしました。実行委員一人一人について祈り、よく準備することによって、いつも笑い声のある、とても良い雰囲気の中で委員会を進めることができました。

委員長ということで、また今年は国際青年年ということで、中野区をはじめ様々な会合に出席したり、都庁の幹部の方とお話しする機会がありました。いろいろ見聞きするうちに、区や民間レベルで福祉活動が活発に行なわれているのを知り、興味深く思いました。私は末日聖徒として、人のため

に尽くすことにもっと努力しなくてはいけないと思いを新たにさせられました。

成人式の2日前に、伝道に出るためのステーク部長の面接がありました。そのときのステーク部長の厳しい言葉は私にとって寝耳に水をかけられたようなインパクトがありました。というのは、幼い頃から伝道の準備をするように言われ、自分なりに準備してきたつもりでしたが、自分の伝道に対する認識の甘さと真の伝道スピリットに欠けていたことに気づかされたからです。すべての人を愛すること、人のために自分が身を粉にして奉仕することは神様への恩返しでもあるのです。面接を終え、ドアを閉じて外へ出ると、「よしやろう、神様のために燃えて頑張ろう」という気持ちになり、体が震えてきました。

成人式の前日、最後のミーティングで、前々から決めていたことを実行することにしました。それは、実行委員全員に共に祈ってもらおうというものです。話し合いも終わりに近づいた頃、区役所の方々もおられました。勇気を出して言いました。「皆さん、30秒だけ私に時間をください。黙って目を閉じていただけませんか。」皆は、私が教会員であることを知っていたはずですが、そうして全員が静かに目を閉じてくれました。奇跡の中、私は主に感謝し、今まで各自一生懸命準備してきたことが、当日よく果たせるように祈りました。祈り終え、アーメンと言ったとき、ひとりのアーメンという声が聞こえました。彼女もクリスチャンでした。皆も何かを感じてくれていたようです。これで明日の成人式は大丈夫だという確信を得ることができました。

成人式当日は、予想をはるかに上回る出席で、あの中野サンプラザに大勢の立ち見の人が出るほどでした。一番懸念していた時間の問題も信じられないくらいに順調に進み、成功のうちに幕を下ろすことができました。

私は中野区の成人式実行委員長の責任を通して、教会員として教会外においても積極的な態度をとることが大切であり、ときには私はモルモンであることを自覚と誇りを持って宣言すること、また勇気を持って真理を伝えることが必要だと強く感じました。指導者の言われる「その人を改宗に導くことはできなくても、その人に対して永遠にまで影響を及ぼす何かを行なう機会」はたくさんあるはずですが、その機会を見つけたときに、自分の持つ目立ちたがりの性格

を神様のしもべとしての力にしていきたい  
と思います。

この責任を通して、また指導者の言葉  
を通してすばらしい経験と証をくださった神  
様に感謝しています。またケント・ギルバ  
ート兄弟から成人式を迎えた若人に、はな

むけの言葉をいただき、その録音を当日の  
成人式で流しました。今回の成人式に臨  
み、いろいろと助けてくださったギルバ  
ート兄弟に感謝しています。(とくざわ・せい  
じ 1964年生まれ、3月に名古屋伝道部専  
任宣教師に召された)

## ●職業と信仰シリーズ②⑤



# 貧しき国で見た精神的 豊かさ —福音がすべての 問題解決の鍵—

新潟地方部新潟支部  
大矢 重幸

**19**73年、米国派遣農業実習生として  
私はカリフォルニアで約1年間生  
活しました。私がお世話になったのは、2,800  
ヘクタールの水田を所有し、飛行機などを  
駆使する日系米作農家でした。

その年のクリスマス休暇にユタ州オグデ  
ンの末日聖徒の家に遊びに行きました。渡  
米する1カ月ほど前に新潟で知り合った宣  
教師が帰国して、招待してくれたのでした。

当時、私は19歳。人生に悩み、どのよう  
に生きたらよいのか模索している人間嫌いの  
ときでした。招いてくれたフラム長老と  
共にクリスマスにいろいろな教会員の家を  
訪問し、教会の行事にも何回か出席しまし  
た。そこで理想的社会、理想的人間性豊か  
な生き方を見ました。そのころの私は宗教  
に対して一種の偏見を持っていて、自分に  
頼れない人間が勝手に何か強い存在を作り  
あげてすがりついていると思っていました。  
しかし、この経験から何か大きな力が働い  
ていると感じ、宗教に強い関心を持ち始め  
ました。オグデンの教会員の模範が常に心  
の中にあり、またクリスマスプレゼントに  
いただいた日本語のモルモン経をもとに、  
ようやく2年後、神様の実在と教会の真実  
さを感じ、バプテスマを受けました。

その後、青年海外協力隊の稲作隊員とし  
て発展途上国で働く機会に恵まれ、アフリ  
カのガーナに行くことになりました。当時  
はまだ信仰も強くなく、身近に教会のない  
国へ行くのは不安でした。出発の少し前、  
ガーナ政府の都合で、フィリピンのルソン

島北部に変更になりました。調べたところ、  
教会まで5時間バスに乗らなければ行けな  
い所でした。

ところが出国直前、ルソン島南部に変更  
になり、幸いにも教会まで7キロと近くな  
りました。農業隊員として教会の近くで働  
けることは、まさに奇跡でした。

地平線のかなたまで自分の土地という雄  
大で企業的なアメリカ農業と逆に、今度は  
自然にすべてを託す、まさに百姓そのもの  
でした。水牛と人が大自然相手に働いて  
いました。ガス、水道、電気はなく、竹やヤ  
シの木などの葉でできた家で生活していま  
した。年中暑く、とてもどこな所でした。  
日の出とともに起き、日の入りとともに寝  
る生活でした。田植えのときなどは10歳以  
下の幼い子供からおばあさんまで大勢で泥  
にまみれて働きます。ごはんは塩をかけた  
り、干し魚1ぴきを手で食べるといような  
とても貧しい生活でしたが、歌やダンス、  
祭りを愛し、とても明るく、精神的な豊か  
さのすばらしさを学びました。物や金にこ  
だわり過ぎる日本などの物質優先の先進国  
は、精神的な面では後進国と言ってもよい  
のではないかと思います。

フィリピンの教会員の信仰の強さも、す  
ばらしい模範でした。ガメル兄弟は50歳く  
らいで7人の子供があり、魚の行商の売り  
あげでその日の食物などをかう、その日暮  
らしの生活でした。教会に入れば、日曜日  
は働きません。それでも彼は教会に入り、  
安息日の子供たちの食物を確保するために、

土、日は水牛のえさになる木の葉などを食  
べてまで、教会で長老定員会の会長などの  
責任を果たして、活発に働きました。教会  
までの交通費がないために幼い子供をたく  
さんかかえて、数キロも歩く人もいます。  
彼の3人の息子はすでに伝道を終えました。  
伝道に出た方が生活レベルが高くなる場合  
もありますが、若い兄弟姉妹は競って伝道  
に出ています。

毎週60名くらいが集うこのナガ支部で、  
副支部長や教師などの責任をいただき、と  
ても良い経験になりました。今ではふたつ  
の支部に分かれ、100名以上の会員が集っ  
ています。

フィリピンやインドなどで自立できない  
人々を大勢目にしてきました。田植えなど  
の日雇い農業労働者、孤児、スラム街の人  
人、病気やけがをしても手当てのしようがな  
い人、飢えや栄養失調で髪が赤茶色にちぢ  
れ、腹だけ大きい、やせた子供たち……。

日本で農業をしても、いつも私の心か  
らは彼らの姿が離れません。飽食の時代と  
言われる日本の責任も大きいと思います。  
私にできることを何かしなければと思いま  
す。ヤコブの手紙4章17節に「人が、なす  
べき善を知りながら行わなければ、それは  
彼にとって罪である」と書いてあります。

5年程前、インドシナ難民援助のボラン  
ティアとして働く機会に恵まれましたが、  
出発前、妻がお産が原因で入院したので

今年は「国際青年年」にも当たってい  
るため大矢兄弟の活躍が大きく報じられ  
た。「読売新聞」'85.1.1付

読売新聞 昭和60年(1985年)1月1日(水曜日) 第1版

### 友情耕して世界を走る

困った人、ほっとけぬ  
稲作の指導で エチオピアへ  
フィリピンへ は難民救済に

「友誼を築き、世界を走る」というのが、大矢重幸(とくざわ)の活動のキーワードだ。彼は、フィリピンで伝道した経験から、貧しい国々で働く機会を得た。その中で、人々の生活を支えるために、稲作の指導や、難民救済に力を注いでいる。

大矢重幸(とくざわ)は、1964年生まれ、3月に名古屋伝道部専任宣教師に召された。彼は、フィリピンで伝道した経験から、貧しい国々で働く機会を得た。その中で、人々の生活を支えるために、稲作の指導や、難民救済に力を注いでいる。



りやめたこともありました。しかし今回は家族の犠牲と助けもあり、アフリカに行くので、ありがたいと思っています。アフリカへは多くの国々から援助物資が届けられています。キリスト教関係のボランティアも派遣されているようです。末日聖徒も国際機関を通じて援助していると聞き、喜んでます。

マタイによる福音書の25章で「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」とイエス様は言われました。貧しい人々の中には謙遜で素直で純粋な心を持っている人が多いように思います。

青空の下、新鮮な空気を一杯浴びて、大地の上で天の恵みを肌でじかに感じながら働ける農業という仕事は、とても素晴らしいです。この仕事を通じて教会に入り、経験を増し、信仰を強めることができました。また、フィリピンにいる間、名古屋で伝道していた妻と共にオグデンやソルトレークの神殿に行き、佐藤龍猪兄弟から結び固めを受けました。

農家の暮らしはとても素晴らしいですが、多くの問題もあります。仕事も大変ですし、教会員ではない両親や祖母との生活は妻にとってとても大変です。子供のことやいろいろな面でこの世の教えと神様の教えの違

いを常に感じます。神権者として、もっと福音を家庭に生かし、少しでもオグデンやフィリピンで見た末日聖徒の模範に近づきたいと思います。そのため、もっともっと妻や家族への愛を深め、行ないを重ねることにより、貧しい人々への愛も深めたいと思います。

飢えの問題は非常に複雑です。簡単には解決しない大変な問題です。世の中にはむずかしい問題が多くありますが、福音がすべての解決の鍵であると証します。「讃美歌」99番『悲しみありさびしき世』の歌詞にあるように……。 (おおや・しげゆき 1953年生まれ、新潟支部第一副支部長)

## 325名の大コーラス タバナクル合唱団再来日決まる

**末**日聖徒イエス・キリスト教会の花とも言うべき「モルモン・タバナクル合唱団」の来日が、大管長会から発表された。8月に10回のコンサートが予定されており、合唱団メンバーも2度目の来日を心待ちにしている。今回の来日は名古屋の中京テレビの招待によるもので、コンサートの企画や運営、合唱団の旅行など、すべて中京テレビが主催して行なうことになっている。

合唱団の日程は以下の通りである。

- 8月17日(土) 大阪シンフォニーホール
- 8月19日(月) 大阪フェスティバルホール
- 8月20日(火) 名古屋(会場未定)
- 8月21-23日(水-金) 東京NHKホール

8月24日(土) 筑波科学万博会場(2回)

8月26, 27日(月, 火) 東京(会場未定)

このコンサートツアーの指揮にはジェロルド・オタリーとロナルド・リプリンガー、ピアノならびにオルガンの伴奏は、タバナクルのオルガニストでもあるロバート・カンディックとジョン・ロングハーストが務める。

日本の教会側でも歓迎のための委員会が地域会長会により指名され、地域管理本部総務部長の今井一男兄弟を委員長、地区代表の岡本亮長老ならびに地域幹部書記のロナルド・B・タルメージ兄弟を委員とする組織で側面的な援助をすることになる。

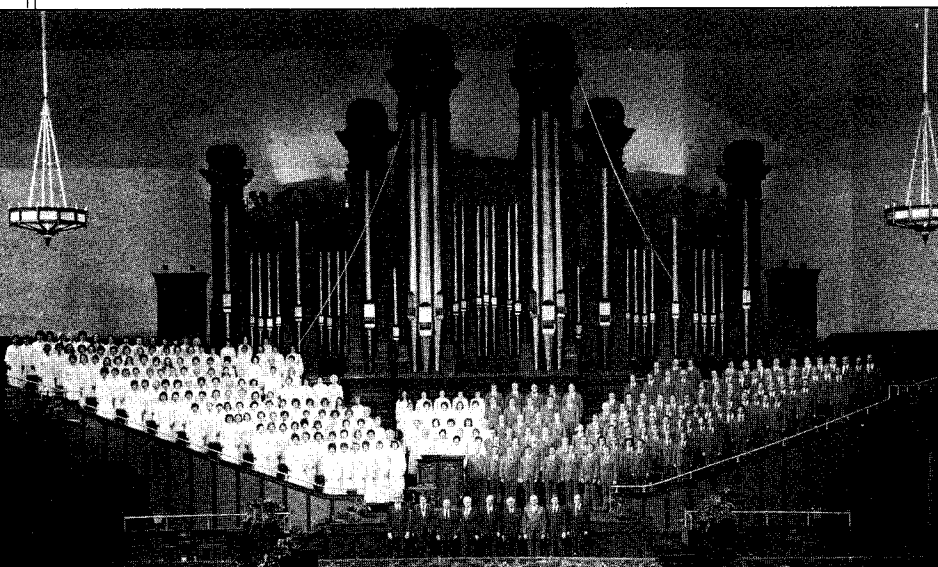
「あの心の込もった歓迎は、  
今でもまぶたに焼きついています」

合唱団のメンバーに日本でのコンサートが発表されたのは去る2月17日、日曜日の早朝、合唱団が日曜日の朝の生放送に向けて準備をしていたときだった。団長のウェンデル・M・スムート兄弟がメンバーに指示を与えていたとき、突然休暇中の日本人合唱団メンバー、ヨシエ・ウォルベック姉妹が和服姿で現われ、壇上で1通の手紙を読みあげた。中京テレビからの招待状だった。期せずしてあちこちから歓声が上がったことは言うまでもない。

ひとつ問題があった。日程である。招待された8月はもうスケジュールが一杯で、招待を受けたからと言って8月にすぐ日本に飛べるわけではない。ところが、その手紙が読みあげられた朝、たまたまヒンクレイ副管長が神殿での集会に行く途中、合唱団のそばを通った。そして壇上に立ち、こう宣言したのである。「私は大管長会を代表して、タバナクル合唱団が日本を訪問することを喜んで許可いたします。」

団長のスムート兄弟はこう語った。「1979年のあの心の込もった歓迎が、今でもメンバーのまぶたに焼きついているんです。日本の聖徒の皆さんと友情を新たにできる機会がまた訪れることを考えると、本当に胸が高鳴ります。」

中京テレビではコンサートのテレビ放映も計画している。同テレビ局はソルトレーク・シティーにあるボネビル・コーポレーションならびにKSLテレビ局と姉妹局の関係にある。





## シリーズ わがステーキ部長 その①

### 〈インタビュー：名古屋ステーキ部〉

聞き手：石川賢一(名古屋ステーキ部第二副ステーキ部長)

# 土田 勝ステーキ部長(47歳)に聞く 意志と努力によって人格形成

## ●木曾川でバプテスマ

——土田ステーキ部長は幼くしてお父さんを亡くされたそうですが、つらい思いをされたことはありませんでしたか？

「今から思えば懐かしい思い出で、自分の訓練になったかと思いますが、中学、高校と、ずっとアルバイトの連続でした。人並みにお菓子が買えなかったのも、私にはつらいことでしたね。しかしそれよりも、もっとつらかったのは、クラブ活動がまったくできなかったことです。その頃から身長も高かったのに、先生や友達からバスケット部への誘いがありました。しかし夕方の新聞配達、区役所のチラシ配り、そのあとは母の内職の手伝いなど、夜の10時くらいまで毎日働いていました。それから学校の勉強をして、床に就くのは每晚12時でした。」

——改宗されたのは何年前ですか？

「25年前の1960年3月13日です。当時すでに教会員だった今の妻が同じ職場に入ってきましたね。ほかの女性とは少し違う雰囲気を持っていて、大変関心を持ったわけです。一緒に食事をしたときに彼女にお茶を飲まないのはどうしてかと聞いたのが、この教会のことを知ったきっかけでした。人生の目的について、それまでも考えておりましたので、宣教師のレッスンは素直に聞けましたね。約2カ月後にバプテスマを受けました。当時はバプテスマフォントがありませんでしたので、当時の名古屋支部から30キロ離れた木曾川で受けました。それから1年後の1961年10月、長老職に召されるのを待って結婚しました。」

——現在お仕事は何をされていますか？

「教会教育部のコーディネーターで、セミナー、インスティテュートを担当しています。北陸、三重、名古屋地区の範囲で活動しています。」

——教会の職員ですと、教会の責任と仕事との兼ね合いで悩むことはないんじゃないかな

いかと考えられる方が多いと思いますが、実際はどうでしょうか。

「そうですね、確かに知恵の言葉や安息日の問題はないと思います。しかし以前の仕事ですと、会社から帰ったあとの自分の時間に、家族との交流、ステーキ部長の責任についてよく考えることができましたので、時間的にはとても余裕がありました。ところが今はステーキ部長の責任と教会の教育部の責任とで、年中、いつでも働いているような状態です。しかしセミナー、インスティテュートを通して、教会の将来を担う純粋な若人たちと接するとき、また彼らの成長を見るにつけ、忙しさも大きな喜びに変わっています。」

——教会教育部に勤める前はどちらにお勤めでしたか？

「三菱重工業の小牧工場です。そこでヘリコプター、ジェット戦闘機の製作と修理状況の記録分析の仕事をしていました。」

——その頃は、いろいろな問題があったと思いますが？

「そうですね。やはり、宴会の席なんかではお酒の問題がありました。上司に、どうしても飲めと言われるわけです。『これは自分で決めたことだし、ぜひ貫きたい、しかし、もしあなたがお飲みになりたいとおっしゃるんだったら、私は喜んでお注ぎしますよ』と、そんなふうにして切り抜けてきましたね。(笑)とにかく宴会では、お酒は飲まなくても、皆さんと一緒に楽しく過ごすことでしょね。」

## ●睡眠5時間、ボディービルで鍛錬

——1日は24時間しかないわけですが、時間をひねり出す秘訣は何かありますか？

「私の場合は、睡眠時間を5時間と決めて、そのほかの時間を全部仕事と教会の責任のために使えるようにしています。」

——ここ何年も睡眠5時間でやっていますか？

「28歳くらいからできるようになりました。昔は非常に体が弱かったんですが、ボ

ディービルで鍛えたおかげでしょうね。」

——ボディービルを始められた経過についてもう少し詳しく話していただけませんか。

「教会は非常にハードですね。私は体が非常に弱くて、夏と冬にだいたい1年の休暇分をほとんど寝込んでいました。こんなことでは神様の仕事が果たせないと思い、あるとき新聞にボディービルの広告を見つけて、早速資料を取り寄せたんです。ちょうど27歳くらいのときでしたね。そのときから狭い4畳半の部屋をボディービルの道場にして、バーベルを買い込み、毎朝会社に出勤する前に、5時から1時間半くらいトレーニングをするようになりました。ベンチがありませんでしたので家内の鏡のツールをベンチ代わりにして、ついにそれを壊してしまいました。(笑)そのときには朝飯5杯は軽かったですね。(笑)3年半くらいはボディービルを毎日続けました。それ以降は30分ほどですが、今でもずっと続けています。そのおかげで非常に体力がつきました。そのせいか睡眠時間も非常に少なくて済むようになって、人よりも余分に1日の時間を使うことができるようになりました。」



左から準子姉妹、啓介君(高校2年)、土田ステーキ部長、顕正君(中学2年)、愛砂さん(短大2年)、善樹君(4月に札幌伝道部専任宣教師に召された)

—どのくらいで効果が表われたんですか？

「1年目で、もうだいぶ変わりましたが、やはり何でも3年くらいは続けられないといけないですね。」

—食事のほうはどうか？今でも5杯食べていますか？

「そんなに食べてないです。(笑)今はお腹が出てくるのを防ぐために、玄米食をやっています。軽く2膳くらいですね。」

—土田部長にとって、仕事と家庭と教会のバランスをとるための鍵は、体力作りだということに気づかれたわけですね。

「そうですね。以前に、リー大管長が体が弱かったということをインスティテュートの『歴代大管長』のコースで勉強しましたが、大管長は目標の第1番に、体を鍛えることをあげていらっしゃいました。私もやはり、それが第1に必要なことだと感じました。」

—もう20年ほどボディービルを続けていらっしゃるわけですが、どうしたらそんなに長く続くのですか？

「ひとつは意志の力ということが言えるかと思いますが、健康というのはあらゆる面で大切なものです。神様のことをするために、家族を養っていくためにも、健康を害しては何もできません。強い肉体が精神を強めますね。そういうことで、続けることができていると思います。」

—ステーク部長に召される前はどのような責任に召されておりましたか？

「副伝道部長、地方部長、支部長などに召されましたが、地方部の評議員の時代が非常に長かったですね。西中央地方部と言って、名古屋以西、沖縄を除いた西日本全部です。」

—一番遠い所はどこですか？

「九州の福岡支部です。柳井、広島、岡山、京阪神地区、金沢、名古屋の10余りの支部を毎週のように訪問していました。」

—福岡に行かれるときは何時間くらいかかりましたか？

「土曜日の仕事を終えて名古屋を12時くらいの夜行で発って、日曜の朝着いて、そのまま支部に出席しました。その頃は5時間のプログラムでしたから、終わるのも遅いですね。やはりまた夜行で名古屋に帰って、月曜の朝着きますから、そのまま会社に直行でした。」

—そうすると荷物はたくさん要りましたよね。

「そうですね、聖典、テキスト、手引き、もうひとつ私が持って歩いたのは、特に寒い冬には寝袋をかついで持っていきました。大変でしたが、とても楽しかったですね。30代の頃でしたが。」

## ●4つの面で人格形成

—名古屋ステーク部の特色はどんなところにありますか？

「私たちの目的は、自分自身を完成させるということです。ただ教会にきているだけでは自分を高めることはできませんから、知的、霊的、情緒的、肉体的の4つの面で的人格形成をするのが第1の目的です。そのために、毎日の生活の中で目標を設定して人格を高めていくことを強調しています。今扶助協会では、毎週の定例集会の前に実践して得られた証を分かち合っているみたいですね。」



5月でステーク部長に召されて満7年を迎える。在任期間としては最も長い。

—それを推進するために、何か工夫していらっしゃいますか？

「以前からいろいろ作っていましたが、現在はステーク部手帳の中いくつかの項目と例をあげて、個人と家族の備え、人格を高める目標を書き込めるようにしてあります。毎月その中に自分でできたかどうかの評価を書ける欄も設けています。全会員が目標に向かって成長できるようにしてあるわけです。」

—今後名古屋ステーク部をどういうふうにしたいというビジョンをお持ちですか？

「私たちは、教会と仕事でとても忙しいので、あれもしなくては、これもしなくてはという、『大変だ』という気持ちが教会員

の中にあるかもしれません。しかし、私たちが毎週教会に集うのは、車にガソリンを積み込むのと同じです。自分自身を成長させる方法、家族や隣人を愛する方法、会社に貢献する方法、地域に奉仕する方法、苦難を克服する方法、試練を耐えぬく方法などのガソリンをタンクに入れ、教会から帰ったらそのガソリンの力で各々の場所へ走らせていくわけです。崖や山、海があり、平坦んで果てしなく続く道があったりしますが、神様から注がれたガソリンは、どんな険しい山道でも乗り越えられるという約束があります。そんなガソリンは世界のどこの石油会社にも売っていません。末日聖徒イエス・キリスト教会にだけある最良のガソリンを、近くで簡単に、しかも無料で手に入れることができるのは、すばらしいことだと思います。名古屋ステーク部の全会員が喜びをもって福音に生きてほしいと思います。」

—中学生、高校生を含めて若い兄弟、姉妹についてはどういうふうにお考えになっていらっしゃいますか？

「最近特にクラブ活動を、教会に出席するためにやめてしまう方がだいぶ増えてきました。彼らが福音に燃えている間は大丈夫なんですが、落ち込んでしまったとき、もしそこに楽しいプログラムがあったら、彼らはそれを通じて教会活動を楽しめるのではないかと思います。最も気軽にできるスポーツは何かということ以前から考えていましたが、バドミントンをステーク部内で盛んにして、若い人たちを外部からも連れて来れるように発展させていきたいと思っています。1月からスペシャリストも召して、活動していけるように計画しています。」

—ステーク部長ご自身のお立てになった今年の4つの目標は、どのようなものですか？

「知的目標としては、特に今年は職業と直接関係のある英語の勉強を頑張りたいと思っています。」

—どんなふう頑張るんですか？

「朝早く起きて、最低1時間は。特に英会話をやりたいと思っています。」

—霊的目標はどんなことをお立てでしょうか。

「自分の責任、個人、家長として、神様から導きを受けるために心から祈ることです。そして聖典を毎朝最低30分は個人として読むこと。」

## 〈あなたの証をお寄せください〉

●掲載される原稿のうち、自主投稿によるものは毎回2、3割にすぎません、それ以外は依頼原稿によるものです。毎号全国の何人かの監督さん、支部長さんに、それぞれのユニットから原稿を寄せさせていただきようお願ひしています。

●たとえ小さなものであっても、あなたが真心からの祈りと信仰によって得られた体験や証はとてつ貴い、すばらしいものです。それらはきっと同じような悩みを持つ方々の問題解決の一助となり、勇気と希望を与えるに違いありません。表現は多少拙なくとも、その体験が真摯なものであれば、多くの人々の心の琴線に触れるものとなるでしょう。すばらしい証を耳にしたとき、「投稿してみたら」とぜひ一言、その方に言葉をかけてみてください。皆様からの積極的投稿をお待ちしています。

●名古屋ステークス部長会による土田ステークス部長のインタビュー記事は編集部で企画してお願いしたものです。皆様からの証だけでなく、隠れた人柄、霊性といったものをかいま見ることのできる教会指導者へのインタビュー記事を今後増やしていく予定です。

●心に残った記事の感想文（「読者のひろば」で紹介し、各地の話題や行事、証、カットなどをお送りください。6月号掲載分の締切は4月8日、7月号は5月2日（必着）です。投稿には必ず連絡先（電話番号）を記入してください。

●お願い：皆様のワード部や支部で発行している新聞、あるいは機関誌を募集しています。編集室あてお寄せください。

●あて先：〒106 東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03-440-2351（代）

**訂正** 2、3月号ローカルページの8ページにあるカットを描いてくださった渡辺哲男兄弟の所属は「高崎ステークス小山支部」のまちがいでした。おわびして訂正します。



—肉体的な目標は。

「特に今年はさらに体力強化をねらって、時間をたくさん取ってやろうと思っています。以前は30分くらいでしたが、それよりも多く取って、1時間くらいはボディービルに費やしています。」

—ママさんバレーに参加していらっしゃるそうですが、どうやって潜り込んだんですか？

「去年の夏、息子が通っている猪高中学のPTAが名古屋市PTAバレー大会に出場するので、ぜひ出てほしいとの要請を受けたのです。妻がその中学のPTAの副会長をしていますし、学校教育と教会教育のタイアップの必要性を強く感じていた時期でもあったので仲間に入ったわけで、月に2度くらい練習しています。去年1回戦で惨敗しましたので、今年はその雪辱戦をというわけです。おかげでこの地域で活躍しているスポーツ関係の指導者と友達になれました。」

—情緒的な目標はどうでしょうか。

「箴言にあるように、いつも穏やかな、軟らかい対応を人にできるようにしなくてはと思っています。」

## ●「私を見ていなさい」

—お子さんを育てるうえで、モットーとしてこられたようなことはありませんか？

「特別にはありませんが、自分のことは自分でできるようにと、いつも言っています。上3人は最長9キロの学校まで自転車通学させました。舗装される前の道路が多かったせいか、よくパンクしましたが、修理道具を持って通わせましたので、ときどき友達のパンクも道端で直しているのを見かけたことがありました。また子供にも家庭の仕事を割り当てるといふこと。男の子も女の子も、食器を洗うことを毎日、順番にやっています。」

—子供さんには、今後どういうふうになってもらいたいですか？

「人のために喜んで自分の時間を犠牲にして働けるように、ということですね。いつでも、きょうも人のために奉仕することができるようにという祈りを必ず毎日入れるようにしています。まず、最も身近な家族のためにそれができたら、あとは簡単です。私自身が模範にならなければいけませんからね。子供たちが小さい頃はよく『私を見ていなさい、私のやっていることを見ていなさい』と言っていましたね。あまり

多くを言わないで。」

—子供さんに、『私のようになりなさい』と言えるのはすばらしいことですね。ずっと神権役員をしていらつしやって、安息日も週日の夜も子供さんと接する時間が少ないというのは、どの神権指導者の方にも言える悩みだと思いますが、その問題はどのように克服されましたか？

「長く時間が取れば一番いいんですが、短時間ですので、密度の濃いスキンシップを、と心がけています。時々私は子供たちとすもうをとったりします。特に家庭の夕べはいい機会です。教会員にとって家庭の夕べというのは非常に大切だと思っています。」

—密度を濃くするには、どういうふうにするといいんでしょう。

「子供たちの話題に私が入っていくことです。子供たちには、お父さんは若い人たちの事柄についてもっと知ったほうがいいと言うので、『お父さん、今こういうのが流行っているんだよ』と、子供たちから今の青少年の話題についてよく教えてもらったり、歌を教えてもらったりします。」

## 〔インタビュー後記〕

土田部長に関して、以前奥様の準子姉妹がお話されていた証を思い出しました。

結婚される時、その頃のある指導者から、「土田兄弟はだめだよ、あの人とあなたは合わないよ」と反対されたそうです。しかし、職場での彼のまじめな勤務、上司や同僚からの信頼、誠実で正直な人柄は、最も身近にいた彼女が一番よく知っていました。その本質を見抜いて結婚したことは、間違っていなかったと話されていました。第1回のハイ神殿訪問には、借金をして行かれたそうですが、そのときに土田姉妹は、土田部長がエンダウメントを受けて涙を流して喜んでおられるのを見て、「みたまを分かち合える人」と結婚できて本当によかったと思われたそうです。

私の知っている土田部長は、中部地方部の初代の地方部長であり、名古屋ステークスの初代のステークス部長であり、いつでも人々の先頭に立つ指導者です。そんな彼がかつてはひ弱ですぐ寝込んでしまったなどは信じられませんでした。でも、持ち前の強い意志と努力で「肉体を再新」したくだけりをお聞きして感心しました。彼の指導性と霊性もまた、同じように努力して伸ばしてこられたのでしょう。人を偉大にするものはこの意志と努力なのですね。